



TITLE:

元史刑法志譯注稿(二)

AUTHOR(S):

「中國近世の法制と社會」研究班

CITATION:

「中國近世の法制と社會」研究班. 元史刑法志譯注稿(二). 東方學報
1996, 68: 433-524

ISSUE DATE:

1996-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/66769>

RIGHT:

元史刑法志譯注稿（二）

「中國近世の法制と社會」研究班

軍 律

三六五 諸て、軍官、職を離れ、屯軍、營を離れ、行軍、その部伍を離るる者は、皆罪あり。⁽⁴⁾

(1) 禁衛軍たる侍衛親軍や、地方駐屯の各萬戶府所屬の、都指揮使・副都指揮使・達魯花赤・萬戶・千戶・百戶・鎮撫等の管軍官を指す（『元史』卷八八、百官二、樞密院）。

(2) 要地に屯駐していた鎮戍軍を指すと考えられる（『元史』卷九九、兵二、鎮戍）。

(3) 軍官・軍人が屯駐地で居住する營業のこと。『元典章』卷三四、正軍、軍人置營屯駐には「軍房城廓」「營屯」「軍營」の語が見える。

(4) 征討等のため移動中の部隊から離脱すること。

三六六 諸て、軍官、擅に部署を離れ、闕に赴き事を言うを得ず。必ず合に言うべき者あらば、實封して遞に附して以聞せよ。⁽¹⁾

(1) 附遞とは、急遞鋪で送達すること、「入遞」とも言う。『元史』卷一〇一、兵四、急遞鋪兵、『元典章』卷三七、遞鋪を參照。

三六七 諸て、隨處の軍馬、久遠に營屯する、或は時暫に經過するあらば、並びに官より糧食を給す。輒に農民を妨擾し、客旅を阻滯する者は、これを禁す。

(1) 『通制條格』卷七、口糧醫藥の至元二四年及び、同禁治擾害の大德三年正月の條がやや關連する。

三六八 諸て、陣に臨みて先に退く者は、死に處す。

【解説】『唐律』卷一六・擅興一一・主將臨陣先退、『武經總要』卷一四、罰條に同文がある。『唐律』の疏議に「臨陣交兵而先退」と

あり、臨陣とは戦闘状態になることを言う。いわゆる敵前逃亡を想定しており、こうした軍法は元朝に限らず必須の条件であったと言える。

三六九 諸て、統軍^①、寇盜を捕逐し、要害を分守するに、相い聲援を爲すと約して、稽留して期を失し、將士を殺死するを致し、仍お即ち^なに追襲せざる者は、死に處す。赦に會うと雖も、職を罷めて敘せず。

(1) 統軍とは、先の軍官(管軍官)の中で、實際に兵を率いて軍事行動中の者を指すと考えられ、『元史』及び『元典章』に散見される「統軍司」とは異なるであろう。

【解説】 統軍の官が、盜賊の制壓や要地の守禦のため、援軍を約束しておきながら、期日に遅れたため、死者を出した上、すぐさま追撃しなかった場合の規定。『唐律』卷一六・擅興八・征人稽留、『明律』卷一四・兵律・從征違期(二二六)がやや關係するが、本條のような具體的なケースを想定したものではない。

三七〇 諸て、軍・民官、邊陲を鎮守し、兵を帥いて賊を撃つに、紀律統なく、號令を變易し。約に背きて期を失し、形分れ勢格^まき^①、軍を破り將を殺さしむるを致す、或は未だ戦わずして逃歸する、或は城を棄てて退走するも、復た能く招徠^まの功を建つる者は、

その罪を減ず。功なき者は、各々その罪を以てこれを罪す。

(1) 軍事行動が阻害され制限されることとなり、自軍の形勢が不利になること。

(2) 招撫・招降の意。

【解説】 具體的状況を設定した條文であるが、量刑については、「減其罪」「各以其罪罪之」と記すのみで不明である。刑法志・軍律の條に擧がっている各文とは別の、あるいはそのものになっていると思われる「軍法」の存在が想定される。『唐律』卷一六・擅興一〇・主將守城棄去と『明律』卷一四・兵律・主將不固守は同内容であるが、刑法志本文の一部に關連するだけである。

三七一 諸て、防戍の軍人、屯所より逃ぐる者は、杖一百七。再犯する者は死に處す。若し出征を科定されて、逃匿する者は、斬して以て徇^なう^②。

(1) 『元典章』卷三四、逃亡、處斷逃亡例三款に同内容の文あり。

(2) 『元典章』には「若差定出征、逃走、但犯處死、就軍前對衆施行」とある。

【解説】 鎮戍の軍人が屯駐している營寨から逃亡した場合は杖一百七、再犯した場合は死刑、鎮戍の屯駐兵で出征に派遣されることが決まった者が逃匿した場合は、公開處刑とされた。元朝でも軍官・軍人の逃亡は頻繁にあったようであり、至元五年に定められた本條

の規定は、次の三七二條のように以後さらに改定され細かな規定が加えられていく(『元典章』卷三四、逃亡の各條参照)。『唐律』卷二八・捕亡七・從軍征討亡、同八・防人向防及在防亡、『明律』卷一四・兵律、軍政、從征守禦官軍逃の量刑はいずれも刑法志よりも軽い。

三七二 諸て、軍戸、貧乏にして已^①經に存恤せらるるも、復た逃ぐる者は、杖八十、發遣^②して軍に當つ。隱藏する者は、二等を減ず。兩隣、知りて首せざる者は、又隱藏の罪より二等を減ず^③。

(1) 『元典章』卷三四、逃亡、逃軍復業體例が關連するが、完全には一致しない。

(2) 『明律國字解』には「發遣とは、其徒流の所々へやるなり」とある。

(3) 當軍。出軍・充軍に同じ。

(4) 『元典章』では「停藏窩主」「窩主」とある。かくまう者の意。

(5) 『元典章』では「莫若照依犯人減罪二等約量科斷。兩隣知而不首、依上治罪」と記す。

三七三 諸て、軍戸、乏を告げて替を求むる者は、有司^①よりこれを覆實^②す。その詐妄なる者は、廉訪司これを究す。

(1) 『元典章』卷三四、軍戸、體問告貧難軍に同内容の文あり。

(2) 『元典章』では「單丁・貧難・無力・不能當軍者」とあり、成年男子が一人のみで、經濟的に貧しく、軍役に耐え得ないことを、軍戸が訴え出ること。

(3) 『元典章』は「本路」正官」とする。正官とは長官と佐貳官を合わせ言い(『明律國字解』)、路の正官とは、總管及び同治・治中・判官を言う。

(4) 『元典章』は「體覆」に作る。『吏學指南』に「體覆、謂究覆虛實」とある。

三七四 諸て、各衛扈從の漢軍、戸ごとに練習の壯丁一人を選びて常充し、仍お貼戸内^①より兩人を選びて輪番供役せしむ。その故ありて必ず合に替換すべき者は、萬戸より百戸に至るまで、換うる所の用うべきを相視し、然る後にこれを用う。百戸・千戸・萬戸、私に換えたる者は、名數の多寡を驗べ罪を論じて解降す。

(1) 『元史』卷八六、樞密院の條に見える衛及び親軍都使揮使司のこと。

(2) 『元史』卷九九、宿衛に「宿衛者、天子之禁兵也。……而其用非一端。用之於大朝會、則謂之圍宿軍、用之於大祭祀、則謂之儀仗軍、車駕巡幸用之、則曰扈從軍、……」とある。

(3) 貼戸。貼軍戸のこと。『元史』卷九八のはじめに「既平中原、發民爲卒、是爲漢軍。或以貧富爲甲乙、戸出一人、曰獨戸軍、

合二三而出一人、則爲正軍戸、餘爲貼軍戸」とある。『研究譯註』二八九頁参照。

三七五 諸て、管軍官吏、錢を受けて軍人の官名を代替せし者は、

己おのれに入れたる錢數を驗べて、枉法(3)を以て科罪し除名す。兄弟・子姪・驅丁をして代替せしむる者は、名數の多寡を驗べ、罪を論じて解降す。⁽⁴⁾

(1) 『元典章』卷三四、替補、軍官代替軍人に同文あり。

(2) 刑法志は「受錢代替軍空名者」とあるが、『元典章』には「受錢代替本管軍人官名者」とある。後者に従い「受錢代替軍人官名者」として訓讀した。

(3) 官員・胥吏が收賄して法を枉かげること。本刑法志六四條の注

(3) 参照。

(4) この部分については『元典章』には以下のように具體的な規定が見える。量擬、一名二十七、依舊勾當。二名・三名、三十七、削降散官一等、換授。四名・五名、四十七、解見任、降散官一等、別行求仕。六名・七名、五十七、降職事一等。八名・九名、六十七、降一等。每二名加一等、依例降叙、罪止二百七、除名不叙。錢並追沒。從つて解降は解任降官の略。

【解説】『唐律』卷一六・擅興五、征人冒名相代、『明律』卷一四・兵律、軍政、縱放軍人歇役（二三六）が關連條文である。ただ『唐

律』には「枉法」の場合の規定はなく、又『明律』は「歇役」のケースで「代替」ではない。『明律』で「代替」に關する規定は軍人替役（二二七）だが、これは軍人が自分で代替をはかる場合で、軍官・軍吏が行うものではない點で異なる。

三七六 諸て、軍馬征伐に、良民を虜掠し、兇徒射利し、人口を略賣する、或は自ら賊殺する、或は病亡を以て道路に棄屍し、溝壑に暴骸する者は、嚴に禁止を行う。

戸婚

三七七 諸て、匠戸(1)の子女、男むすこをして工事に習(2)い、女むすめをしてしゅうりやうに習(3)わしむ。その輒あたに敢えて拘刷する者は、これを禁ず。

(1) 元朝の戸計のうち、官營作業場で各種の器具・織物の手工業生産に従事する世襲身分。明もこれを受け繼ぐ。

(2) 製作作業の總稱。女工の行うしゅうりやう（刺繡）も本來これに含まれる。

(3) 強制的に徵用・徵發・徵收する意と考えられる。『元典章』卷五九、船隻、禁治拘刷船隻・禁治拘刷茶船・禁治拘刷鹽船に用例がある。

【解説】本條以下は、所謂戸婚田土の案と呼ばれる民事的性格の強

い、比較的軽い刑が科せられる犯罪に關しての條文が續く。三九七條までは、身分・戸籍・税役を中心とした規定である。

三七八 諸て、係官の差に當る人戸、⁽²⁾ 朝省の文字を奉ずるにあら⁽³⁾ずして、輒に諸王及び各投下に投充して給使する者は、⁽⁴⁾ 罪を論ず。

(1) 『通制條格』卷二、冒戸に同文あり。

(2) 係官當差人戸。一般民戸のことで、路府州縣の管下で税役を負擔する。民戸以外の者を民戸として登録することを收係當差と言う。

(3) 簡付など、中書省・尙書省から下される文書を指す。

(4) 『通制條格』では「曳刺・祇候」「官員勾當」とする。

【解説】 本條は、『通制條格』によれば、一般民戸が諸王や位下の曳刺・祇候に投充し、その權威をかさに着て問題を生じさせているのに對して、至元三年に出された聖旨に基づいている。故に處罰の對象は「係官當差の人戸」である。

三七九 諸て、⁽¹⁾ 僧道還俗し、兄弟析居し、奴放たれて良と爲りて、未だ籍に入らざる者は、應ゆる諸王・諸子・公主・駙馬、これを拘藏する母れ。民の敢えて隱藏する者あらば、これを罪す。

(1) 『通制條格』卷二、投下收戸の至元二十八年五月十九日の條に同内容の文あり。

【解説】 新たに「係官當差人戸」として「收係當差」すべき人戸が、投下の戸計となり、路府州縣の管轄下に入らないことに對しての條文である。元朝政府としては見過ごせないこうした事態が往々にして生じていたことをうかがわせる。諸王等に對しては禁止の通達のみで罰則規定は無いのが特徴である。

三八〇 諸て、⁽¹⁾ 庶民、妄りに漏籍の戸及び土田を以て、諸王・公主・駙馬に呈獻する者あらば、罪を論ず。諸投下、輒に濫收する者も亦たこれを罪す。

(1) 『通制條格』卷二、投下收戸の至元十九年十月の條が關係する。

【解説】 元朝において各種の漏籍（諸般の事情で登録漏れになっている）の人戸は、全て一般民戸として「收係當差」していたことは、『元典章』卷一七、籍冊、戸口條畫の隨所に見える。ただ三九四條との違いは必ずしも明確ではない。

三八一 諸て、⁽¹⁾ 官・吏、人戸を占して私用に供給する者は、罪を治す。

(1) 『通制條格』卷二、官豪影占の大徳七年三月の條に同文あり。
【解説】 『通制條格』卷二、官豪影占の至大四年七月の條には、本條の背景となっている状況を次のように述べる。江南三省所轄之

地、民多豪富兼併之家、專令子孫弟姪華裾駿馬根隨省官、恃勢影占、不當差役、營幹身事、把持官府、欺壓良民、以私害公。同大德三年六月初九日の條を參照すると、本來稅役を負擔する一般民戶が、官員や「豪富兼併之家」と呼ばれる有力者の支配下に下り、使役されること⁽¹⁾がままあつたようである。

三八二 諸て、有司、賦斂を治すること急にして、貧民の男女を鬻ぎて輸を爲す⁽¹⁾を致す者は、鬻ぐ所の男女を追還して、有司の罪を正す。價は償ふこと勿れ。

(1) 『通制條格』卷三、賣子圓聚が同内容である。

三八三 諸て、女を生みて溺死せしむ者は、その家財の半を沒し、以て軍を勞⁽²⁾う。首する者奴爲⁽²⁾れば、即ち以て良と爲す⁽³⁾。有司、舉を失する者は、これを罪す。

(1) 『通制條格』卷四、女多澣死が同内容である。

(2) 『通制條格』は「一半家財沒官與軍每者」と記す。生んだ女を溺死させた者の家の財産の半分を沒官し、軍人の犒設に當てる意。

(3) 『通制條格』は「首告的人每、若是軀奴呵、做百姓者」と記す。溺女を訴え出た者が奴の身分であつたなら、良民(＝百姓)とする意。

三八四 諸て、民戶、流移すれば、所在の有司起遣⁽¹⁾して復業せしむ。輒に闌遺⁽²⁾の人を以てこれを收むる者は、これを禁す。

(1) もとの居住地に送りとどける意と思われる。起解發遣あるいは起程發遣の略か。

(2) 逃亡・流亡により、本來の所屬や所有を離れてしまった奴隸や家畜のこと。李闌奚、不闌奚とも記され、闌遺監の管理下に置かれる。闌遺はすでに『唐律』に「闌遺物」の語が見え(卷二七、雜律六〇、得闌遺物不送官)、闌は「失う」意と考えられる。なお『吏學指南』には「闌遮也。路有遺物、官遮止之、伺主至而給與、否則舉沒於官」とあり、闌を「さえぎる」意とする。『通制條格』卷二八、闌遺、『元典章』卷五六、闌遺を參照。

三八五 諸て、鰥寡孤獨・老弱殘疾、窮して告ぐる無き者は、養濟院⁽²⁾において收養す。應に收養すべくして收養せず、應に收養すべからずして收養する者は、その守宰を罪し、按治官、常にこれを糾察す。

(1) 『通制條格』卷四、鰥寡孤獨の至元十九年十月條、『元典章』卷三、惠鰥寡の至元十九年條に同文あり。

(2) 『通制條格』『元典章』の他、『元史』卷九六、賑恤、鰥寡孤獨賑貸之制に「(至元)十九年、各路立養濟院一所、仍委憲司

點治」とある。『至順鎮江志』や『至正四明續志』の公廨・公宇の條でも、路・州・縣に養濟院が設置されているのが確認できる。

- (3) 養濟院が置かれている路・府・州・縣の長官の總管・知府・知州・縣尹。ただし『通制條格』『元典章』には「委本處正官一員主管」とあることから、必ずしも長官であるとは限らなかった。

三八六 諸て、被災の流民、有司招諭して業に復さしむ。その年深にして業に復する能わざる、及び所在を失する者は、その賦を蠲く。輒に民を抑して包納せしむる者は、臺憲官よりこれを糾す。

- (1) 『元典章』卷三、恤流民の至大二年二月某日又一款に同内容の文あり。

(2) 本來は擔當官廳という程の意味であるが、元以後明清では府州縣の官員つまり地方官という意味で使われることが多い。『元典章』では「管民官」とする。

- (3) 『元典章』は「不知下落」とする。流亡する以前の居住地が不明という意味。

(4) 『史學指南』には「謂包納一處錢糧納官」とあり、『六部成語註解』に「包稅。各稅、由里長或各行包納者、曰包稅」、「包攬。攬管也。一鄉之中、或紳士・里正之輩、專管包納民人錢糧之事」

とある。又『元典章』には「諸處流移戶計合納差稅、勿令見戶包納、靠損百姓」とある。要するにここでは、流亡して居なくなった民戸の分の稅役を、残った民戸に肩代りさせて一緒に納入させることである。

三八七 諸て、年穀熟さず、人民轉徙し、至る所既に賑濟を経るも、復た黨を聚め仗を持し、財物を剽劫し、平民を毆傷する者は、孤老・殘疾にして自贍する能わざれば、任便に居住し、有司前に依りて存養するを除き、その餘の子弟ある者は、その家口を驗べ、程の遠近を計りて、行糧を支與し、次第に元籍に押還す。沿路に復た民の害と爲る者は、所在の有司より斷遣す。

- (1) 『元典章』卷五七、禁聚衆、流民聚衆擾民に同内容の文あり。

(2) 仗は武器のこと。

(3) 道中の食糧のこと。

(4) 『元典章』には「每起不過三十人、一程程接送至本郷」とある。

(5) 斷遣。『元典章』は「要了罪過、交發還本籍去」とある。斷罪起遣、斷罪發遣の略で、刑を執行した上で本籍地に送還することと考えられる。ただし『譯注稿（二）』三〇一條の注(2)では斷遣を斷罪決遣として解釋しており、本條の斷遣とはやや意味を異にする。

三八八 諸て、蒙古・回回⁽¹⁾・契丹・女直・漢人、軍前に俘せらるる所の人口、家に留まりたる者は奴婢と爲し、外に居りて附籍する者は即ち良民と爲す⁽⁵⁾。已に外に居るも、復た認めて奴婢と爲す者は、その家財を没入す⁽⁶⁾。

(1) 『通制條格』卷二、戸例、驅良蒙古牌甲戸驅、『元典章』卷一七、籍冊、戸口條畫の驅良 蒙古牌甲戸驅に同内容の文がある。

(2) 元來、イスラム教徒の汎稱(『譯注稿』(一)一七七條の注(3)参照)であるが、ここでは色目人一般とはば同義で用いられているように思われる。

(3) 原文「留家者」。『通制條格』『元典章』には「在家住坐」とある。軍事行動に伴い捕虜となった人間で元の居住地で生活している者を指すと思われる。

(4) 『通制條格』『元典章』には「因而在外住坐、於隨處附籍」とある。捕虜となり、元の居住地を離れて生活しており、すでにその場所で戸籍に登録されている者のこと。

(5) 『通制條格』『元典章』には「便係是皇帝民戸、應當隨處差發」とする。

(6) 『通制條格』『元典章』には「主人見、更不得識認。如是主人識認者、斷按答奚罪戾」とある。元居住地を離れ、すでに現住地で登録されている者を、主人が自分の奴婢として使役する場合に、その主人の家財を没官する、との意。

三八九 諸て、叛亂を收捕する軍人、生口を掠取すれば、並びに按治官及び軍民官より、一同に審問す⁽²⁾。實に賊黨の妻屬爲る者は、公據を給してこれに付し、公據無き者は、良民を掠するの罪を以てこれを罪す。

(1) 『通制條格』卷三、被虜平民の至元二十五年六月條、『元典章』卷五七、禁乞養過房販賣良民に同内容の文あり。

(2) 『通制條格』には「合委按察司官與軍・民官、審問分揀」とあり、『元典章』には「本管出征軍官與所在官府、隨即一同從實分揀」とある。反亂軍の鎮壓部隊が捕虜とした人間については、鎮壓部隊を統轄する軍官と提刑按察司官(のちの肅政廉訪司官)・當地の管民官が、合同でその捕虜が賊軍の関係者であるかどうかを調査する意。

(3) 『元典章』では「但係良人、就付完聚。委係賊屬、從本管萬戸・千戸出給印信、執照」とする。調査の結果、捕虜が賊軍関係者と判明したなら、當地の萬戸・千戸が證明書を軍人に發行してやるのである。

三九〇 諸て、群盜、降附して、劫掠する所の男女を以て、收捕官の饋獻に充つる者は、受くる勿れ。仍お還して民と爲す。親屬の收係すべき者無ければ、男女をして相配せしめ、民と爲すを聽す。その賊所に留まりたる者は、悉くこれを縱つ⁽³⁾。

(1) 『通制條格』卷三、被虜平民の至元二十七年十一月二十五日條、『元典章』卷五七、禁誘略、反賊拜見人口爲民に同内容の文あり。

(2) 群盜で投降する者が、かつて劫掠した男女を、群盜の捕獲に派遣されてきた軍官へのつけとどけに差し出すこと。『元典章』では「江南草賊生發、劫掠平民子女・財物。官司調兵收捕、賊有降者、將劫擄財物・男女、於收捕官處作拜見撒花」と記す。

(3) 親屬で引き取る者が無い場合は、その男女同志で結婚して夫婦とならせる意。

三九一 諸て、掠せられたる婦人を收到するに、その郷里を忘れ、並びに親屬の歸すべき者無ければ、有司これに嫁聘を與う。得る所の聘財は、粧束に資するを與う。

(1) 『通制條格』卷四、嫁娶の大徳七年正月條に同内容の文あり。

(2) 『通制條格』には「所得財錢、就給本婦妝束」とある。本來聘財は、夫の家から嫁の實家へ支拂われるべきものであるが、この場合嫁の親屬が無いので、嫁本人に支給して嫁入り道具の費用に當てさせる意。

三九二 諸て、軍・民官、輒に降附の人民を隱藏して、業に復せしめざる者は、これを罪す。

【解説】 かつて盜賊・群盜となり罪を犯した者が管軍官や管民官の下に投降してきた場合は、民戸として農業に従事させ「收係當差」すべきであるのに、官員がこれを私的に占有してしまふことに對する禁止規定。

三九三 諸て、籍没の人口、元主私に典賣する者は、追收して官に入れ、價を徴して主に還す。

【解説】 沒官處分となった奴婢を、もとの主人が勝手に典賣（買戻権付き賣却）した場合は、奴婢は典買主から取戻して沒官し、もとの主人が受取った奴婢の代金は、典買主に返すという規定。

三九四 諸て、投下の官員、已に籍する係官の民・匠戸計を招占する者は、その家財を沒し、占する所の戸は本籍に歸す。

(1) 一種の封建所領である投下領ではなく、國家の行政官廳（路・府・州・縣）の管下にあるの意。

(2) 係官の民戸・匠戸を自己の私有民として招き入れて占有（影占）した投下の官員の家財。

三九五 諸て、投下籍する所の戸、五戸絲を出さしむ。餘は悉く與かる勿れ。

(1) 『通制條格』卷二、非法賦斂に同内容の文あり。

- (2) 元朝時代華北の投下領の民戸に課された税目。五戸で絹糸一斤(十六兩)を出すことからこの名がある。実際には投下の戸數に應じて、中央政府から投下諸王等に毎年支給されていた。安部健夫「元時代の包銀制の考究」(『東方學報 京都』二四、一九五四、のち『元代史の研究』、創文社、所收) 参照。
- (3) 『通制條格』では「除五戸絲外、不揀甚麼、差發不教科要」とある。五戸絲以外の税負擔は一切徴收してはならない、の意。

三九六 諸て、俗を棄て出家して僧・道と爲らんことを願ひ、若し本戸丁多く、差役闕かず、及び兄弟の以て父母を侍養するに足る者あらば、本籍の有司に陳請し、保勘して路に申し、據を給して簪剃せしむ。違ひし者は、罪を斷じて俗に歸せしむ。

- (1) 『通制條格』卷二九、給據簪剃、『元典章』卷二、重民籍の大德八年二月某日の條に同内容の文あり。

- (2) 僧・道となろうとする本人が「收係富差」されている州縣を指す。

- (3) 保勘は『明律國字解』には「委官保勘とは、官人を遣して吟味することなり。保はうけあふことなり。吟味をするは、其役人がたしかに吟味をしたるとうけに立つ意なるゆへ、吟味することを保勘と云」とある。『通制條格』『元典章』では「勘當是實、申覆各路給據」とある。本籍地の州縣が、僧・道となる

條件に合致するかどうかを調査した上で、條件に合致すると保證して上級官廳の路へ申文を送ること。

【解説】『通制條格』『元典章』によれば、大德八年當時、軍戸・站戸・民戸・匠戸を問はず僧・道となり、差役を規避する者が多く、そのため貧しい戸の負擔が重くなり、國家としては見過ごしに出来ない狀況が生じていたようである。本條はこうした狀況に對し一定の齒止めをかけようとするものであった。

三九七 諸て、河西の僧人、妻子ある者は、差發・税糧・鋪馬・次舍に當つること、庶民と同じ。その妻子無き者は、これを蠲除す。

- (1) 『通制條格』卷二九、河西僧差税に同内容の文あり。

- (2) 唐兀とも記す。舊西夏王國領域のことで、黄河以西にあたるのでこう呼ぶ。元朝では甘肅行省が置かれた。

- (3) 差發はここでは「科差」の意——『元典章』卷二五、差發の各條においても「差發」は「科差」の意で使用されている——と考えられる。税糧・科差はともに、元朝時代江北の漢地に施行された税制である。税糧は、戸等制を媒介とした戸割りの穀物税で、壯丁一人當りに課せられる丁税と、畝當りで課せられる地税から成っていた。科差とは、やはり戸等制に基づく戸割りの非穀物税で生糸(絲料)・紙幣(俸鈔)・銀(包銀)から

成っていた。

- (4) 驛站維持に站戸が負擔する馬・車・食糧・調度品等の供應物のこと。

- (5) 『通制條格』は「掃里」に作る。『研究譯註』には「掃里(saguri)モンゴル語で座席・住居・宿所などを意味するが、本條の場合は、いかなるものか必ずしも明らかでない。……これら諸王の宿所を指すと思われる」(第三冊六五頁)とある。諸王等モンゴルの有力者が移動途中で宿泊する場合に、當地に在住の民戸に科せられた負擔を指すのではないだろうか(『通制條格』卷二七、諸王經行科斂の條參照)。

- (6) 民戸のみではなく、站戸等の他の諸色戸計をも含む、廣義の意と思われる。ただし、驛傳制度が整備される以前には、狹義の民戸にも驛傳關係の負擔があった(『研究譯註』第一冊、四一頁參照)。

三九八 諸⁽¹⁾て、父母在⁽²⁾して、財を分ち居を異にし、父母困乏するに、子の職を共⁽³⁾しまさる、及び同宗有服の親、鰥寡孤獨・老弱殘疾にして、自存する能わず、養濟院に寄食して、收養を行わさる者は、重くその罪を議す。親族も亦た貧にして、給する能わさる者は、養濟院に收録するを許す。

- (1) 『通制條格』卷三、收養同宗孤貧に同内容の文あり。

- (2) 『通制條格』では「或自己産業増盛、而父母日就窘乏者、子孫視猶他家、不勤奉侍、以爲既已分另、不比同居」とやや具體的に記している。共は供に同じ。

【解説】『唐律』卷一二・戸婚六・子孫別籍異財、『明律』卷四・戸律・別籍異財(九三)ともに、祖父母・父母が存命中に子孫が別籍異財した場合、それだけで罪に問われる規定となっており、十惡の不孝に當てられた。

三九九 諸⁽¹⁾て、田宅を典賣するには、有司より據を給して契を立て、買主・賣主は隨時有司に赴きて、税糧を推收⁽²⁾す。若し買主權豪にして、官吏阿徇し、即ち過割せず、止だ賣主をして税を收めしめ、或いは爲に別戸に分派して包納せしめ、或は爲に詭名を立つれば、但し分文の贓を受くる者は、笞五十七。仍お買主の名下より、元價を驗べて追徴し、半ばは以て官に沒し、半ばは告ぐる者に付す。首領官及び掌る所の吏は、罪を斷じて役を罷めしむ。

- (1) 『元典章』卷一九、典賣、典賣田宅告官推收に同内容の文あり。

(2) 田宅の賣買に伴い税簿上で税糧の負擔者を換えること。賣主の税糧は税簿上から推し出され、買主の税簿上に税糧が收められる意。後文の「過割」も「推收」と類語。

- (3) 『元典章』には「如有官豪勢要之家買田產、官吏人等看循不

即過割、止令賣主納税」とある。土地の買い手が中央の大官と繋りがあるような有力者であった場合、租税簿上での變更手續きをする官員や胥吏が、この買い手である有力者にはばかりおもねって、すぐさま税負擔者の變更を行わず、賣り手であるもとの土地所有者に税を收めさせていたのである。過割とは、過戸割糧の略で、推收を別の面から言いかえたもの。

(4) 三八六條の注(4) 參照。

(5) 『明律國字解』に「詭名とは、……外の人の名を名のるなり」とある。『元典章』には「虛立詭名」とある。實際には存在しない架空の戸名を、税簿(・土地臺帳)上に書き入れることと思われる。

(6) 『元典章』は「分文錢物」とある。一分・一錢といったわずかな賄賂の意。

(7) 『元典章』には「於買主名下、驗原買地價錢追徵、一半沒官、於内一半、付告人充賞」とある。土地の買い手から、その土地の買い取り價格と同じ額の錢を徵收し、半分は官に沒し、半分は訴え出た者に褒賞として與える意。

(8) 『元典章』には「典吏・司吏」とある。

【解説】 以下四〇二條まで、田宅の典・賣に關する條文が續く。

四〇〇⁽¹⁾ 諸て、田宅を典賣するには、須らく尊長より書押し、據を

給し帳を立て、有服の房親及び隣人・典主を歴問すべし。交易を願わざる者は、十日を限りて批退す⁽⁷⁾。限に違ひて批退せざる者は、答一十七。願う者は、十五日を限りて價を議し、契を立て交を成す。限に違ひて價を酬せざる者は、答二十七。任便に交易す⁽⁹⁾。親・隣・典主⁽¹⁰⁾故らに相い邀阻し、書字・錢物を需求する者は、答二十七。業主高價を虚張し、相い由問せずして交を成す者は、答三十七。仍お親・隣・典主の百日(内)に收贖するを聽し、限外に爭訴するを得ず。業主欺昧して、故らに交業せざる者は、答四十七。親・隣・典主の他所に在る者、百里の外は、由問の限に在らず。若し例に違ひて事覺れたるに、有司理を以て聽斷せざる者は、監察御史・廉訪司これを糾す。

(1) 『元典章』卷一九、典賣、典賣批問程限及び同新集戸部、交易、典賣批問程限に同内容の文あり。

(2) 署名すること。『元典章』は「畫字」とする。

(3) 『通制條格』卷一六、典賣田產事例の至大元年十月條に「今後、諸軍戸典賣田宅、先須於官給據、明立問帳、具寫用錢緣故」とあることからすると、州縣から證明書を發行して問帳と呼ばれる書類を作成し、そこに何故に錢を必要として土地を典賣するのかということを書き入れることと思われる。

(4) 親屬のうち服喪の義務のある者。即ち總麻以上の親を指す。

(5) 典賣地と自分の所有地が隣接している者のことで、四隣とも

言う。隣人は有服の親とともに、不動産の先買権を保持していた。『宋刑統』卷一三、典賣指當論競物業に「一、應典賣・倚當物業、先問房親、房親不要、次問四隣、四隣不要、他人並得交易」とあるのが参考となる。

(6) この「典主」は衍字と思われる。ただし、『元典章』にも「典主」は「隣人」の次に書かれている。

(7) 典賣の対象となる土地の先買権を有する有服の親・四隣の者に、順次その土地を典買したい者がいないか問うて、一人もない場合、十日以内に批退を行う。批退は前掲『通制條格』に軍戸の田宅を典賣する場合について「先儘同戸有服房親並正軍・貼戸。如不願者、依限批退。然後方問隣人、典主成交」とあることからすると、典賣の契約書類を作成して土地を賣却する前に、先買権を有する者が、自らは當該の土地に關してはその權利を行使しない旨批書することではないかと思われる。

(8) 土地の先買権保持者が典買を望む場合は、の意。

(9) この一句を『研究譯註』では下文につなげて讀んでいるが、上文に續くと考えられる。土地の先買権保持者が典買を希望し、契約書を作成したが、十五日の期限内に土地の典買代金を支拂わなかった場合、その者は答二十七に處され、土地は土地所有者が、先買権保持者の意向に關係なく、自分の意のままに典賣することとする、の意であらう。

(10) 典主とは、本來は典買人を意味し、典買により土地を入手した所謂錢主のことであるが、本條ではこの意味では使用されていないようである。本條後文に「仍聽親・隣・典主百日收贖」とあり、收贖(買戻し)が許されていることから、本條の典主は典賣人、即ち業主を指すと考えられる。

(11) 不動産の典賣に際して、親族・隣人・典賣主がなんくせをつけて、典買人に不當に書類(あるいは文言^{もんごん})や錢物を要求すること。

(12) 業主——本條では典買人の意。本來は典賣人の意——が、むやみに高い値段を提示し、先買権保持者の承諾なしに不動産を典買した場合、の意。由問は『通制條格』卷三、駟女由使嫁等に用例が見える。ある權利・權限を有する者に對し、その承諾を得、確認を得ることと考えられる。

(13) 典賣から百日以内であれば買戻しを許されている、親族・隣人・典賣人が收贖しようとしても、典買人が不正に不動産の讓渡を拒んだ場合は、の意。

【解説】元代における田宅の典賣に關しては、陳高華「元代土地典賣的過程和文契」(『中國史研究』一九八八年第四期)がある。

四〇一^① 諸て、軍官・軍人、營屯に歸らず、任に到る官員、官舎に歸らず、往來の使臣、館驛に歸らずして、輒に民家に居止し、民

の害と爲る者は、行省・行臺起遣究治す。⁽²⁾ 任に到る官、官舎無く、私錢を出して僦居する者は聽す。

(1) 本條に關連するものとしては『元典章』卷三四、正軍、軍人置營屯駐、同卷三六、使臣、使臣驛内安下がある。

(2) 行中書省・行御史臺から人員を派遣して調査の上處罰する意か。あるいは起遣は、不正に居住している民家から立ちのかせて、本來の場所へ送付する意味かも知れない。

四〇二 諸て、謀を造し、已に賣りし田宅を以て、買主占奪すと誣し、錢物を脅取する者は、贓を計りて罪を論ず。仍お紅泥粉壁し過を門に書す。⁽¹⁾

(1) 『通制條格』卷二八、豪霸遷徙に「紅泥粉壁標示過惡」「於門首、泥置粉壁、書寫過名」とあり、『元典章』卷四九、警跡人警跡人轉發元籍には「門首直立紅泥粉牆壁、開寫姓名・所犯」とある。犯人の家の門の壁に白壁を設置し、赤い泥で本人の名と罪名（あるいは犯罪内容）を記すこと。『研究譯註』は「民家の外壁に赤色の泥を塗り、一見して罪人の家であることがわかるようにすること」とする。

四〇三 諸て、⁽¹⁾ 婚田の訴訟、⁽²⁾ 必ず本年において結絶す。⁽³⁾ 已に務停を⁽⁴⁾ 經るも結絶せざる者は、廉訪司及び本管上司より、官・吏の罪を

正す。務停を累經するも、⁽⁶⁾ 結絶せざる者は、⁽⁷⁾ 即ちに歸結を與え、務停の限に在らず。⁽⁸⁾ 違う者は、罪亦たかくの如くす。その争う所の田内の租入は、税を納むるの外、並びに有司より收貯し、斷後田に隨いて給付す。⁽⁹⁾

(1) 『通制條格』卷四、務停、『元典章』卷五三、停務、年例停務月日及び争田詞訟停務に關係條文がある。

(2) 『元典章』には「應告田宅・婚姻・良賤事理」の語が見える。所謂「戸婚田土の案」という、相續・婚姻・不動産等をめぐる民事的な性格の強い案件のこと。

(3) 結絶とは、案件の審理が終了し結審すること。

(4) 務停。停務とも言い、「戸婚田土の案」に關し、一年のうち一定期間——農繁期の三月一日から九月末日まで——その受理や審理を停止して行わないこと。三月一日を以て務停期間となることを「入務」、十月一日に務停期間が終わり裁判事務が開始されることを「務開」と言う。「已に務停を經るも」とは、「一度務停を經たが」の意。

(5) 本管上司とは、州・縣の上の路總管府を指すと思われる。

(6) 數度にわたつて務停を經過しても、の意。

(7) 歸結は、『吏學指南』に「謂事應杜絶也」とあり、『明律國字解』には「落着することなり」とある。

(8) 務停期間であつても裁判の審理を行う意。

(9) 訴訟の対象となっていた農田の收穫物は、税額分を除き、州縣で貯積しておき、判決が下り農田の所有者が確定したなら、その者に與える意。

【解説】 所謂「務停の法」に關連した條文である。本條には直接關係ないが、『宋刑統』卷二三、婚田入務では、訴訟の不受理・不審理は四月一日から九月末日、『宋會要』刑法三十四六、紹興二年三月十七日條では、二月一日から九月末日となっており、いずれも元代とは異なっているのは興味深い。植松正「務限の法と務停の法」

（『香川大學教育學部研究報告』I—八六、一九九二）参照。

四〇四 諸て、女子を以て人に典雇する、及び人の子女を典雇する者は、並びにこれを禁止す。若し已に典雇するも、婚嫁の禮を以て妻妾と爲さんことを願う者は、聽す。

(1) ここでは人間を擔保として相手方に與えて金錢を借用する、人身の賃貸借を意味している。典僱に同じ。『明律國字解』には「典はかねのかたに遣して、金を還さば妻妾を還せと約束するなり。雇は、日をきりてかすなり」とある。

【解説】 元朝においては、男・女・成年・未成年を問わず人間を典僱することは禁止される方向にあった。『元典章』卷五七、禁典僱、典僱立周歲文字及び典僱男女を參照。『明律』卷六、婚姻、典雇妻女（一〇八）は、女性の典雇のみを禁じている。人身の典雇につい

ては、仁井田陞『補訂中國法制史研究・土地法取引法』、東京大學出版會、一九六〇、六一八〜六二九頁參照。

四〇五 諸て、錢を受け、妻妾を典雇する者は、禁す。その夫婦同に雇せられて、相い離れざる者は、聽す。

(1) 『通制條格』卷四、典雇妻室、『元典章』卷五七、禁典僱、禁典僱有夫婦人にはほ同内容の文あり。ただし「妾」の語は見えない。

四〇六 諸て、財を受け、妻妾を嫁賣する、及び弟妹を過房する者は、禁す。

(1) 『通制條格』卷四、嫁賣妻妾、『元典章』卷五七、禁典僱、典僱妻妾の條と、『通制條格』卷四、過房男女の大德三年四月條、あるいは『元典章』卷五七、禁誘略、兄不得將弟妹過房の條を合わせたものが本條である。

(2) 『明律國字解』に「嫁賣は、外へ縁につけ、或は賣るなり」とあり、嫁と賣を分けているが、ここでは他人に嫁として賣ることであろう。

(3) 過繼とも言う。同宗の昭穆相當の者を承繼のため養子とすること。又その養子を「嗣子」と稱する。『明律國字解』は「同姓の養子なり」とする。滋賀秀三『中國家族法の原理』（創文

社、一九六七）五七六頁參照。

四〇七 諸て、男女を乞養・過房する者は、聽す。轉賣して奴婢と爲す者は、これを禁す。奴婢、良民を過房する者は、これを禁す。⁽³⁾

(1) 『通制條格』卷四、過房男女の至元二十七年五月の條あるいは『元典章』卷五七、禁誘略、過房人口の條と、『通制條格』卷四、過房男女の大徳元年九月の條を合わせたもの。

(2) 異姓の他人の子を恩養的に養子とすること。その養子を「義子」と稱する。『明律國字解』は「他姓の養子なり」とする。

滋賀前掲書五七六頁以下參照。

(3) 良民が過房により、賤民身分に落ちることは許されなかったのは當然である。

四〇八 諸て、守宰、部民⁽¹⁾の男女を抑取して奴婢と爲す者は、杖七十七、期年の後二等を降して雜職⁽³⁾もて敘す。

(1) 守宰。路・府・州・縣の長官である總管・知府・州尹・知州・縣尹を指す。

(2) 部民。州・縣管下の民を指す。

(3) 解任して、十二箇月後にもとの品階から二等ランクを下げて雜職と呼ばれる下級財務官に任用する意。

四〇九 諸て、妄りに良人を認めて奴と爲し、非理に残虐する者は、杖八十七。官ある者は、これを罷めしむ。

(1) 『元典章』卷五七、禁誘略、品官誘略良人爲駟に同内容の文あり。

四一〇 諸て、良と訴えて實を得れば、據を給して居住せしめ、元籍の親屬の收領を候つ。親屬無き者は、自便せしむるを聽す。⁽³⁾

(1) 『通制條格』卷四、訴良人口、『元典章』卷五七、禁誘略、人口無親屬者從其所願に同内容の文あり。

(2) 『通制條格』には「委令事發官司、先給公據、止於所在權且羈留」とある。訴えを受けた官司から證明書を發給し、當面はその場所に住まわせておく、の意。

(3) 『通制條格』には「如無親屬、男子去就、從其所欲、婦人願召嫁者、亦聽自處」とある。

四一一 諸て、奴婢、主に背いて在逃するは、杖七十七。

【解説】『唐律』卷二八・捕亡律一三・官戸奴婢亡に奴隸の逃亡規定が見えているが、『明律』には見えない。

四一二 諸て、男女婚を議し、指腹割衿を以て定と爲す者あらば、これを禁す。⁽²⁾

(1) 『通制條格』卷四、嫁娶の至元六年四月の條に同内容の文あり。

(2) 『通制條格』では「以指腹並割衫襟爲親」とする。男女が母の胎内にあるうちに、雙方の親が預め婚約をすること。指腹裁襟とも言う。

【解説】『通制條格』には「既無定物・婚書、難成親禮」とあり、聘財の授受、婚書（婚約證書）の交換が行われない場合、定婚（婚約）成立とは認め難いとしている。

四一三 諸て、嫁娶の家、飲食宴好し、成禮に足るを求め、華侈を以て相い尙び、暮夜休まざる者は、これを禁す。

【解説】結婚の儀を行う際に、宴會が華美に走りがちな風潮を戒めたものである。

四一四 諸て、男女の婚姻、媒氏例に違ひて多く聘財を索む、及び多く媒利を取る者は、衆に諭して決遣す。

(1) 『通制條格』卷四、嫁娶の至元十九年四月の條に同内容の文あり。

(2) 媒、媒人、媒合とも言い、婚約に際しての立會人・證人を言う。『明律國字解』には「媒合は、なかなかふとなり」とある。

(3) 財禮とも言う。兩家が婚約する際に、夫の家から妻の家へ送

られる錢貨、結納金。『明律國字解』には「聘財とは、ゆいれなり」とある。

(4) 媒氏が仲介料・手数料として受け取る錢物。『通制條格』には「亦不得拾分中取要壹分媒錢」とあり、媒氏が受取る手数料は聘財の十分の一以下であったと思われる。

(5) 『通制條格』では「諭衆斷決」とする。『明律國字解』に「斷決とは、杖罪に申付ることなり」とある。口頭で關係者一同に注意を申し渡した上で、媒氏を杖罪に處することであろう。

【解説】本條の「婚姻」は定婚すなわち婚約を指している。元朝における定婚については、『元典章』卷一八にまとまった史料が存在する。

四一五 諸て、女子、已に許嫁して未だ成婚せず、その夫の家叛逆を犯し、應に没入すべき者、若しくはその夫盜を爲す、及び流遠を犯す者は、皆改嫁を聽す。已に成婚して子あらば、その夫盜を爲し罪を受くると雖も、改嫁する勿れ。

(1) 『明律國字解』に「未成婚とは、いまだ婚禮はせぬ前なり。已成婚とは、はや婚禮したる後なり」とあるのが参考となる。

婚約はしたが、まだ結婚式はすませていない意。許嫁については『唐律』卷一三・戸婚二・許嫁女輒悔に「疏議曰、許嫁女已報婚書者、謂男家致書禮請、女氏答書許訖」とある。婚書の

交換がすみ、定婚¹婚約が成立することを言う。

(2) 唐律で言うところの十惡のうち、謀大逆・謀叛を指す。

(3) 再婚の意。

四一六 諸て、男女既に定婚し、その女、姦を犯して事覺われ、夫の家が棄せんと欲すれば、則ち聘財を追還す。棄せざれば、則ち半を減じて成婚せしむ。若し夫の家輒に詭わるに姦事を風聞するを以てし、恐脅して成親する者は、笞五十七、これを離す。

(1) 『元典章』卷一八、休棄、定婦犯姦棄娶に同内容の文があるが、「若し…」以下は見えない。

(2) 本條では、婚約した女性が、婚約相手以外の男性と關係をもつ意。

(3) 離婚すること。放、出、休とも記す。

(4) 女の家から聘財を夫の家にとり返すこと。

(5) 結婚式を行い、男女が正式に夫婦（夫妻）となること。

(6) 成婚と同意と思われる。四一八條參照。

四一七 諸て、父母の喪に遭い、哀を忘れて、靈を拜して成婚する者は、杖八十七、これを離す。官ある者はこれを罷めしむ。仍おその聘財を没し。婦人は坐せず。

(1) 『元典章』卷一八、服内婚、服内成婚が關連する。

【解説】『唐律』卷一三・戸婚三〇・居父母夫喪嫁娶以來の大原則であり、『明律』卷六・戸律三・居喪嫁娶へと受け繼がれる。

四一八 諸て、服内の定婚、各々服内成親の罪より二等を減じ、仍おこれを離す。聘財は官に没す。

(1) 『元典章』卷一八、服内婚、服内成婚が關連する。

【解説】前の四一七條が服喪期間中の「成婚」に關しての條文であるのに對し、本條は服喪期間中の「定婚（婚約）」に關しての處罰規定である。又本條の「成親」の用法からして、「成親¹成婚」と考えてよさそうである。

四一九 諸て、女ありて許嫁し、已に報書する、及び私約ある、或は已に聘財を受けて、輒く悔いる者は、笞三十七。更めて他人に許す者は、笞四十七。已に成婚する者は五十七。後娶の情を知る者は、一等を減す。女は前夫に歸す。男家の悔いる者は、坐せざるも、聘財を追さず。五年故無くして娶らざる者は、有司據を給して改嫁せしむ。

(1) 『元典章』卷一八、嫁娶、定婚不許悔親、同新集戸部、嫁娶、定婚不許悔親別嫁に同内容の文あり。

(2) 『唐律』、『元典章』、『明律』はともに「報婚書」とする。『唐律』卷一三・戸婚二一・許嫁女輒悔に「疏議曰、許嫁女已報婚

書者、謂男家致書禮請、女氏答書許訖」とある。定婚（婚約）成立要件の一つとして、兩家が婚書を交換すること。『明律國字解』は「報婚書とは、女の方より婚書の返事をしたるなり」とある。

（3）前掲『唐律』の律本文の注に「約、謂先知夫身老・幼・疾・殘・養・庶之類」とあり、疏議に「皆謂宿相諳委、兩情具愜、私有契約」とある。滋賀氏は前掲書で「律にいう私約が何を意味するかについてはさだかでないふしがあるけれども、恐らく、正式な婚書の交換というような形式を具備しないでも、慣習上認められた何らかの手續がふまれることによって、實質的に約束が交わされたことが認定できるならば、聘財の授受以前であっても、すでに「私約」ありたるものとして、定婚の成立を認めるという意味であろうと思われる」（四六九頁）と言う。『譯註』六では「私約とは婚書や聘財に先立って成立しているところの實質的な了解・合意を言う」（二六七頁）と述べられている。『明律國字解』は「私約とは、内しよのいひなづけなり」とする。『唐律疏議』に見えるような内容を兩家が確認した上での私的な約定と考えられる。

（4）「正當な事由なしに言を左右にして成婚を拒む主婚人」（滋賀前掲書四七一頁）。『明律國字解』は「悔とは、變改することなり」という。主婚人とは、定婚という契約を交す際の主體的當

事者で、男女兩家それぞれで立てられる。その際には祖父母父母が優先的に主婚人となる（滋賀前掲書四六七～九頁）。ここでは女の家の主婚人を指す。

（5）『唐律疏議』に「後娶者、知已許嫁之情而娶者」とあり、『明律國字解』には「後定娶者とは、後の夫なり」とある。女がすでに定婚していることを知りつつ、その女と定婚・成婚した男（あるいは男家側の主婚人）の意。

（6）男家側で定婚の解消を申し出た場合は、罪に問うことは無いが、男家が女家に渡した聘財を取り返させることはしない、の意。

（7）定婚後、男家が正當な理由無くして五年間成婚を行わない場合、の意。

【解説】本條の骨組みは、『唐律』、『明律』（一〇七）とほぼ完全に同じである。滋賀氏によれば、定婚成立の要件として、唐明の律は、婚書、私約、聘財（財禮）の三者を挙げ、そのうちどの一つによっても定婚が成立するものとしていたのである（前掲書四六九頁）。

四二〇 諸て、女ありて婿を納れ、復た婿を逐い、他人を納れて婿と爲す者は、杖六十七。後婿その罪を同じくす。女は前夫に歸し、^{（1）}聘財は官に沒す。

（1）元朝においては、女婿は養老女婿と出舍（年限）女婿の二種

が法的に承認されていた。前者の場合聘財は女家から男家に支拂われ、その額は通常の嫁娶の半額であり、後者の場合聘財は男家から女家へ支拂われた（滋賀前掲書六一四～五頁、『元典章』卷一八、婚禮、女壻財錢定例を参照）。本條の聘財は、前者の養老女壻の側から、二番目の壻の男家へ支拂われた聘財と考えられる。

【解説】初婚の女のために壻を招くことを招壻・納壻と言ひ、招ぎ納れられた壻を贅壻と言う。又寡婦が再婚に際して後夫を自家（初婚の婚家、嫁いだ先の家）に招き納めることは招夫・接脚夫と言う。

四二一 諸て、職官、娼を娶りて妻と爲す者は、答五十七。職を解き、これを離す。

(1) 『通制條格』卷三、樂人婚姻、『元典章』卷一八、樂人婚、禁娶樂人爲妻がやや關係する。

【解説】『明律』卷六・戸律・娶樂人爲妻妾（一一九）では、文武の官吏が樂人を妻・妾とすることが禁じられているが、『唐律』・『明律』ともに官員が娼女を妻とすることに關しての明文は見當らない。『清明集』戸婚門、婚嫁、士人娶妓（蔡久軒）では、士大夫が官妓を娶ることを戒めているが、やはり法律條文は見えない。ここで言う「娼」とは、『通制條格』卷四、娼女妊孕に「娼館之家、若有妊孕、勒令用藥墮胎……娼女爲良」とあることから考えると、

賤民身分で、今言うところの娼婦、賣春を行う女性と思われる。

四二二 諸て、妻妾ありて復た妻妾を娶る者は、答四十七。これを離す。官に在る者は、職を解きて過を記す。聘財を追さず。

【解説】本條の「妻妾」は、「妻」と「妾」ではなく、「妻」のみを指すと考えられる。「妻」を娶るのは一人のみしか許されないが、「妾」は複數ありうるからである。『唐律』卷一三・戸婚二八・有妻更娶が本條に對應する。「聘財を追さず」とは、二人目の妻が離婚されても、女家へ送った聘財は返ってこない意。

四二三 諸て、先に通姦して斷ぜられ、復た娶りて以て妻妾と爲す者は、生む所の男女ありと雖も、猶おこれを離す。

【解説】正規の婚姻によらず肉體關係を結び、處罰を受けた後、今度はその女性を娶って妻妾（妻を指す？）とした場合は、すでに子供があつても離婚させる、という内容である。

四二四 諸て、已に歸して未だ成婚せざる男婦を轉嫁する者は、杖六十。婦は宗に歸し、聘財は官に沒す。

(1) 定婚して已に男家に入り生活を始めている息子の嫁、の意か。「已歸」の意味が不明。

(2) 更に他の者と婚姻させる意。

(3) 女性は離婚して實家に歸らせる意。

(4) 男婦の實家が受取った聘財ではなく、轉嫁を行った家が受取った聘財を指すと思われる。

【解説】『元典章』卷一八、嫁娶、受財移嫁男婦が關係すると思われるが、『元典章』には「已歸未成婚」という限定は無く、官員の犯罪のためか、量刑・處分が一致していない。

四二五 諸て、財を受け、妻を以て轉嫁する者は、杖六十⁽¹⁾。聘財を追還す。娶る者、情を知らざれば、坐せず。婦人は宗に歸せしむ⁽³⁾。

(1) 『元典章』卷一八、嫁娶、受財將妻轉嫁が關連條文である。

(2) 妻を他人へ轉嫁した家に対して、娶る側の家から送られた聘財。

(3) 轉嫁された女性は、離婚して實家に歸す意。

四二六 諸て、書幣を以て人の女を娶りて妾と爲し、復た財を受けて他人に轉嫁する者は、笞五十⁽¹⁾。聘財は官に沒す。妾は宗に歸せしむ。官ある者は、これを罷めしむ。

(1) 定婚の成立要件たる婚書・私約と聘財の意か。

【解説】前の四二五條とは異なり「妾」を轉嫁したケースであり、「妻」の場合より一等を減じられており、又轉嫁することにより得

た聘財は沒官されている點が異なる。冒頭の「以書幣」の語が、單なる「妾」一般の轉嫁ではないことを窮わせる。

四二七 諸て、僧・道、教に悖り妻を娶る者は、杖六十⁽¹⁾、これを離す。僧・道は還俗して民と爲し、聘財は官に沒す。

(1) 『元典章』卷三三、釋教、和尚不許妻室、また道教の道官有妻妾歸俗が關連條文である。

四二八 諸て、佃戸を典・賣する者は、禁ず。佃戸の嫁娶は、その父母に従う。

(1) 『元典章』卷五七、禁典僱、禁主戸典賣佃戸老小に同内容の文あり。

(2) 典賣と絶賣。『元典章』には「本路管下民戸、輒敢將佃客計其口數、立契或典或賣、不立年分、與買賣驅口無異」の語が見える。

四二九 諸て、兄、弟の婦⁽²⁾を收むる者は、杖一百⁽¹⁾。婦は九十⁽¹⁾。これを離す。出首すると雖も、仍お坐す。主婚は笞五十⁽³⁾、行媒は三十⁽⁴⁾。

(1) 『元典章』卷一八、不收繼、兄收弟妻斷離の至元十四年八月二十一日條に同内容の文あり。

(2) 收繼の意。收繼とは、夫の死亡した妻を、夫の親族の男性が娶り、その家を承繼することと思われる。

(3) 主婚人。定婚に際し、男女兩家それぞれに立てられる契約主體者で、祖父母父母がこれとなる。

(4) 行媒。媒人。婚姻に際して、兩家を紹介し、定婚の證人となる。

【解説】 本條以下に現われる「收」「收繼」は、遊牧民であるモンゴル族が中國支配を行うようになって以後現われるもの、そして特に遊牧民に限って行われるものと思われる（後の四三二條参照）。

中國においては、夫を亡くした寡婦には改嫁（他家へ嫁ぐこと）が認められていたが、再婚せずに婚家に止まり「守志」「守節」することが賞讃・奨励されていた。ましてや婚家に止まったままか歸宗しているか否かを問わず、前夫の服内の親族の男性と再婚するというようなことはありえなかった（『唐律』卷一四・戸婚三四・嘗爲祖免妻而嫁娶、『明律』卷六・戸律・娶親屬妻妾。事實、『通制條格』や『元典章』には「雖係蒙古軍驅、終是有姓漢人、姪收孀母、濁亂大倫（『通制條格』卷三、收繼孀母）とか「舊制、漢兒・渤海、不在接續有服兄弟之限」（『元典章』卷一八、不收繼、漢兒人不得接續）といった語が見える。『唐律』卷一四・戸婚三四・嘗爲祖免妻而嫁娶、『明律』卷六・戸律・娶親屬妻妾（一一五）では、こうしたケースを厳しく罰している。

四三〇 諸て、父母の喪に居りて、庶母を姦收する者は、各々杖一百七、これを離す。官ある者は、除名す。

(1) 父の妾を言う。生みの母親は親母と言う。

(2) 婚姻の認められない女性と通じて收繼する意。

四三一 諸て、漢人・南人、父没し、子その庶母を收むる、兄没し、弟その嫂を收むる者は、これを禁ず。

(1) 收繼あるいは姦收の意。

四三二 諸て、姑表兄弟嫂叔、相い收めず。收むる者は、姦を以て論ず。

(1) 姑表兄弟嫂叔。姑表兄・姑表弟・姑表嫂・姑表叔の意と思われる。父の姉妹と母の兄弟の息子が姑表兄・弟（年長が兄、年少が弟）、父にとつての姑表弟が姑表叔、姑表兄の妻が姑表嫂。

(2) 收繼の意。

【解説】 元朝における收繼・不收繼については、『元典章』卷一八、收繼及び不收繼に史料が残されているが、その詳細と本條との關わりについては未だ詳らかにしえない。四二九條【解説】参照。

四三三 諸て、奴、主の妻を收むる者は、姦を以て論ず。強いて主の女を收むる者は、死に處す。

【解説】 そもそも賤民身分の者と良民が婚姻関係に入ること自體、唐明兩代でも許されなかった。『唐律』卷一四・戸婚四二・奴娶良人爲妻、『明律』卷六・戸律・良賤爲婚姻（二二一）。

四三四 諸て、子爲りて、輒に亡父の妾を以て人に與え、人輒に受けてこれを私するは、與えし者、杖七十七、受けし者、笞五十七。
（一） 嫁與、賣與、贈與のいずれかに當るか、或は全てを含むかについては不明。

四三五 諸て、財を受け、強いて監臨する所の妻を嫁せしむれば、枉法を以て論じ、杖七十七。除名し、財を追して官に沒す。妻は前夫に還す。

【解説】 行政上自己の裁量を及ぼしうる立場にある官員が、監臨下にある者の妻を強制的に他人に嫁せしめた場合についての處罰規定。

四三六 諸て、良家の女、人の奴と婚を爲さんことを願う者は、即ちに奴婢と爲す。良家の女を娶りて妻と爲し、以て奴婢と爲して、これを賣る者は、即ちに改正して良と爲す。賣主・買主は罪を同じくし、價は官に沒す。

（一）『通制條格』卷三、良賤爲婚、『元典章』卷一八、駭良婚、驅

口不娶良人が關連條文である。

四三七 諸て、童養の未だ成婚せざる男婦を以て、その奴に轉配する者は、笞五十七。婦は宗に歸し、聘財を追せず。⁽²⁾

（一） 童養。童養媳のこと。幼男幼女を定婚し、その許婚女を當分の間養女として夫家に引き取るもの。定婚の變則的なもので、中流以下の家庭で行われ、主として經濟的理由に基づく便法であつた。滋賀前掲書四七一頁。

（二） 女家には落度はなく、犯罪を構成しえないので、童養媳として定婚した際に受け取つた聘財は沒收されない。

四三八 諸て、逃奴、女あり、嫁して良人の妻と爲り、已に男女ありて、本主覺察する者は、その聘財を追して本主に歸す。婦人は離さしめず。

【解説】 逃亡した奴隸の娘が良民の妻となり、子供も生れている場合、その奴隸のものと主人が氣づいて摘發した場合、逃亡奴隸が受け取つた娘の聘財は沒收して奴隸主に與えるが、娘は離婚させない意。

四三九 諸て、棄てられたる妻、已に宗に歸して改嫁する者は、その後夫に従う。⁽³⁾

- (1) 夫が妻を離婚することを「棄」あるいは「休」等と呼ぶ。
- (2) すでに實家に歸り再婚した場合の意。
- (3) 後夫とは再婚相手である夫のこと。

四四〇 諸て、棄てられたる妻、改嫁し、後夫^{みまか}亡り、復た納れて以て妻と爲す者は、これを離す。

【解説】 かつて離婚した女性が再婚し、再婚相手の夫が死亡した場合、最初の夫が再びその女性を妻としたなら離婚させる意。

四四一 諸て、夫婦、相い睦まず、賣休・買休する者は、これを禁ず。⁽¹⁾ 違ひし者は、これを罪す。和離⁽³⁾する者は、坐せず。

(1) 『通制條格』卷四、嫁娶、至元八年四月の條、『元典章』卷一八、休棄、離異買休妻に同内容の文あり。

(2) 夫が妻を他の男性に賣り轉嫁させること。『明律國字解』には「買休とは、金を出してさらするなり。賣休は、金をとるさるなり」とある。

(3) 離婚する正當な理由があり、休書（離婚狀）を作成して官府に届け出て離婚すること（『元典章』卷照）。『明律』卷六・戶律・出妻（一二三）には「若夫妻不相和諧、而兩願離者、不坐」とある。

【解説】 滋賀氏によると、こうした規定はすでに唐律（戸婚三八）

に見えるが、明清律（犯姦・縱容妻妾犯姦條、婚姻・典雇妻女條）ではこれをとくに買休・賣休（離婚の賣買）と稱しており、元代の實例にもとづき、それを條文化したものであるという（前掲書四七八頁）。

四四二 諸て、妻妾を出すには、須らく約するに書契を以てし、その改嫁を聽すべし。手模⁽³⁾を以て徴と爲す者は、これを禁ず。

(1) 『通制條格』卷四、嫁娶の大徳七年四月條に同内容の文あり。

(2) 『通制條格』は「須用明立休書」とある。本條の書契とは休書（離婚狀）を指す。

(3) 手模。手摸、手摹、手印とも呼ばれ、掌印のこと。仁井田陞『唐宋法律文書の研究』（一九三七、のち一九八三に東大出版會より復刊）四九・六一頁參照。

四四三 諸て、婦人、夫に背き、舅^{しゅうとしゅうとめ}姑^こを棄て、出家して尼と爲りし者は、杖六十七。その夫に還す。

四四四 諸て、良人を賣買して倡⁽²⁾と爲さば、賣主・買主は罪を同じくす。婦は還して良と爲す。價錢は、半ばは官に没し、半ばは告者に付す。或は婦人自陳す、或は事に因りて發覺⁽⁴⁾すれば、全てこれを没入す。良家の婦、姦を犯して、夫の棄つる所と爲る、或は倡

優の親屬、倡と爲るを願う者は、聽す。

(1) 『通制條格』卷四、驅婦爲娼に同内容の文あり。

(2) 『通制條格』は「贖買典雇良人爲娼」とする。

(3) 『通制條格』には、賣り手、買い手の他に、仲介業者の「引領牙保人」も處罰の対象として擧がっている。

(4) 『通制條格』は「因事發露到官」とする。別件で發覺した場合の意か。

四四五 諸て、倡女孕み、勒して墮胎せしめたる者は、犯人は罪に坐し、倡は放ちて良と爲す。

(1) 『通制條格』卷四、娼女妊孕に同内容の文あり。

(2) 『通制條格』は「勒令用藥墮胎」とする。むりやり藥を服用させて中絶する意。

【解説】 前條・本條ともに「倡」とするが、『通制條格』では「倡優」以外は、いずれも「娼」に作る。

四四六 諸て、妻・妾を勒して倡と爲す者は、杖八十七。乞養せる良家の子女を以て、人の爲に歌舞せしめ、宴樂に給す、及び勒して倡と爲す者は、杖七十七。婦人は並びに宗に歸す。奴婢を勒して倡と爲す者は、笞四十七。婦人は放ちて良に従う。

【解説】 同じ賤民カテゴリーの中でも、「倡」（娼）は奴婢よりもさ

らに低い扱いを受けていたことがわかる。

四四七 諸て、財を受け、妻・妾を縱^{はな}ちて倡と爲す者は、本夫と姦婦・姦夫は、各々杖八十七。これを離^{はな}す。その妻・妾、隨時に自首する者は、坐せず。若し日月已に久しくして、纔^{はな}めて自首する者は、聽す勿れ。

(1) 『元典章』卷四五、縱姦、通姦許諸人首捉及び夫受財縱妻犯姦、主婦受財縱姦犯姦、逼令妻妾爲娼が關連する。

(2) 縱容の意で、『明律國字解』に「めながに見るなり」「惡事をゆるしてさするなり」「見のがしなり」とある。

(3) 本夫は、妻・妾の夫。姦婦は倡となつて客をとつた妻・妾。姦夫は姦婦の客となつた者であらう。

(4) 夫と倡になつた妻・妾を離婚させる意。

食貨

四四八 諸て、私鹽を犯す者は、杖七十、徒二年。財産の一半は官に沒し、沒物内において一半は、告人に付して賞に充つ。鹽貨、界を犯す者は、私鹽の罪より一等を減ず。提點官、禁治嚴ならざれば、初犯は笞四十、再犯は杖八十。本司官が、總管府官と一同に歸斷す。三犯は、聞奏して罪を定む。如し、監臨官及び竈戸、

私に鹽を賣りたる者は、私鹽の法に同じ。⁽¹⁰⁾

- (1) 『元典章』卷二二、課程、恢辦課程條畫の第一條、同鹽課、立都提舉司辦鹽課の第十一條、同新集戶部、鹽課、鹽法の第四條には、同文が見えるが、若干の異同もある。『元史』卷九四、食貨二、鹽法には「凡偽造鹽引者、皆斬、籍其家產、付告人充賞。犯私鹽者、徒二年、杖七十、止籍其財產之半。有首告者、於所籍之內、以其半賞。行鹽、各有郡邑、犯界者、減私鹽罪一等、以其鹽之半沒官、半賞告者」とある。

- (2) 當時鹽は國家の專賣統制下にあり、正規の鹽（正鹽）に對し、密造・密賣されるものを私鹽と言った。『明律國字解』には「鹽引あるものを官鹽とし、なきものを私鹽とするなり」とある。

- (3) 『元典章』立都提舉司辦鹽課には「科徒二年、決杖七十、財產一半沒官。決訖、發下鹽司、帶鐐居役、滿日疏放」とある。各地の都轉運鹽使司や鹽課提舉司管下の鹽場で、^{あしかせ}鐐をはめられて二年間強制勞働に従事する意。

- (4) 『元史』にもあるとうり、官鹽（正鹽）の販賣地はあらかじめきめられており、その地域外で商人が販賣することは違法であつた。

- (5) 『元典章』には「委自州府長官提調禁治私鹽罪」「委自州縣長官提點禁治」「管民提點正官」の語が見える。従つてこの場合、提點官とは、管民官であるその地域の府州縣の長官と佐貳官を

指すとわかる。

- (6) 提點官である府州縣の正官（長官・次官）が「禁治不嚴」の罪に問われた場合、初犯・再犯までは、本司官（都轉運鹽使司・鹽課提舉司等）と府州縣の上に立つ路の官員が合同で歸問斷罪する意。

- (7) 『元典章』恢辦課程條畫に「三犯已上、開具呈省、奏聞定罪」とあるが、他の二つは「三犯、杖一百、除名」とする。刑法志は、三つの中で最も古い中統二年六月の條畫をベースにしていることが、このことから知られる。

- (8) 『元典章』恢辦課程條畫には「鹽司監臨官」の語が見え、同立都提舉司辦鹽課には「場官、知情賣買者、與犯人同罪」とある。以上より、この場合の監臨官とは、鹽場及び竈戸を統轄支配する都轉運鹽使司や鹽課提舉司官、さらに鹽場の官員をも指すと考えられる。

- (9) 都轉運鹽使司等の管下にあり、鹽場・鹽井で製鹽に従事する戸。

- (10) 本條冒頭部分がこれに當る。

【解説】 本條以下は、專賣等經濟關係の犯罪に對する規定である。こうした經濟犯罪に對する規定の充實が、唐以前と宋以後の法とを分ける特徴の一つである。『明律』での本條の關連條文としては、卷八・戶律・鹽法（一四九・一五四・一六〇）がある。元朝時代の

鹽政全般については、佐伯富「元代における鹽政」(『中國鹽政史の研究』、法律文化社、一九七八、第四章第三節) 参照。

四四九 諸て、鹽引を偽造する者は、斬。家産は、告人に付して賞に充つ。覺察を失する者、隣佑首告せざるは、杖一百。商賈、販鹽し、到る處に引を呈して發賣せざる、及び鹽引の數外に來帶し、鹽・引相い随わざるは、並に私鹽の法に同じ。鹽已に賣り、五日内に司縣に赴き引目を批納せざるは、杖六十・徒一年。因りて轉用する者は、私鹽を賣るの法に同じ。私鹽を犯す、及び界を犯すは、斷後に、鹽場に發して鹽夫に充て、鍊を帶びて居役せしむ。役滿つれば放還す。

(1) 『元典章』卷五二、偽、偽造鹽引に「杖一百」までとほぼ同文がある。

(2) 專賣鹽の販賣許可證で、商人は都轉運鹽使司・鹽運司等でこれを購入し、鹽場・鹽倉で鹽を受領した後、指定の行鹽區域で鹽を販賣する際も携帶が義務づけられていた。又鹽の賣却後、鹽引は五日以内に州縣へ繳納する規定であった。

(3) 失覺察者、隣佑不首告。『元典章』には「先(失?)覺察隣首」とある。「隣首」とは「隣佑」と「主首」を指し、本文の句の組み立てとは異なる。本文では「失覺察者」の一句が浮いてしまい、文意がやや通じ難い。ここでは『元典章』に従い、

「覺察に失せる隣・首は(杖一百)」の意としておく。

(4) 『元典章』卷二二、鹽課、改造鹽引の第二條に「如到貨賣去處、鹽客即於所在官司、將見賣鹽袋・鹽引數目、盡日呈報、訖後、從客發賣」とある。鹽商は、鹽の指定販賣地域に到着すれば、ただちに當地の州縣官廳に出向き、鹽袋及び鹽引記載の數目をその日の内に報告するきまりであった。「不呈引」とは、この報告を行わないこと。

(5) 『元典章』卷二二、鹽課、立都提舉司辦鹽課の第六條に「諸人販賣鹽貨、除官定袋法每引四百 觔之外、夾帶多餘 觔重者、同私鹽法科斷」とある。鹽引一枚につき鹽四百斤と定められている以上に、鹽を持ち運ぶこと。

(6) 『元典章』卷二二、鹽課、引鹽不相離に「諸人販鹽、引不隨行、依私鹽法」「鹽引不相隨」の語が見える。鹽を販賣する際に、鹽引を携帶していない意。

(7) この件については『元典章』卷二二、鹽課、改造鹽引の第五條に「諸、販鹽客旅、賣過鹽袋・退引、限五日、赴所在官司繳納。……將賣訖退引、依期繳納、分明置簿、明白銷附、照例批毀」と見え、同申明鹽課條格的第十三條には「諸、客旅并行鋪之家、賣訖官鹽、限五日、赴所屬州・司縣、繳納引」とある。これらからすると、鹽を全て賣り終った客旅(及び行鋪)は、五日以内に當地の州・縣に出向き、使用済みの鹽引を提出し、廢棄處分

の手續きをとる意と考えられる。引目は、『明律國字解』に「引目は、即鹽引のことなり」とある。鹽引には鹽の品目・數量が記載されているからであらう。

(8) 『元典章』卷二二、鹽課、鹽法通例の第一條に「轉行貨賣博易諸物者、同私鹽法」とあり、私鹽を賣るのではなく、私鹽を他の物品に交換した者は、私鹽を賣った場合の罪と同じく處する意であることがわかる。

(9) 四四八條の注(3) 參照。

【解説】『明律』卷八・戶律・鹽法(一五六・一五七)、同間刑條例・戶律・鹽法條例(一六六)が關連條文である。

四五〇 諸て、煎鹽の竈戸に工本を給散するに、官・吏、通同して剋減する者は、贓を計りて罪を論ず。

(1) 同じ内容の文は複數存在する。『元典章』卷二二、課程、辦課合行事理に附されている至元新格の第三條、同鹽課、立都提舉司辦鹽課の第九條、同新降鹽法事理の第三條。

(2) ここでは竈戸に對し國家から必要經費として支給される鈔(紙幣)を指す。『元典章』卷二二、鹽課、添支煎鹽本によると、竈戸に支給される工本には煎鹽工本と曬鹽工本があり、至元二十九年以前において、前者は鹽引一通につき(中統鈔)五兩、後者は四兩であったのが、以後それぞれ八兩と六兩四錢

に引き上げられた。

(3) 都轉運鹽使司や鹽課提舉司等の官員・胥吏を指す。

(4) ぐるになること。

(5) 『元典章』には「剋減或以他物移易准折」と見え、數を減らして(剋減)支給する外、中統鈔・至元鈔といった定められた紙幣以外の物で支給する場合もあったようである。

(6) 贓とは、犯罪・不正行為に關わりのある錢・物一般を、即ち盜まれた錢物や、賄賂の錢物等を指す。『明律國字解』には「總じて贓物と云は、罪ある財物を云なり。ぬすみものに限りたることに非ず」とある。

四五二 諸て、大都の南北兩城の關廂に、鹽局を設立し、官爲に發賣す。その餘の州縣・鄉村は、並びに鹽商の興販を聽す。

(1) 『元史』卷九七、食貨五、鹽法、大都之鹽に「大德中、因商販把握行市、民食貴鹽、乃置局設官賣之。……始自大德七年、罷大都運司、令河間運司兼辦。每歲存留鹽數、散之米鋪、從其發賣。後因富商專利、遂於南北二城設局、凡十有五處、官爲賣之。當時立法嚴明、民甚便益。……泰定二年、以其不便罷之。元統二年又復之、……」とあり、本條制定の背景がわかる。

(2) 外城の城門外に連なる都市的地域のことを指すと思われる。廂制については、加藤繁「宋代に於ける都市の發達に就いて」

(初出一九三一、のち『支那經濟史考證』、東洋文庫、上巻所收)の三二二―三二四頁參照。曾我部靜雄氏は「元時代になると、都市の城壁内の區畫には隅、都市の城壁外の區畫には廂が多く用いられるようになった」と指摘しておられる(『中國及び古代日本における鄉村形態の變遷』、吉川弘文館、一九六三、四七三頁)。

【解説】 大都では、大徳七年以後米鋪に官鹽を支給し販賣させていたが、鹽價が上昇し弊害が生じたため、南北兩城の關廂地區に十五カ所の鹽の官營販賣所を設置することとなり、他の地域は鹽商(客商・鋪戶)の販賣にまかせたのであった。

四五二 諸て、賣鹽局⁽¹⁾の官・煎鹽⁽²⁾の竈戶・販鹽の客旅・行鋪の家⁽³⁾、輒に灰土・硝礬⁽⁴⁾を插和する者は、答五十七。

(1) 『元典章』卷二二、鹽課、立都提舉司辦鹽課の第十條及び同禁治鹽商、巡鹽不便が關連條文である。

(2) 四五一條の大都の局の外、各地の鹽場の周圍十里以内の地域にもやはり多數の局が置かれて官鹽を直接販賣していた。『元典章』卷二二、鹽課、新降鹽法事理の第十四條參照。

(3) 所謂坐賣のことで、客旅・客商が主に鄉村地域で鹽を販賣したのに對し、坐賣(行鋪、鋪戶)は常設店舗を有して、城郭内や城外の鎮市で鹽を販賣した。

(4) 『研究譯注』は、製鹽に用いる灰や硝石などの白い粉末と解説する。

【解説】 『明律』卷八・戶律・鹽法(二五九)が對應條文である。

四五三 諸て、蒙古人、私に煮鹽する者は、常法⁽¹⁾に依る。

(1) 常法。四四八條を指すと考えられる。

【解説】 元朝の國家財政中に占める專賣鹽收入の割合は、課利收入の八割以上と極めて大きく、それ故私鹽に對する處罰規定は嚴重であつた。各種の法的特權を有したモンゴル人であっても、刑の減等・減免の措置を受けることはなかつた。

四五四 諸て、私鹽を犯して、赦に會い、家產未だ官に入らざる者は、革撥⁽¹⁾す。

(1) 『通制條格』卷一九、捕盜責限の至大四年十一月條に「議得、捕盜官兵、失過盜賊、格前違限不獲、合行革撥、格後違限不獲者、既正賊不該原免、捕盜官兵亦合依例追斷」とあり、同卷二七、擅造兵器に「緣係詔赦已前事理、擬合革撥」とあることからすれば、革撥とは、赦が下されることにより、それ以前に犯した罪がゆるされ、おかまいなしとされる意である。『研究譯注』が「あらためて取り上げること」とするのは不適切。

四五五 諸て、私鹽の再犯は、等を加えて徒に斷すること、初犯の如し。⁽²⁾三犯は、杖斷すること、再犯に同じくし、遠きに流す。⁽³⁾婦人は、徒を免す。⁽⁴⁾その諸物に博易するは、巨細を論ぜず、全罪に科す。⁽⁵⁾

(1) 『元典章』卷二二、鹽課、鹽法通例の第一條に同内容の文あり。

(2) 私鹽の初犯と同様徒刑に當てるが、初犯の杖七十・徒二年よりも重い刑に處する意。

(3) 私鹽の再犯で受けた杖數は同じまま、流刑とする意。『元典章』には「其三犯者、與再犯一體斷罪、蒙古・色目人、發付兩廣・海南、漢人・南人、發付遼陽屯田」とあり、「流遠」の地が具體的に擧げられている。

(4) 『元典章』には「婦人有犯、單衣受刑、例合免徒」とある。女性で私鹽の罪を犯した場合、徒（勞役刑）は免ぜられ、杖刑のみを（單衣で）受ける意。

(5) 『元典章』には「又博易諸物、同私鹽法、謂如有將私鹽博易諸物緞疋布帛衣服擎畜、或有博易喫食酒肉瓜果五穀草鞋簑笠柴草等微賤之物。若不論其多寡、俱同鹽法一概斷配、似涉輕重不倫乞照詳。刑部一同議得、……轉行貨賣博易諸物者、不以物巨細價之多寡、依例全科、相應。前件、依准部擬」とあり、本條文決定の經過がわかる。私鹽と交換された物品の分量の多少、物

品の價格の高低を問わず、私鹽の罪に當てる（杖七十・徒二年、財産一半沒官、於沒物内一半、付告人充賞）意である。「科全罪」については『研究譯註』の三一五・三一六條の注に解説があるが、本條の用例はそれとはやや意味合いを異にするように思う。本條では複数の犯罪を累加するまでもなく、「物の巨細・價の多寡を以てせず」私鹽の罪に當てる意だからである。

四五六 諸て、私鹽を轉賣して食用する者は、笞五十七。斷沒の令を用いず。⁽¹⁾

(1) 『元典章』卷二二、鹽課、鹽法通例の第十條中の「諸、偷犯私鹽、不曾貨賣、自行食用、依例斷罪。……買食私鹽者、杖六十」が本條の關連文と考えられる。

【解説】食用目的で私鹽を購入した者は、笞五十七とし（徒刑は無論科されない）、四四八條に規定されている「財産の一半は官に沒す」の一文は適用されなかった。

四五七 諸て、私鹽を捕獲すれば、止だ見發の家を理し、平民を攀指するを聽す勿れ。權貨あるも、犯人無ければ、權貨を以て官に解る。權貨無ければ、犯人あるも、問う勿れ。⁽¹⁾⁽²⁾

(1) 理は、理問あるいは理斷の意で、取り調べることにあつては裁くこと。見發の家とは、現に私鹽が発覺した家の意。『元典章』

卷五七、禁賭博攀指には「止理見發人等」の語が見える。

(2) 平人に同じく、無實の人の意。『吏文正續輯覽』の「厮打平人」に「平人、即無罪之人也」とある。

(3) 指攀とも記す。捕えられた罪人が、誰々が犯人・共犯者であると名指しで申し立てをすること。『明律國字解』に「展轉攀指とは、だんだんにさきからさきへ同類をさすことなり」とある。

(4) 專賣物品のことで、ここでは密造・密賣の鹽を指す。

【解説】『明律』卷八・戶律・鹽法（一四九）にはほぼ同趣旨の條文がある。

四五八 諸て、私鹽を巡捕するに、告報明白なるを承くるに非ざれば、輒に人家に入りて搜檢するを得ず。

(1) 巡捕。犯罪行為を摘發し犯人を捕獲するため、擔當地域内を巡邏すること。『吏學指南』に「巡捕。巡謂巡視、捕謂捕捉」とあり、『明律國字解』に「巡捕は、まわりてからむる役なり」とある。

【解説】私鹽取締りの者は、確實で信頼に足る報告を受けてはじめて、人家に搜索のため立入ることができるという本條の規定は、逆に不正な搜索が多く行われたことの證佐であらう。

四五九 諸て、私鹽を犯して、獲えられんとして、拒捕する者は、罪を斷じて、遠きに流す。⁽³⁾ 因りて人を傷つくる者は、死に處す。

(1) 『元典章』卷二二、鹽課、鹽法通例の第十條に「諸、人但犯持杖般偷私鹽、拒捕的・殺傷的・燒毀房舍的、比依強盜論罪」とあるのがやや参考となる。

(2) 捕手に抵抗すること。『吏學指南』に「集聚拒捍、不伏就擒、謂之拒捕」とあり、『明律國字解』に「拒捕とは、からめとるに手むかひをすることなり」とある。

(3) 杖刑を執行した後、流刑に處す意。「斷罪」については、『明律國字解』に「斷決とは、杖罪に申付ることなり」とあるのが参考となる。

四六〇 諸て、巡鹽の軍官、輒に財を受けて、鹽徒を脱放する者は、枉法を以て贓を計りて罪を論じ、佩ぶる所の符及び受くる所の命を奪い、職を罷めて敘せず。

【解説】私鹽を巡捕する擔當の軍官が、鹽徒（私鹽の罪を犯した者）から金品を受け取り、彼らを逃がした場合、その軍官は受財枉法の罪で、贓物の多寡に従って量刑し、さらに軍官が帶びている牌符と告身を取り上げ、免職處分とし、今後は官職に任用しないという、厳しい規定である。

四六一 諸て、茶法、客旅、課を納めて茶を買い、隨處に引を驗べて發賣し畢り、三日内に所在の官司に赴きて、引目を批納せざる者は、杖六十。因りて轉用する、或は字號を改抹する、或は斤重を増添・夾帶する、及び引の茶に隨わざる者は、並びに私茶の法に同じ。但て、私茶を犯すは、杖七十。茶の一半は官に沒し、一半は告人に付して賞に充つ。應捕の人も同じ。若し、茶園の磨戸の犯す者、及び運茶の船主、情を知りて夾帶するは、罪を同じくす。有司、禁治嚴ならず、私茶の生發するあるを致すは、罪、官・吏に及ぶ。茶、批驗の去處を過ぐるに、批驗せざる者は、杖七十。その茶引を偽造する者は、斬。家産は、告人に付して賞に充つ。

(1) 「客旅」以下「私茶法に同じ」までは、『元典章』卷二二、茶課、販茶例據批引例に同内容の文あり。「但て」以下「官吏に及ぶ」までは、同私茶罪例に、「その茶引」から「賞に充つ」までは同卷五二、偽、偽造茶引にそれぞれ同内容の文がある。

(2) 『元典章』には「客旅販茶貨、納訖正課賣鈔、出給公據、前往所指山場、裝發茶貨、出山賣據、赴茶司繳納、倒給省部茶引、方許賣引隨茶。諸處驗引、發賣畢、限三日已裏、將引於所在官司繳納、即時批抹。違限匿而不批納者」と詳しく專賣茶の販賣方法が述べられている。即ち、客商が茶を販賣しようとする場合、(權茶) 提舉司で茶の代金の鈔を支拂つて、公據を發行し

てもらい、公據を所持して指定の山場へ赴き、茶を受取った後、再び提舉司に行つて公據を繳納し、代わりに茶引をもらい、茶とともに茶引を携帯して各地に赴いて茶を販賣する。この際諸處に設けられた批驗所で茶と茶引のチェックを受けつつ賣捌き、すべて賣り終われば、三日以内に當地の州縣の官廳に茶引を繳納して廢棄手續きをとる定めになっていたのである。

(3) 茶引を規定外の他の用途に使用すること考えられる。

(4) 茶引に記されている文字・數量を書き換える意。

(5) 規定重量以上・以外の茶を運據・販賣する意。

(6) 茶と茶引を別々にして置き、茶を販賣する際に茶引を携帯していない意。

(7) 本條の以下の規定(杖七十、茶一半沒官、一半付告人充賞)がこれに當る。

(8) 私茶の犯罪が行われていることを官廳に訴え出た者。

(9) 私茶の取り締り擔當の者が、私茶の犯人を捕獲した場合も、私茶の半分を賞としてもらう意。

(10) 茶葉(草茶)を磨(茶磨、茶水磨)ですりつぶし、粉末の末茶を製造する際に勞働力を提供する人戸を磨戸・磨團戸と呼ぶ。

古林森廣『宋代産業經濟史研究』(國書刊行會、一九八七)七
一〇八二頁参照。

(11) 『元典章』には「運茶車軋主」とある。客商が山場(茶場)

で受領した鹽を運搬する際の、船(車)を有する運輸業者のこと。

(12) 私茶あるいは規定外の茶であると知りながらの意。

(13) 私茶の罪に同じ意。

(14) 當該地方の路・府・州・縣を指す。

(15) 專賣物品と引(販賣許可證)を檢查するため各地に置かれた批驗所を指す。

【解説】 本條と次の四六二條は專賣茶に關する規定である。私鹽に比べ私茶の方が量刑が輕いのが特徴であるが、茶引を偽造した場合、鹽引の偽造と同罪であるのが注意を引く。『明律』卷八・戶律・私茶(一六三)では、私茶と私鹽の量刑は同じである。

四六二 諸て、私茶、私自に山に入りて採る者に非ざれば、斷沒の法に従わず。

【解説】 本條に關しては正確な意味を把握できない。私茶の罪に問われる場合、勝手に山場に侵入して茶を採ったのでないならば、杖七十のみで、茶は沒收されないと意か。あるいは非が衍字か。

四六三 諸て、金を産するの地、有司、歲ごとに金課を徵す。

正官、⁽³⁾人戸を監視し、自ら權衡を執り、⁽⁴⁾兩平に收受す。⁽⁵⁾その巧みに名色を立て、⁽⁶⁾廣く用錢を取る、及び多く金數を秤り、火耗を剋

除して、民の害と爲る者は、監察御史・廉訪司従り、これを糾す。

(1) 『元史』卷九四、食貨、歲課の條に具體的に地名が擧げられており、又金の歲課の數も見える。その中では江浙と雲南の産金額が突出している。

(2) 『元史』卷九四によると、江浙では初め提舉司を設立して金課を擔當させていたが、のち徽・饒・池・信州では有司(府州縣)が管轄することとなった。ただしこれ以外の地域で有司が管轄することになったとの記事は見えない。

(3) 府州縣の長官と佐貳官を指す。

(4) 管民正官が親ら計量器具で金の分量をはかること。

(5) 公平に金を民戸から受領する意。兩平については、『明律國字解』に「兩平交易とは、相應のねだんにてうりかひするなり」とあり、『六部成語註解』に「兩平交易。彼此均平無偏之交易。俗云公道買賣」とある。

(6) 各種の名目で、さまざまな手数料を取る意と思われる。

(7) 民戸が納めるべき金の量を多めにはかり、その代り火耗を免除することか。正確な意味は未詳。火耗は、金を溶かした時に生ずる目減りのことで、民戸が金課を納付する際には、この目減り分をあらかじめ合算して納入することになっていたと思われる。

四六四 諸て、銅を出すの地、民間、敢て私鍊する者は、これを禁ず。⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾

(1) 『元典章』卷二二、洞冶、根訪銅鑛が関連條文である。

(2) 『元史』卷九四、食貨、歲課に銅の産地が擧がつており、雲南の大理・激江が一大産地であった。

(3) 民間で勝手に銅の精鍊を行う意。

四六五 諸て、鐵法、引無くして私販する者は、私鹽に比して、一

等を減じ、杖六十。鐵は官に没す。内一半は、價を折して、告人

に付して賞に充つ。鐵引を偽造する者は、省部の印信を偽造すると同じく罪を論ず。官、賞鈔二錠を給して、告人に付す。監臨正官、

私鐵を禁治すること嚴ならず、私鐵生發するあるを致す者は、初

犯は笞三十、再犯は一等を加え、三犯は別に黜降を議す。客旅、

治に赴き、鐵引を支したる後、月日を批せずして出給する、引・

鐵相い隨わざる、引外に夾帶するは、鐵は官に没す。鐵已に賣り、

十日内に有司に赴きて引目を批納せざるは、笞四十。因りて轉用

するは、私鐵の法に同じ。凡そ私鐵の農器・鍋釜・刀鎌・斧杖、

及び破壊せる生・熟の鐵器は、禁限にあらず。江南の鐵貨、及び生

・熟の鐵器は、淮・漢以北において販賣するを得ず。違う者は、

私鐵を以て論ず。

(1) 本條の典據は明らかでないが、『元典章』卷二二、洞冶、鐵

課依鹽法例に「各處鐵冶、發賣鐵課、合依鹽法一體禁治」と見えるように、四四八・四四九條の鹽法の規定になぞらえる型になっているのは明白である。

(2) 没官した鐵を紙幣價值に換算すること。

(3) 一錠は紙幣(至元鈔)五十兩(貫)に當る。二錠は鈔百兩。

(4) 客商が鐵冶で鐵引を發行してもらった後、販賣期間(あるいは鐵の支給日)を鐵引に記入せずに鐵を受け取ることか。

(5) 生鐵とは鈍鐵、熟鐵とは軟鋼を指すと、和田清編『宋史食貨志譯註』(東洋文庫、一九六〇)四七頁に見える。『研究譯註』

はこれをうけて、生鐵を鑄鐵(いもの)、熟鐵を鋼鐵(はがね)と解す。

(6) 鐵の塊及び鐵製品の意。貨は鹽貨・茶貨と同じ用法であり、貨幣の意ではなく、物品の意。

(7) 淮水と漢江。淮漢以北とは、舊金朝の範圍を主とする腹裏地域を指す。

四六六 諸て、衛輝等處、私竹を販賣する者は、竹及び價錢は、並びに官に没す。首告して實を得る者は、官に没する物より、約量

して賞を給す。界を犯して私賣する者は、私竹の罪より一等を減ず。若し民間の住宅内外、并に闌檻の竹、畝を成さざるは、本主

自用するの外、貨賣する者は、例に依りて抽分す。有司、禁治嚴

ならざる者は、これを罪す。仍お、解由内において開寫す。

(1) 衛輝路のこと。治所は、現在の河南省汲縣。

(2) 欄干の意であるが、ここでは築地がわりに竹を植えているようなものの意味か。

(3) 面積一畝に満たない意味か、あるいは竹園として竹を栽培しているのではない方向か不明。

(4) 税として現物(竹)の一定部分を國家が抜き取り徴收すること。竹課の場合、民戸が伐裁した竹のうち六割、のちには四割が税として徴收された。

【解説】 元朝における竹の專賣については、井ノ崎隆興「元代の竹の專賣とその施行意義」(『東洋史研究』一六―二、一九五七)がある。

四六七 諸て、⁽¹⁾唆魯麻酒⁽²⁾を私造する者は、私酒の法に同じく、杖七十・徒二年。財産の一半は官に沒す。首告する者あらば、官に沒する物の内より、一半もて賞に給す。

(1) 『元典章』卷二一、酒課、私造酒麴依匿稅科斷に關係條文あり。

(2) 唆魯麻酒。不明。『研究譯註』(二九五頁)は『飲膳正要』卷三、米穀品の「速兒麻酒」の條を引いている。

【解説】 以下三條は酒の專賣に關する條文である。私酒の罪を犯し

た場合、私鹽と同じ重い量刑であり、私茶の場合より重いことが特徴である。しかし、『元典章』新集戸部、酒課、私酒同匿稅科斷によれば、私酒の刑が重きに失するという理由で、延祐六年以後は量刑がゆるめられ、四七一條に見える匿稅の規定の刑を當てることとなった。『明律』卷八・戸律・匿稅(一六五)に明代の私酒の規定があるが、延祐六年以後のそれを踏襲したものとなっている。

四六八 諸て、蒙古・漢軍、輒に私酒・醋麴を醗造する者は、常法に依る。⁽¹⁾

(1) 依常法。「杖七十・徒二年、財産一半沒官、……」という四六七條に見える私酒の法で裁く意。

【解説】 軍中における酒の製造・販賣は、宋代では軍の重要な財源の一つとして認可され、大々的に行われていた事柄である。本條も軍中での酒造の一律禁止ではなく、規定を守らないで勝手に酒を造ることに對する禁止規定であらう。

四六九 諸て、禁を犯して私酒を飲む者は、答三十七。

四七〇 諸て、⁽¹⁾界を犯すの酒、⁽²⁾十瓶以下は、中統鈔一十兩を罰し、⁽³⁾答二十七。十瓶以上は、鈔四十兩を罰し、答四十七。酒は元主に給す。酒多しと雖も、罰は五十兩に止め、罪は六十に止む。

(1) 『元典章』卷二二、酒課、犯界酒課不便に同内容の文あり。

(2) 『元典章』卷二二、酒課、犯界酒課不便及び同鄉村百姓許造酒によれば、犯界酒とは、國家直營で酒の製造・販賣を行ってゐる州城・縣城等の都市内へ、鄉村で民戸が許可され製造した酒を持ち込むような場合を指すと考えられる。

(3) 違法に都市に持ち込まれた酒は、(鄉村の)製造元の民戸に返してやる意。

四七一 諸て、⁽¹⁾匿税⁽²⁾する者は、物貨の一半は官に没し、官に没する物の内より、一半もて告人に付して賞に充つ。但し犯さば答五十門に入りて弔引せざるは、⁽³⁾匿税の法に同じ。

(1) 『元典章』卷二二、課程、恢辦課程條畫の第八條、同匿税、隱匿商税罪例にはほ同文が見え、同江南諸色課程の第八條及び同匿税、入門不弔引者同匿税も關連條文である。

(2) 宋代では、客商、坐商(坐賣)に對して、各々通過税(過税)二%、販賣許可税(住税)三%が商税として課せられたが、元朝では販賣地で三十分の一を徴收するのみで、通過税は存在しなかった(宮澤知之「元朝の商税政策——牙人制度と商税制度——」、『史林』六四—二、一九八一、五一—五二頁參照)。匿税とは、この三十分の一の商税を支拂わないこと。『明律國字解』には「匿税とは、諸色の商人に口まへあり、口まへを出さぬを

匿税と云」とある。

(3) 『元典章』卷二二、課程、江南諸色課程の第二條に次のようにある。一、商税。各處、若不關防、中間作弊百般、欺隱課程。今擬。除府城門外、⁽⁴⁾吊引入城、赴務投税、附曆收課外、據在先雜税、於稅務門內置局、亦吊引稅。今發下千字文號貼、仰令當該攢典人、於上將稅物貨、先行從實抄寫數目、亦依號附曆給發、標寫某物該稅鈔若干、令稅物人資把號貼、赴務投稅。仰稅官、⁽⁵⁾將吊到號貼、當面收受、合該稅錢、附曆監收、准備日晚依號照勘收計施行、毋得再令攔頭人等、虛擡高價、口喝稅錢、刁蹬百姓。仍仰已委官、常切用心提調、每日具報草狀、十日一次、呈押赤曆、每月不過次月初五日呈省、亦與酒課一就解省。また同匿税、軍人孫眞匿税に「今後、軍人資到盤纏絹疋等物入門、並須弔引。若貨賣者、依例納税」とある。これらを參考とすれば、州縣城における商税の納付手續きの概要は次のように考えられる。即ち、客商が商品・貨物を運搬して州縣城内に入ろうとする場合、所持する全商品・全貨物の品目・數量及び當該物品にかかる商税の鈔額を、稅務から發給される證明書に記入し、これを呈示して城内に入る。城内で商品を賣捌く時は、その足で稅務に赴いて商税を納入することになっていたのである。この證明書が「引」あるいは「號貼」であり、この證明書に客商が所要事項を記入すること、もしくは所要事項を記入した證明書を呈

示することが「弔（吊）」であると思われる。『明律國字解』は「入門不弔引とは、門は城門なり、弔はいたるとよむ。總じて口まへを出すときは官より切手をわたす、故に城門を入るとき切手なければ、口まへを出さぬうりものとしるるなり。其ことを不弔引と云なり」と解説する。

【解説】『明律』卷八・戸律・匿税（二六五）は、ほぼ本條をそのまま繼承している。元朝において商税は、國家の財源として重要な要素となっており、これは流通經濟に大きく依據していた元朝の國家構造の顯著な特徴の一つでもあった。

四七二 諸て、辦課官、物を估して收税するに、輒に本色を抽分する者は、これを禁す。その監臨官吏、輒に税課務において、什物を求索する者は、官物を盗むを以て論す。取・與、共に坐せしむ。⁽¹⁾

(1) 『元典章』卷二二、雜課、税物不得抽分本色に同内容の文がある。

(2) 專賣及び商税關係の官廳の官員で、各種の提舉司や院務の官員のこと。

(3) 『元典章』には「今後、應税物貨、並須扣算寶鈔、不得抽分本色」とある。所謂「課程」収入は、竹課など抽分することになつてゐるものを除けば、紙幣に計算して徴收すべきものである。

るのに、勝手に現物を税として徴收する者、の意。

(4) 例えは商税を徴收する商税務の場合で言へば、路總管府の總管以下の官員・胥吏を指す。一六二條參照。

(5) 『元典章』は「税務」とする。商税務のこと。

(6) 『元典章』には「取要食物・衣著・什器等件」とある。

(7) 税務内の什器等を求めた監臨官吏と、それを與えた税務の官吏は同罪の意。

四七三 諸て、辦課官、掌る所の應に税すべき物、並びに三十分中に一を取る。輒に估直を冒して、多く税錢を收め、別に名色を立て、巧に分例を取る、及び應に收税すべからずして收税する者は、各々その罪を以てこれを罪す。廉訪司常に體察を加う。⁽¹⁾

(1) 『元典章』卷二二、課程、辦課合行事理の第四條が關連條文である。また『元史』卷九四、食貨、商税に「至元七年、遂定三十分取一之制、以銀四萬五千錠爲額、有溢額者別作増餘」と見える。

(2) 物品により課税される物と、免税される物とがはっきり區別されていた。免税對象物品は『元典章』卷二二、免税の各條に詳しく擧がつており、そこに見えるもの以外全てが課税對象物品つまり「應税之物」であると考えてよい。

(3) 分例とは本來は、使臣が驛站を利用する場合に供給される食

料等の規定額を指すが、ここではそれとはやや異なり、『元典章』卷二二、雜課、弔引院例不收鈔に見える「院例弔引等錢鈔三百二十一兩四錢」のような、税務の官員が勝手に名目を作つて徴収する不正な錢物の意と思われる。

四七四 諸て、在城及び鄉村の市集あるの處、課税に常法あり。その在城の税務の官吏、輒に鄉村において、妄に經過の商賈の匿税を執る者は、これを禁ず。⁽³⁾

(1) 『元典章』卷二二、匿税、入門不弔引者同匿税が關連條文であり、同趣旨の内容が見える。

(2) 坊郭と呼ばれる都市(城)内地區に對し、それ以外の城を離れた農村區域が鄉村である。市集は、この鄉村に存在する常設の市場及び定期市のこと。

(3) これについては『元典章』に「樊城等七人、般駝布疋、經由汾河岸東、欲往山東、彼中不曾貨賣。豈有在城務捉拿漏税之理」とあるのが參考となる。客商が商品を運搬して鄉村區域を通過中であり、商行爲は行っていないのに、州縣城の税務の官吏が勝手に匿税の名目で捕えること。

四七五 諸て、辦課官、増餘の税課を侵用する者は、不枉法贓を以て罪を論ず。⁽¹⁾

(1) 『元典章』卷四六、不枉法、辦課人員取受に同内容の文が見え、同卷四七、侵使、税官侵使課程が關連條文である。

(2) 各課程、例えば商税について言えば、各税務でノルマとしての商税額が決まっており、このノルマの税額を徴収できるか否かが税務官の賞罰・勤務評定と關係していた。増餘の税課とは、ノルマを除いた餘剰の商税額であり、これを税務の官員が勝手に使ってしまうことが侵用である。侵用は『元典章』では「侵使」となっており、『吏學指南』に「侵使。謂已徵到官、未入倉庫、而擅用費者」とある。

【解説】 本條文制定の背景と意味については、徳永洋介「元代税務官制考——ある贈收賄事件を手がかりとして——」(『史泉』六八、一九八八)に詳しい。

四七六 諸て、職官、印契して税錢を納めざる者は、應に納むべき税錢を計り、不枉法を以て論ず。

【解説】 元朝においては、土地・家屋・人口家畜を賣買あるいは質入れする場合には、賣買文書を作成し、これを賣買後に官司に提出し、契税(印契錢)を納附しなければならなかった。これに對し官司は賣買の合法性を審査の上、官印を押した印契を買主に發給する。本條は、この賣買において納附すべき契税(税錢——賣買物の紙幣價值の三十分の一——)が納められていないにもかかわらず、

擔當の官員が契本に官印を押した印契を發給した場合、不枉法の罪に當てるといふ内容である。『元典章』卷二二、契本、契本稅錢、及び仁井田陸前掲『唐宋法律文書の研究』九四〇九六頁參照。

四七七 諸て、市舶、金・銀・銅錢・鐵貨・男女人口・絲綿段匹・銷金綾羅⁽³⁾・米糧・軍器等をば、私販して下海⁽⁴⁾するを得ず。違う者は、舶商・船主・綱首・事頭・火長、各々杖一百七。船・物は官に沒し、首告する者あらば、沒官の物内の一半を以て賞に充つ。廉訪司常に糾察を加う。

(1) 『通制條格』卷一八、市舶の第一條に同内容の文があり、『元典章』卷二二、市舶、市舶則法二十三條の第十四條も關連條文である。

(2) 絹糸、まわた、及び絹紬等の一般の絹織物。

(3) 銷金について、入矢・梅原譯註『東京夢華錄』（岩波書店、一九八三）は「摺り箔」（九九・二二四頁）と譯出している。『明律國字解』も「銷金は、すりはくなるべし」としている。摺り箔の綾・羅（高級絹織物）のこと。

(4) 『明律國字解』に「下海とは、海船にのりて外國へゆくことなり」とある。

(5) 舶商とは出資者である貿易商人、船主とは船舶所有者である船主^{なう}のことで、この二つは必ずしも「下海」はしなかったであ

らう。綱首とは、航海中は乗員・船舶と積荷の賣買處分等一切の權限を委讓され、責任を負っている船長のこと。事頭とは、事務長に相當する幹部船員を指し、火長とは、水手の長で水手を率いて船の航行を指揮する勞働監督者を指す。斯波義信『宋代商業史研究』（風間書房、一九六八）七八〇八九頁參照。

【解説】 以下四條は市舶（海外貿易）に關する條文である。『唐律』には本刑法志のような詳細な規定は存在しない。『明律』では卷一六・兵律・私出外境及違禁下海（二四六）が本條に相當する。

四七八 諸て、市舶司、回帆⁽²⁾の物内に於て、三十分に分を抽稅す。輒に非理を以て財を受くる者は、⁽⁵⁾ 賊を計り、枉法を以て論ず。

(1) 『通制條格』卷一八、市舶の第二條には、同内容の文があり、『元典章』卷二二、市舶、市舶則法二十三條の第一條及び第六條も關連する。

(2) 正しくは市舶提舉司と言ひ、行中書省所屬の官司で、海外貿易全體を管理した。多い時には、泉州・慶元・廣東等七カ所に置かれたが改廢常なかつた。『元史』卷九四、食貨、市舶參照。

(3) 海外で交易を行った後、外國の物資を積んで中國へ歸港してくること。『元史』に「每歲招集舶商、於番邦博易珠翠香貨等物、及次年迴帆、依例抽解、然後聽其貨賣」とあるのが參考となる。『研究譯註』が「諸國を航海して貿易すること」とする

のは不適切。

- (4) 『通制條格』に「抽分則例。粗貨拾伍分中抽貳分、細貨拾分中抽貳分。據舶商回帆已經抽解訖物貨、市舶司並依舊例、於抽訖物貨内、以參拾分爲率、抽要舶稅壹分」とある。回帆の物資から一律三十分の一の現物を税として徴収すること。

- (5) 市舶司の官吏が、不正行爲と關連して舶商等から賄賂を受取る場合は、の意。

四七九 諸て、⁽¹⁾ 舶商、大船には公驗を給し、⁽²⁾ 小船には公憑を給す。

大船一ごとに、柴水船・八櫓船各々一を帶し、⁽³⁾ 驗・憑は船に隨いて行く。或は驗ありて憑なく、及び數外に夾帶するは、即ち私販に同じ。犯人は杖一百七。船・物は並びに官に沒し、内一半は告人に付して賞に充つ。公驗内に物貨を批寫して實ならず、及び轉變滲泄⁽⁵⁾して弊を作さば、漏舶法⁽⁶⁾に同じく杖一百七。財物は官に沒す。舶司官吏容隱すれば、罪を斷じて絞せず。

- (1) 『通制條格』卷一八、市舶の第六條と第七條を合わせたものが、本條の内容と一致し、『元典章』卷二二、市舶、市舶則法二十三條の第七條も同内容である。

- (2) 柴水船・八櫓船を指す。なお大船とは、物貨を積載して、綱首・事頭(さらには舶商・船主も)が乗り込んでいる船をいう。

- (3) 『元典章』では「每大船一隻、止許帶小船一隻、名曰柴水船」

とあり、刑法志本條及び『通制條格』と異なる(『通制條格の研究譯註』第二冊、二九五頁の註⑦参照)。柴水船は、柴や水を運ぶ船、八櫓船は、八つの櫓^しを備えた船を指す。

- (4) 『通制條格』には「亦於公驗内、該寫力勝若干・櫓高若干・船面闊若干・船身長若干、……公驗後空紙捌張、行省用訖縫印於上、先行開寫販去貨物各各名件觔重若干、仰綱首某人親行填寫。如到彼國、博易物貨、亦仰綱首、於空紙内、就於地頭、即時日逐批寫所博到物貨名件色數」と詳しく記している。

- (5) 『通制條格』に「或有沿途山嶼灘岸停泊、⁽⁶⁾ 漏水取柴、恐有稍碇・水手・搭客等人、乘時懷袖偷藏貴細物貨、上岸博易物件。或著商舶之家、回帆將到舶司、私用小船、推送食米接應船舶、却行般取貴細物貨、不行抽解。即是滲泄。……如在番阻風、住冬不還者、次年回帆、取問……是實、依例抽分。若是妄稱風水不便、轉折買賣、……」とあることからわかる。即ち、所定の地で賣買した貨物をさらにその地に不當に滞在したまま、あるいは他の場所⁽⁷⁾で轉賣したり、航行の途中の停泊地で貨物を販賣したり、中國に止まっていた舶商が小船で、回帆してきた船の物貨を市舶司に出向く前に陸上げして販賣するような事を言う。

- (6) 四七七條を指す。

- 四八〇 諸て、⁽¹⁾ 番國、遣使奉貢するに、仍お貢物を具し、市舶司に

報じて稱驗す。⁽²⁾ 若し來帶して與に抽分せざる者あらば、漏舶を以て論す。⁽³⁾

(1) 『通制條格』卷一八、市舶の第一九條に同内容の文がある。

(2) 『通制條格』には「仰具所賣物色、報本處市舶司、秤盤檢驗」とやや詳しく見える。南方の諸國が海上ルートで朝貢使節を送ってきた場合、使節團に命じて貢物のリストを提出させ、そのリストに基づいて市舶司が數量等々について誤りがないか検査をするのである。

(3) 若有夾帶不與抽分。「與」の讀み方が不明。他に「抽分に與らざる」「抽分を與えざる」と讀むべき可能性もある。

四八一 諸て、海門鎮守軍官、輒に番邦回舶の頭目等の人と情を通じ、⁽³⁾ 舶貨を滲泄する者は、杖一百七。除名して敘せず。⁽⁴⁾

(1) 廣東・慶元・泉州等の市舶司が設置された地域の、沿海地方に存在する萬戶府の軍官のことか。

(2) 海外貿易に従事して中國へ回帆してきた船の綱首・事頭等の上級船員のことと思われる。

(3) 連絡を取り、情報交換して、仲間・一味になること。

(4) 四七九條の注(5)に見えるような不正行爲を指す。

四八二 諸て、⁽¹⁾ 寶貨を中賣して、國財を耗盡する者は、これを禁ず。⁽²⁾

(1) 『通制條格』卷一八、中賣、『元典章』卷二、止貢獻の至大四
年三月十八日條が同内容である。

(2) 中賣は、『明律國字解』「中賣とは、官府へ上げて價をとるなり」とあるように、官府・官廳に物資を賣ること。寶貨は、『宋史食貨志譯注(一)』に「寶貨とは、ここでは犀角・象牙・眞珠などの、主として南海諸國より輸入せる物貨を言ふ(六七頁)」とあるのが参考となる。また『通制條格』『元典章』には本條制定のきっかけとなった事件について「比者、寶合丁・乞兒八荅私買所盜內府寶帶、轉中入官、既已伏誅。今後、諸人毋得似前中獻。其札蠻等受管領中寶聖旨、亦仰追收」と記す。また『元史』卷九四、食貨、市舶には「若夫中買寶貨之制、泰定三年、命省臣依累朝呈獻例給價。天曆元年、以其蠹耗國財、詔加禁止、凡中獻者、以違制論云」とある。これらからすると、本條の「中賣寶貨」と『元史』の「中買寶貨」は、結局同一の行爲を、賣り手の立場で記すか、買い手(國家)の立場で記すかの違いに過ぎないことがわかる。即ち「中賣寶貨」は「中買寶貨」の意で、國家が代價を支拂って寶貨を買い上げることである。『研究譯註』が『通制條格』に引きずられて、「內府の盜物を私買して官に賣りつけること」としているのは不適切であろう。

四八三 諸て、⁽¹⁾ 雲南、⁽²⁾ 賈法を行使す。官司・商賈輒に他賈を以て入

境する者⁽³⁾は、これを禁ず⁽⁴⁾。

(1) 『通制條格』卷一八、私貳、『元典章』卷二〇、雜例、禁販私貳に同内容の文がある。

(2) 元朝において雲南地域で通貨として子安貝(貳、貳子、貳貨)を通用させていたことを指す。『研究譯註』第二册三〇五頁の註②参照。

(3) 雲南以外の地域から子安貝を雲南へ持ち込むこと。『通制條格』によれば、江南各地や市舶司のもとには子安貝が多量存在・蓄積されており、これが雲南に持ち込まれる事態が生じていたようである。

(4) 至元十三年の聖旨(『通制條格』)にも「休教將入去者(持つて行かせるのをやめよ)」としかないが、注(1)の『元典章』の大徳五年の聖旨には「如有捉獲、將犯人隨即申解、拘該上司依條斷罪。私貳沒官。告捉人依例給賞。如所在官吏、依前不爲關防、通同作弊者、並行究治」とある。

(長井 千秋)

大 惡

【解説】唐律や明律でいう「十惡」關連の條文がここにまとめられている。但し元代では、たとえば『元典章』四十一、「諸惡」に見られるように必ずしも十惡という用語を使用せず、それと同様にこ

こでも大惡と言っている。四八四條から五三四條まで五十條のこの部分には、いわゆる十惡のうちの、謀反、謀叛、惡逆、不道、不孝、不睦の六項目にかかわる個別具體的な條文が含まれ、『元典章』と深いつながりが感じられる。

四八四 諸て、大臣の、社稷を危くするを謀る者は、誅す。

【解説】唐・明の律の十惡の冒頭に掲げる「謀反」で、謀危社稷の四字はそのままに使われている。現皇帝の人身、主權を侵す行爲と豫備(滋賀『譯註』五、三三頁)だが、大臣のという主體がついている點は違う。誅は、一宗連坐を含意するか。

四八五 諸て、故無くして謀逆を議論すれば、倡を爲す者は死に處し、和する者は流。

【解説】單獨の條文としては些か曖昧な部分が多い。故無くしてというのは、漢代に宮門に掲げられた「無故擅入」(無用の者入るべからず)と似た、單なる形容詞と思われる。謀逆の逆は、謀反、謀大逆、謀叛を一つにしたような表現。以下、陵遲以外の死刑を處死、流刑を流とする條文が普通だが、斬、絞、梟首などの区分は、情狀に従い別に定められたのであろう。倡はいうまでもなく唱と同じく首唱者。

四八六 諸て、^{ひそ}潛かに反亂を謀る者は、死に處す。^{（1）}安主及び兩隣、知りて首せざる者は、同罪。内に能く過を悔い、自首する者は罪を免じ、賞を給す。應捕の人にあらざして首告する者は、これを官とす。

（1）『元典章』卷四十一、謀叛の禁約作歹賊人に同文がある。こ
こでいう謀反亂は、謀叛のことか。

（2）乾隆殿板の『元史』は家人に作るが、『元典章』は安主。安主という名詞は『元典章』には數回あらわれる。安藏主人、安停主人の略で、場所を提供乃至はかくまった人の意。

（3）應捕人は二七八條注（7）、二八四條注（1）などを参照。
上記『元典章』では、不干碍的人、首告呵、量加官職、更與賞者。とある。

四八七 諸て、謀反已に反狀有り、首と爲り、及び情を同じくする^{（1）}者は、陵遲して死に處す。從爲る者は死に處す。情を知り首せざる者、從爲るより一等を減じて、遠に流す。並びにその家を沒入す。その相い須^{（1）}からく連坐すべき者は、各々その罪を以ってこれを罪す。

（1）『吏學指南』は、一緒に計畫をたて實行するのが同謀、謀議に加わったものが同情、同謀せず、犯行を知っていたものが知情と、區別して説明している。

【解説】唐律は第二四八條（賊盜律一）、明律は二七七條が主として關係する。ちなみに明律では刑罰は、『元史』と同じ流れで、陵遲處死、斬、流三千里となっている。

四八八 諸て、父謀反し、子が籍を異にすれば^{（1）}坐せず。

（1）唐律第二四八條では、謀反・大逆の場合、父子年十六以上は皆絞となっている。また、原則として父母在世中の別籍異財は「不孝」に入るから、この條文自體が元代の特殊事情に即應すると考えられる。

四八九 諸て、謀反、事覺^{（1）}われ、捕治して實を得れば、行省、擅に誅殺を行^{（1）}うを得ず。結案して報を待て。

（1）三〇一條注（3）や、『元典章』卷四十、斷獄の重刑結案を参照。

四九〇 諸て、反叛^{（1）}を匿して首せざる者は、死に處す。

（1）謀反と謀叛の兩者か。首告せぬ主體が誰か不明。

四九一 諸て、妖言もて衆を惑^{（1）}わし、囂衆して亂を爲さば、首爲る、及び同謀の者は死に處し、其の家を沒入す。誘惑せらるる所と爲り、相い連りて起つ者は、杖一百七^{（2）}。

(1) 造妖書・妖言は、唐律は二六八條（賊盜律二二）、明律は二七九條で、首犯は絞罪。但しここでは、嘯衆爲亂の反叛にウエイトがあるかと思われる。

(2) 『元典章』卷四一には、妖言虚説兵馬の一條があり、首犯、信從、知情不首はいずれも處斬し、妻子は籍没入官としている。なお十惡のカテゴリーとしては大惡に入れる。

四九二 諸て、神異に假托し、上を犯すことを狂謀する者は、死に處す。

(1) 犯上は、『論語』學而の用例では、單に目上の者を犯すことだが、ここは、謀反、謀大逆で皇帝を主眼とするか。

四九三 諸て、上を犯すことを亂言する者は死に處す。仍おその家を沒す。

(1) 亂言は亂辭悖言。これも謀反の中に含まれる。

四九四 諸て、乘輿を指斥する者は、特恩にあらざれば、必ずこれを坐す。

(1) 唐律一二二條（職制律三三）、すなわち皇帝を誹謗した場合、情理切害ならば斬だが、それ以外は、上請や徒二年という處置も設けられている。ここで「坐」という字がわざわざ使わ

れていることも、それと關連するのだろう。

四九五 諸て、妄りに詞曲を撰し、人を誣するに、上を犯すの惡言を以てする者は、死に處す。

(1) 皇帝や國政誹謗に主として「詞曲」が使われることを前提とする點に時代性がのぞく。

四九六 諸て、職官、輒に、詔旨を指斥し、亂言する者は、赦に會うといえども、仍お除名して絞せず。

(1) 除名不絞は、再び官員とせぬという方向。六四條注(4)參照。

四九七 諸て、子孫、その祖父母・父母を弑する者は、陵遲して死に處す。風狂に因る者は死に處す。

【解説】 以下五二六條までは、十惡の中で「惡逆」とされる範疇の條文である。『元典章』では、この惡逆の頃は、奴と主の殺人事件のみを載せるが、『元史』では、親殺しを筆頭に、近親間の刑罰規定をこまかくならべる。明律三〇七條の謀殺祖父母・父母がこれに近く、實行犯は斬、殺害は本條と同じく陵遲處死である。

四九八 諸て、酔いて後、その父母を毆り、父母に他子無く、死を

免じて養老を告ぐる者は、杖一百七、居役百日。

【解説】唐律三二九條（鬪訟律二八）では父母への殴は斬であるが、ここは酒氣を帶び、いま一つは侍養の丁男がないことで、死を免じている。なお、十惡以外の死罪を犯した者が父母侍養のため特に刑罰を免除される規定は唐律では名例律第二六條にみえる。なお明律は三四二條と一八條が關係する。居役は三二九條の注（一）を参照されたい。

四九九 諸て、子の、その繼母を弑せし者は嫡母に同じ。

（一）唐律第五二條の名例律の疏議に、嫡母、繼母、慈母、養母の定義がある。明律にあつてもこの四母は同じレベルの扱いで、いずれも斬衰三年である。

五〇〇 諸て、部内、惡逆を犯す者有りて、隣佑、社長⁽¹⁾知りて首せず、有司、告を承けて問わざれば、皆これを罪す。

（一）元代の社制については、松本善海「元代における社制の創立」『東方學報』東京一一）や梅原郁「元代差役法小論」『東洋史研究』二三—四）を参照。ちなみに一社は五十家で、そこに一人の社長が置かれる。

【解説】ここでのいう惡逆は、現代風に言えば直系尊屬への暴行と殺害で、それが白日の下に出ると、大變なことになる。桑原隲藏「支那

の孝道殊に法律上より觀たる支那の孝道」『桑原隲藏全集』第三卷、岩波書店）を參看されたい。

五〇一 諸て、子の、その母を弑すれば、獄中にて瘐死するといえども、仍おその屍を支解し、以つて徇^よう。

【解説】ここ何條かは、子が親を殺す惡逆であるため、特に弑の字を使う。瘐死は三一二條注（一）を参照。『研究譯註』が瘐をすべて瘦に誤まつているのは訂正を要する。

五〇二 諸て、祖父母・父母を毆傷する者は、死に處す⁽¹⁾。

（一）四九八條の解説にある唐律、明律ではいずれも斬である。

五〇三 諸て、已に改嫁せし祖母を謀殺する者は、仍お惡逆を以つて論す。

五〇四 諸て、仇を挾^うき、義父⁽¹⁾を毆死し、及び殺傷するも幸いに免るるを獲る者は、皆死に處す。

（一）同姓の男子をもらつて繼承させる過房子や、場合によつて異姓の養子をとつた場合の父親のこと。日本風に言えば養父にあたる。明の問刑條例では、「若於義父母及義父之祖父母、有犯毆罵・侵盜・恐嚇・詐欺・誣告等項、卽同子孫、取問如律。」

とみえる。

五〇五 諸て、財を圖り、義母を殺傷せし者は、死に處す。

(1) 財物が目當てでの意。

【解説】 前條と似た内容で、一緒にして義父母とすれば簡単なのだが、前條は殺意があり、本條はそうでない違いがある。しかし結果としては、義父母への殺傷は既遂・未遂ともに大逆扱いに準ずる。

五〇六 諸て、人の子孫と爲り、或は貧困に因り、或は巫覡の説誘を信じ、祖宗の墳墓を發掘し、その財物を盗み、その埜地を賣りし者は、輕重を驗べて罪を斷ず。屍骸を移棄して、祭祀を爲さざる者は、惡逆と同じく結案す。買う者情を知らば、犯人より罪二等を減じ、價錢は官に沒す。情を知らざれば、事に臨みて詳審す。有司、仍りて埜地を賣るの公據を出給するを得ず。(1)

(1) 『元典章』卷五十、禁治子孫發塚に全く同文があり、そちらの方が丁寧な文章である。巫覡は墓地の風水を説くもの、『典章』は師巫に作る。

【解説】 發塚、開棺等の重罪に關しては、唐律二七七條(賊盜律三十)、明律二九九條があるが、後者は著しく詳細になっている。特に子孫が屍骸を移棄して再び祭らなければ「大逆」扱いの重罪とされる。結案は既出(四八九條)。

五〇七 諸て、人の子孫と爲りて、首と爲り、他盜と同に、祖宗の墳墓を發掘し、財物を盜取せし者は、惡逆を以て論ず。(1) 大赦に遇いて原免せらるるといへども、仍お刺字して遠方に徙し、屯種せしむ。

(1) 『元典章』卷五十、發塚の盜掘祖宗墳墓財物が、この條文の出てくる直接の具體例。その末尾で、幸遇釋免、以此參詳比例、合同凡人強盜刺字、既犯惡逆、難令復居故土、遷徙遼陽、肇州屯種、相應。なお遼陽肇州屯種は、三二七條注(19)、三三四條注(2)などに既出。

五〇八 諸て、婦の、舅姑を毆する者は、死に處す。

(1) 妻が、夫の父・母を毆る行爲は、いうまでもなく惡逆。唐律三三〇條(鬪訟律二九)では絞、明律三四二條も同じ、殺してしまえば陵遲處死。

五〇九 諸て、姦に因りて、其の夫及び其の舅姑を毆死せし者は、陵遲して死に處す。

【解説】 この條文の「姦に因りて」という條件は、もともになる實際の事件がそうであったために加わったもので、妻が夫や舅姑を毆死する惡逆はそれだけで陵遲處死が當然である。

五一〇 諸て、弟の、兄を殺す者は、死に處す。

【解説】 以下八條は、期親尊長の謀殺にかかわる條文。やはり十惡の惡逆に入る。唐律二五三條（賊盜律六）、明律は三〇七條。斬もしくは陵遲處死となる。

五一 諸て、父子の、同にその兄を謀殺⁽¹⁾し、その財を圖りて、その嫂を收むるを欲する者は、父子並びに陵遲して死に處す。

(1) たとえば五一七條のように、明らかに同謀と讀むケースもあり、ここも、刑法用語の「謀殺」にこだわらず、同謀して殺すと訓じてよいかもしれぬ。

【解説】 この條文も、どちらかというと一般的なものではない。やはり現實にこうした事件があつて、その結果を法文に流用したかと想像される。ここでいう兄は、父親の兄であらうし、嫂を收めたのも父の方であらう。

五一二 諸て、兄の、争に因りその弟を毆し、弟還りて其の兄を毆り、致死に解返すれば、赦に會うも、仍お故殺を以て論ず。⁽¹⁾

(1) 唐律では、兄弟への毆は徒二年半で、以下傷害から殺害まで三段階に分けて罪を加重する（三二八條、鬪訟律二七）。明律三四一條もほぼ同じだが、逆に尊長が卑幼を毆つた場合は、折傷がなければ無罪となる。ここではやはり幾つかの條件が錯綜

しているが、故殺の刑罰、すなわち斬が適用される。なお邂逅致死は二九二條注（1）を參看。

五二三 諸て、嫂・叔相い争い、其の嫂を殺せし者は、死に處す。

【解説】 『禮記』の曲禮に、嫂叔は通問せずと言ひ、檀弓には、嫂叔の服無きは、蓋し推してこれを遠ざくるなりとあるように、古來、兄嫁と弟との關係はデリケートだった。明律三四三條では、弟妹が單純に兄の妻を毆すれば、凡人に一等を加うと見えてゐる。なお五四三條を參照。

五四四 諸て、争いに因り、その兄を虐殺⁽¹⁾せし者は、死するといえども、仍おその屍を戮す。⁽²⁾⁽³⁾

(1) この條も、その元となつた事件が、『元典章』卷四一、不睦の穆轄子殺兄にあり、その殺し方は殘虐だった。このため虐殺の二字が入っている。必ずしも重要な條件ではない。

(2) 上記實例では、犯人は、訊瘡發潰身死とある。

(3) 古く『國語』などの用例では、陳尸爲戮と注釋をつける。なお『六部成語』には、重罪之犯、未及行刑而死、應戮其屍という説明がある。

五五五 諸て、争いに因りて怒を移し、その兄を戮傷⁽¹⁾せし者は、

市曹に於て杖一百七、遠に流す。⁽²⁾⁽³⁾

(1) 戮傷は鋭利な刃物で傷つける意。

(2) 刑場の謂。

(3) 『元典章』卷四一、不睦に打傷親兄の條があり、やはり杖一百七下である。ここは刃物を使っているケースのため流遠が加わっているのか。

五二六 諸て、仇を挾き、その伯叔母を毆死する者は、死に處す。

(1) 父の兄弟の配偶者。明律は三四一條。

五二七 諸て、争いに因り、兄弟同謀して、諸父を毆死せし者は、皆死に處す。⁽²⁾

(1) 父方の男兄弟。次條では從父という表現を使う。ケースバイケースで條文を作るため、全體として統一を缺く一例か。

(2) 唐律三二八條、明律三四一條、いずれもこのケースでは斬。

五二八 諸て、仇を挾き、その從父を故殺せんとし、偶ま生免を獲る者、罪は已に死せしと同じ。

【解説】 明律では、期親尊長に對しては謀殺でも陵遲處死である。それが故殺ならより重刑のはずだが、生命をとりとめたからとて、裁判などで論議が生じるため、かかる條文がわざわざ書き記された

のであらう。

五二九 諸て、妻の、争いに因り、その夫を殺せし者は、死に處す。⁽¹⁾

(1) 唐律は三二六條(鬪訟律二五)、明律は三三八條。以下三條は妻の夫への殺傷にかかわる條文。

五二〇 諸て、婦人の、醫人に問いて毒藥を買い、その夫を殺せし者は、醫人も共に死に處す。

(1) ここで婦人というのは、妻といいかえてよいのであらう。こゝうした用語の曖昧さが多くの條文でしばしば感じられる。

五二一 諸て、妻の、その夫を殺傷せんとし、幸いに生免を得し者、殺死と同じく論ず。⁽¹⁾

(1) 五二八條や次條の狀況に同じ。

五二二 諸て、壻の、醉に因りて、その婦翁を殺さんとし、偶ま生免を獲る者、罪、已に死すと同じ。

(1) 妻の父、外舅。

五二三 諸て、奴の、その本主を殺傷すれば死に處す。⁽¹⁾

(1) 『元典章』卷四一の惡逆には、驅奴斫傷本使、奴殺本使など

の例を載せる。

【解説】 以下四條は、奴が主を殺傷する「惡逆」の刑罰規定。唐律は第二五四條（賊盜律七）、明律は三三七條に奴婢關係の律が簡潔にまとめられている。なお、元代の奴婢・驅口に關しては、岡本敬二「元代の奴隸制について」〔史學研究〕六六を參看。

五二四 諸て、奴の、その主を詬訾して不遜なる者は、杖一百七・

居役二年。⁽¹⁾ 役滿つるの日、その主に歸す。

(1) 唐律ではたとえ過失であっても、主を罵詈すれば流刑だった（三二三條）し、舊主を罵詈しても徒二年を科せられた（三三七條）。明律は三五〇條に奴婢罵家長の項があるが、唐とはかなり趣を異にする。居役は三二九條の注（1）を參看。

五二五 諸て、奴の、その主を故殺せし者は、陵遲して死に處す。⁽¹⁾

(1) 唐律第二五四條（賊盜律七）では、謀殺で斬。明律三三七條では、殺はすべて陵遲處死。

五二六 諸て、奴の、主の壻を毆殺せし者は、死に處す。⁽¹⁾

(1) 主の壻は、五服でいえば總麻に當る極めて遠い關係だから、これは毆殺にウエイトがあるのか。

五二七 諸て、仇を挾くはき、人の一家を殺傷せんとし、俱に生免を獲し者、已に死せると同じ。その同謀するも過を悔いて至らざる者は、等を減じて論ず。

【解説】 以下三條は、「一家」という共通項がある。十惡の「不道」の殺一家非死罪三人を意識すると考えられる。明律の殺一家三人は三二〇條、唐律は二五九條（賊盜律十二）。

五二八 諸て、姦を以って、盡くその母黨の一家を殺す者は、陵遲して死に處す。⁽¹⁾

(1) 母親の血縁の族黨。この條も、何か具體的事件の判決部分を抽出して一條としていると思われる。姦と母黨との關係や一家の範圍もこれだけでは判然としない。

五二九 諸て、兄の、仇を挾くはき、子と同謀して、その弟の一家を殺せし者は、皆死に處す。⁽¹⁾

(1) この子は兄の子、つまり兄の親子が共謀して、弟（叔父）一家を殺害するケースであろう。

五三〇 諸て、人を支解し、煮て以て食と爲す者は、不道を以て論ず。瘼死ちしすといえども、仍お燒埋銀を徵し、苦主に給す。⁽²⁾

(1) 支解は狹義には四肢を身體からきり離すこと、ここは人體を

バラしての意。

(2) 二九二條注(2)に既出。

五三一 諸て、大臣を魘魅⁽¹⁾する者は、死に處す。

(1) 魘魅は唐律以來「不道」とされる。疏義では、その事多端なれば具述すべからずという。『吏學指南』では、謂事邪鬼、或用人爲牲、或將人名告於邪魔、令人病死顛狂者と解説する。いのり、呪い殺し。

【解説】『元典章』卷四一の不道には、厭鎮の一條があり、阿合馬が厭鎮者から賄賂を受取つて處刑しなかつたことが記されている。何らかの混亂で、阿合馬を意識しつつここに大臣の二字が入つたのかも知れぬ。

五三二 諸て、妻の、その夫を魘魅し、子のその父を魘魅し、大赦に會う者は、子は遠に流し、妻はその夫の嫁實に従う。

五三三 諸て、蠱毒⁽¹⁾を造り、人に中⁽²⁾てし者は、死に處す。

(1) 造畜蠱毒は唐律以來十惡の「不道」に入っている。蠱毒は人をしてそれと氣づかずに毒殺できる物質をいう。『本草』では、多くの蟲を皿の中において共喰いさせ、残つたものが蠱であるといひ、律もこれによって、造畜の字を附す。數多くの蠱毒を

持つ蟲があり、普通はそれらを食物中に入れて人を殺す。

(2) 『元典章』卷四一、不道の造畜蠱毒參看。

五三四 諸て、生人を採り、支解して以つて鬼を祭る者は、陵遲して死に處す。仍おその家産を沒す。その同居の家口、情を知らず

といえども、並に遠方に徙す。已に行うも曾つて人を殺さざる者は、強盜の、曾つて人を傷つけず、財を得ざるに比して杖一百七

・徒三年。謀していまだ行わざる者は、九十七・徒二年半。その

應に死すべきの人、能く自首し、或は同罪を捕獲せし者は、犯人の家産を給す。應捕の者は半ばを減ず。

(1) 普通には採生祭鬼、すなわち生きてゐる人間を殺して、鬼神を祭る行爲。十惡の「不道」に入る。本條は『元典章』卷四一、不道の採生蠱毒とはほ同内容である。

(2) 『元典章』卷四九、強竊盜の處斷盜賊斷例を參照。

(3) 注(1)の『元典章』では、其應捕之人而自能赴官首告、或捉獲同罪者、與免本罪とあり、意味が變つてくる。應死者なら、犯人がということで、そちらをとるべきか。

姦 非

【解説】五三五以下五九二に至るまでの五二條は、何らかの形で

「姦」と關係する條文を集める。唐律では姦罪を獨立させず、雜律の中に七條に分けておさめている。これは宋代の『慶元條法事類』にも踏襲され、卷八十の雜門に、諸色犯姦が入っている。ところが、元代では、ここに見られる通り、一つの大項目中に多くの條文がまとめられ、その方向が、明律にも繼承されて、刑律八におかれた十一條の犯姦となる。なお『元典章』は姦を奸に作る。

五三五 諸て、和姦する者は、杖七十七。夫有る者は、八十七。姦

婦を誘いて逃ぐる者は一等を加う。男女罪は同じ。婦人は衣を去りて刑を受く。⁽²⁾ いまだ成らざる者は、四等を減ず。夫有るの婦人を

強姦せし者は死。夫無き者は杖一百七。未だ成らざる者は、一等を減ず。婦人は坐せず。⁽³⁾ その媒合及び容止する者は、各々姦罪より三等を減じ、止だ見發の家を理む。私和する者は、四等を減ず。

(1) 『元典章』四十五、諸姦の冒頭の表はこの條でいう通りの刑罰になっている。また同じ典章四十五、和姦に、和姦有夫婦人の一例があげられている。ここでは舊例では有夫婦人の和姦は徒二年と稱し、唐律四一五條（雜律二七）に近い。なお、明律

三九〇條は、元代の條文に類似。

(2) 普通は婦人の笞杖は單衣をまとうが、姦罪は別扱い。

(3) 元代の強姦の事例は、『元典章』四十五、強奸にいくつか挙げられているが、強奸有夫婦人、強奸無夫婦人などが部分的に

關係する。

(4) 密通の手引きをしたり、場所を提供したりすること。

【解説】 姦罪の基本を説明している條文。和姦と強姦がそれぞれ有夫と無夫、既遂と未遂に分れ、それに關與する第三者が加わる。

五三六 諸て、指姦⁽¹⁾は坐せず。

(1) 『元典章』四十五、には「指奸」の項目をたてる。指出通奸すなわち姦罪の風聞をたてることだが、姦罪は現行犯や利害にかかわる當事者でないと有効に成立しにくい。

五三七 諸て、夫無き婦人の孕む有り。某人と姦すると稱するは、すなわち指姦と同じ。罪は本婦に止む。⁽¹⁾

(1) 『元典章』四十五、指奸の指奸有孕例に實例があがっている。この場合奸夫が白狀しなければ妊娠明白な婦人のみが罰せられる（杖七十七）。

五三八 諸て、宿衛の士の、宮女と姦せし者は出軍せしむ。

【解説】 宿衛は怯薛、宮女も宮城内の女性であるから、本條は必ずしも一般男女の密通ではない。出軍については『元典章』四十九、強竊盜の流遠出軍地面が参考になる。

五三九 諸て、翁の、男婦を欺⁽¹⁾姦⁽²⁾し、已に成る者は死に處す。未だ

成らざる者は杖一百七。男婦は宗に歸⁽³⁾す。和姦⁽⁴⁾せし者は、皆死に處す。男婦の、翁の姦は已に成れりと虚執⁽⁴⁾し、有司已に翁に拷掠を加え、男婦虚と招せし者は、死に處す。翁の姦、未だ成らずと

虚執し、已に翁に拷掠を加え、男婦虚を招せし者、杖一百七。夫家に發付し、その嫁買に従⁽⁵⁾う。婦の告、或は翁の告同じ。若し男婦、翁の姦已に成れりと告し、却つて翁欺姦を欲すれど未だ成らざれば、男婦妄りに重事を告するを問得せば、答三十七。宗に歸せしむ。

(1) 翁は夫の父親、男婦は息子の嫁。この兩者もとかく問題をしやすい。

(2) 欺姦に對して『明律國字解』は「密通したると言いかくるなり」と説明する。しかし強姦でなく、和姦でもない、だまして姦する方向も考えられる。嫁に手を出そうとして失敗した翁は、往々にして事實無根をいつて嫁を不利な立場に追いこもうとし、嫁の側でもそれを利用するケースが少くなかったらしい。

(3) この實例は『元典章』四十一、内亂の強姦男婦未成に見え、已遂の方も同じ部分の翁姦男婦已成にある。

(4) 嘘の主張、執は強く言いやる。

(5) 男婦が翁の姦を告發する例は、『元典章』四十五、指姦の男婦執謀翁姦を參照。

五四〇 諸て、義男の婦を欺姦すれば、杖一百七。欺姦成らざれば杖八十七。婦は並びに坐せず。婦及びその夫、異居せしめて差に當つ。赦に會うといえども、仍お異居せしむ。

(1) 義男は異姓の養子。五〇四條參者。息子の嫁とは縁は薄く、罪は前條より輕くなる。

五四一 諸て、男婦と姦夫、翁の欺姦を誣いて、買休・出離を謀る者は、杖一百七。夫の嫁買に従う。姦夫は一等を減じ、買休の錢は官に沒す。

【解説】これは、婦翁の欺姦を逆に、姦夫と男婦が利用しようとした例。ありもせぬ欺姦を言いたて、手切金を要求し、離別して姦夫と男婦が一緒になる魂膽である。買休を『明律國字解』は「かねを出して去らすことなり」という。

五四二 諸て、弟の妻と姦する者、各々杖一百七。姦夫は遠に流す。姦婦は夫の欲する所に従う。

【解説】この條の後半の、姦婦は弟、姦夫は自分の妻、夫は自分を指す。恐らく具體的な事件の判例をそのまま條文にしたため、かかる用語になったかと思われる。ちなみに明律三九二條の親屬相姦では兄弟の妻に對する姦は絞である。

484

五四三 諸て、嫂寡にして、志を守るに、叔強姦せし者は、杖九十⁽¹⁾。
十七。

(1) 五二三條を参照。

五四四 諸て、同居の姪婦と姦すれば、各々杖一百七。官有る者は除名⁽¹⁾す。

(1) 姪婦は男系の甥の嫁。これも、何故突如ここのだけ、除名が出てくるのか判然としない。

五四五 諸て、姪婦を強姦して、いまだ成らざる者は、杖一百七。

【解説】これが明律などであれば、總麻以上の親及び總麻以上の親の妻を姦すれば、杖一百・徒三年という中に含まれるのに、一つ一つ、ケースによって同じような條文をならべている感がある。次條もひとまとめになり得る規定。

五四六 諸て、兄弟の女と姦せしは、皆死に處す。從兄弟の女と姦せしは、一等を減じ、族兄弟の女と姦せしは、二等を減ず。

【解説】族兄弟は通例の五服というと總麻であり、その娘は無服となる。從兄弟は、大功に當り、その娘は小功になる。ところが、本條では、從兄弟と族兄弟の間の、小功に當る再從兄弟がないのは良く判らぬ。兄弟の女、すなわち男系のめいは、在室(未婚)なら期

親で、この姦は十惡の内亂に相當し、死刑は當然。

五四七 諸て、父母の喪に居り、父の妾を欺姦せし者は、各々杖九十⁽¹⁾。婦人は宗に歸せしむ。

【説明】このケースは、父母の喪中で姦罪を犯したとこと、その相手が父の妾だったという點で、十惡に入り得る大罪である。明律では、喪中の姦は凡姦に二等を加うとあるから、杖八十に二等で杖百。ここでは杖九十七とかなり軽く、相手が亡父の妾だったことは無視されているかに見える。

五四八 諸て、姦私再犯⁽¹⁾なれば、罪一等を加う。婦人は、その夫の嫁賣を聽す。

(1) 姦通私通の省略形と考えられる。末文の聽も、これまでは從と書かれていた。聽從という熟語のどちらの部分を使っても意味が全く同じなのか、若干ニュアンスが違うのかよく判らぬ。この一條も必ずしも深く考えられた法文ではなさそうである。

(2) 『元典章』四十五、凡奸の犯奸再犯。

五四九 姦に因り、家財を偷遞するも、止だ姦を以て論ず。

(1) 偷遞の遞の意味が良く掴めぬ。偷みうつすことか、あるいは櫛Ⅱうばうの誤まりか。

五五〇 諸て、人の妻を雇いて妾と爲し、年滿ちて歸らしめ、雇主の、復たともに通ずれば、即ち姦を以つて論ず。因りて又その夫を殺すに與る者は、皆死に處す。

【解説】 妻と妾の法律上の地位は、雲泥の差がある。この場合は經濟的理由などで、夫が妻を年奉公の妾に出した例。往時の日本の遊女などの場合を連想してもらえばよい。後半は、年期がきた時のトラブルの問題になる。

五五一 諸て、子の、姦を犯し、父出首するも、仍おこれを坐す。

五五二 諸て、姦は首原を理めず。

【解説】 この二條を、『研究譯注』は一條にしているし、また中華書局本の『元史』も一條になっているが、やはり二つに分ける方がよからう。後の一條は、唐律第三七條、明律二四條の「若私越度關及姦、併私習天文者並不在自首之律」という名例からとっている。

五五二 諸て、姦生の男女、男は父に隨い、女は母に隨う。⁽¹⁾

(1) 『元典章』四十五、奸生子の奸生男女ではこの條文通りの記事がある。ただし、女性が婢だった場合は子は母に隨う。この法規は時代によって相違があり、宋代では、姦生子は特に母が自から撫養を願わぬ限り、父に隨うとなっている（『慶元條法事類』卷八〇、諸色犯姦の戸令）。

五五三 諸て、僧・尼・道士・女冠の、姦を犯さば、斷後、並びに勒して俗に還さしむ。⁽¹⁾

(1) 『元典章』四十五、僧道奸の僧道犯奸還俗。既出五三五條の規定で、杖七十七もしくは八十八に處斷してから還俗させる。唐代では、僧道の姦は凡人より二等を加重された（第四一六條、雜律二八）し、明律三九六條もそれを踏襲するが、同類相姦は凡人に同じで、ここはそのケースであらう。

五五四 諸て、人の、幼女を強姦せし者は、死に處す。和といえども強と同じ。女は坐せず、凡そ、幼女と稱するは、十歳以下に止む。

【解説】 以下四條は、幼女に對する暴行罪の罰則である。こうした事件はしばしば起つたようで、『元典章』四十五の強奸の部分にも幾つか實例があがつている。本條とかかわる記述は、強奸幼女處死（二條あり）である。

五五五 諸て、年老の、人の幼女を姦すれば、杖一百七。贖を聽さず。

(1) 唐律第三〇條の名例で、七十歳以上七十九までは、流罪以下は收贖が認められている。ここでは、そうした老人の幼女暴行で、前條の特例ともいえる。『元典章』四十五、強奸の年老奸

汚幼女は、七十五歳の老人が九歳の幼女にいたずらした實例を載せている。

五五六 諸て、十五歳いまだ丁男と成らざるに、十歳以下の女を和姦すれば、和といえども強と同じ。死を減じ、杖一百七。女は坐せず。⁽¹⁾

(1) やはり責任能力の不完全な者が幼女暴行を犯した場合の條文で、前條と逆のケース。『元典章』四十五、強姦の奸八歳女斷例では、十四歳の少年が、六歳、八歳の幼女に暴行した二例があげられている。

五五七 諸て、十歳以上の女を強姦せし者は、杖一百七。⁽¹⁾

(1) この條文では女性の方が十歳以上のケース。やはり『元典章』の強姦に、奸幼女の例がみえ、「強姦十歳以上室女、擬斷一百七下」の文字がある。

五五八 諸て、妻の前夫の男婦を強姦し、及び妻の前夫の女を強姦して已に成らば、並びに杖一百七。妻はこれを離す。

(1) 妻の連れ子の嫁のこと。

【解説】 自分と直接血縁關係にない、義男の嫁と義女を、義父が奸するケースであるが、やはり「内亂」罪が適用される。『元典章』

四十五の内亂では、妻告夫奸男婦斷離、と奸義女已成の二條が關係する。本條はそれらを綱い交ぜにできている。但し、並びに杖一百七というが『元典章』では義女の方は九十七下で一等違う。

五五九 諸て、三男の、一婦を強姦せし者は、皆死に處す。婦人は坐せず。⁽¹⁾

(1) 三男は衆と同義。いわゆる輪姦。

五六〇 諸て、職官の、姦を犯せし者は、常律の如くし、仍お除名す。⁽¹⁾但し、祿有るの人、犯す者も同じ。⁽²⁾

(1) 『元典章』四十五、官民奸の職官犯奸杖斷不敘にこの通りの處罰がある。除名は除名不敘の略。

(2) 明律では、たとえば受贓罪などで、有祿人と無祿人に二分し、罪一等の差をつける。『明律國字解』では、「内外大小の文武の見任官並に内外大小の吏典の月俸一石以上なるを云也」と説明する。

五六一 諸て、職官の、姦を求めていまだ成らざる者は、笞五十七。見任を解き、雜職もて敘す。

(1) 宋代には雜職は州縣の職役、とくに胥吏化した雜役人を意味したが、元代では、太常・光祿・太僕・鹽運司・倉場・庫務・

驛遞などの下級官を指すように變る。宋代の監當官に相當すると考えてよく、従つて六品以下の蔭除錢穀官と言いかえられたりする。一〇四條の注(2)を參看。

五六二 諸て、職官、部民の妻を誼するに因り、その夫、妻を棄つるを致す者は、杖六十七、職を罷め、二等を降し、雜職もて敘し、過を記す。

(1) 『元典章』五十四、非違の縣官扯誼部民妻に、縣の達魯花赤がこうした行爲で處罰された例がみえる。誼は下心があつてちよつかいを出す。いまで言うときセクハラ。

五六三 諸て、職官、部民の妻を強姦せんとしていまだ成らざれば、杖一百七、除名して敘せず。

(1) 唐律では第四一六條(雜律二八)に相當し、凡人より一等を加重される。明律では凡姦罪より二等を加え、職・役を罷めて不敘とある。(三九五條)。本志三五三條の規定とは本條は必ずしも整合してはいないかと思われる。

五六四 諸て、職官、姦に因りて、部民の妾を買い、姦、姦所⁽¹⁾の捕獲に非ざれば、止だ部民の妾を以て論じ、笞三十七。職を解きて別敘す。

(1) この部分不詳。姦の姦所に非ずして捕獲すると讀んでも、姦通の現場がおさえられたのでなければという意味になろう。本條は、『元典章』五十四、非違の縣官強姦部民小妻にやや類似するが、處罰のランクは違ふ。

五六五 諸て、監臨官、監臨する所の囚人の妻と姦せし者は、杖九十七。除名す。

(1) 『元典章』四十五、嚇奸に、欺奸囚婦として、未決囚の妻をおどかして姦した例がみえる。この條は五六〇條の特例と考えられるが、職官・部民といったり、監臨の語を使つたり、統一がとれていない。

五六六 諸て、職官、倡優の妻と姦し、因りて娶りて妾と爲す者は、杖七十七。職を罷め敘せず。

(1) 倡優は賤民視されるが、奴とは違ふ。本條は、二つの事柄から成るが、兩方の條件を綜合した處罰か。

五六七 諸て、監臨⁽¹⁾の、人をして部する所の寡婦を姦汚せしむる者は、杖八十七、除名す。

(1) これも正しくは監臨官か。所部は監臨する所と同意と考えられる。監臨官が別の人に姦犯の便宜をはかるケース。

五六八 諸て、蠻夷の官、擅に籍没の婦人⁽¹⁾を以て妻と爲す者は、

杖八十七。職を罷め、過を記す。婦人は笞四十七。

(1) 具體的には十惡など、重罪連坐の女性を指すのであろうが、

主語の蠻夷の官と同様に、どのような状況を想定すべきかが判然としない。

五六九 諸て、主の、奴の妻を姦せし者は、坐せず⁽¹⁾。

(1) 五七四條の逆のケース。『元典章』四十五、主奴奸の主奸奴妻では、「主の奴妻を奸するは、罪に坐するを議し難し」とする。

五七〇 諸て、奴に女有り、已に良人の妻と爲るを許嫁さるれば、

即ち良人爲り。その主、輒りに欺姦せし者は、杖一百七。その妻、

これを縱す者は、笞五十七。その女の夫家、仍お婚を爲すを願う

者は、元議せし財錢の半ばを減す。願わざる者は、元下せし聘財を

追還し、父をして收管せしめ、良と爲して改嫁せしむ。

【解説】 奴の娘が、良人と婚約し、結納をとりかわしたあと、奴の主人が彼女を欺奸するケース。それをやめさせるべき立場の主の妻が見ぬふりをして罰せられる。女の結納は主人が出すのであろう。あとの父は奴を指す。

五七一 諸て、奴の、主の女を姦する者は、死に處す。

(1) 唐律第四一四條（雜律二六）では、主及び主の期親を姦した奴は絞。明律三九四條は、家長の妻及び女を姦すれば斬と決められている。『元典章』四十五、主奴奸の奴奸主幼女例を参照。

五七二 諸て、僮從⁽¹⁾を以て命婦⁽²⁾と姦し、命婦を以て姦夫に従いて逃げし者は、皆死に處す。

(1) 僮從は従人あるいは跟隨人と言いかえられる。『明律國字解』はおそばづきの家來というが一種の召使い。

(2) 命婦は品官の妻。本條は『元典章』卷四十五、主奴奸の品官妻與従人通奸が参考になる。

(3) この部分の以の字が讀めない。而といった字の誤りではないか。

五七三 諸て、主の妻を強姦せし者は、死に處す⁽¹⁾。

(1) 普通の強姦でも死刑なのに、わざわざこのような條文で念をおす理由はよく判らない。

五七四 諸て、奴の、主の妾と姦せし者は、各々杖九十七⁽¹⁾。

(1) 明律三九四條では、妾への姦はやはり妻より一等が減じられている。

五七五 諸て、良民、奴婢を竊み子を生ましむれば、子は母に隨いて主に還す。奴、良民を竊み子を生ましむれば、子は母に隨いて良となす。なお異籍して差に當つ。

【解説】 良民の男と奴の女、奴の男と良民の女の姦生子の扱い方をさめる。前者については『元典章』四十五、奸生子の奴婢生子隨母が關係する。後者は、子供だけに別に戸籍をたてることがか。

五七六 諸て、奴婢相い姦すれば、笞四十七。

(1) 『元典章』四十五、奴婢相奸に同名の一條がある。明律三九七條では、奴婢相奸は凡人を以て論ずで、和姦は杖八十に處せられるが、ここは著しく軽い。やはり元代の特色と考えるべきか。

五七七 諸て、夫、財を受け、妻を縦ちて倡を爲させし者、夫及び姦婦、姦夫、各々杖八十七。これを離す。若し、夫、財を受け、妻妾を勸して倡を爲させし者、妻は情を量り罪を論ず。

(1) 倡は今でいえば賣春。爲倡はこの場合は金錢づくで他の男と通じる意。

【解説】 自分の妻を他人の男と意圖的に交わらせる場合、たとえば、姦通の既成事實を利用しようとするのが前半、妻妾に強制的に他の男をとらせるのが後半としてよからう。ここも各主體の用語がまち

まち。『元典章』四十五の縱姦には三條があげられており、どれも參考にできるが、最後の通奸許諸人首捉が直接本條とかかわる。明律も三九一條に縱容妻妾犯奸の一條を設ける。

五七八 諸て、和姦し、同に財を以て買休せんと謀り、却て娶りて妻と爲す者は、各々杖九十七。姦婦はその夫に歸す。

(1) 和姦は夫ある者の時は杖八十七。それを利用して、カネで離婚させ、その姦婦と正式に結婚することは認められぬ。

五七九 諸て、夫妻睦まじからず、夫、威を以て虐げ、その妻に逼り、人と姦するを指せし者は、杖七十七。妻は坐せず、これを離す。

(1) 五三六條の、諸指姦不坐と關係するが、夫の情狀は重く、彼のみが杖刑を受ける。

五八〇 諸て、婿の、妻の父と女の姦を誣うる者は、杖九十七。妻はこれを離す。

(1) まわりくどい表現である。これは『元典章』四十五、指奸の虚指丈人奸女をふまえている。そこでは婿は養老女婿のこと。その妻は義父の娘だが、この實の娘と父親が通じたと指姦したため、妻・父・女という妙な表現となる。法文としては通常は成

立しにくい一條である。

五八一 諸て、夫の、姦を指してその妻を棄て、指せられし所の姦夫、輒に妻を停めてこれを娶りし者は、兩つながらこれを離す。

五八二 諸て、姦夫、姦婦の、同謀してその夫を殺す者は、皆死に處す。仍お姦夫の家屬より、燒埋銀を徵す。

【解説】 以下十條は姦犯を原因として起る殺人に對する處罰をならべる。本條は、『元典章』四十二、謀殺の因奸謀殺本夫や、因奸同謀勒死本夫と關係する。なお同謀は同にその夫を謀殺すると訓んだ方がよいかも知れぬ（五一一條參看）。

五八三 諸て、姦に因り、その本夫を殺され、姦婦情を知らざれば、死を減ずるを以て論す。⁽¹⁾

(1) 『元典章』四十二、諸殺の圖表によれば、因奸殺夫の部分に、奸人夫を殺し、奸婦情を知らざれば、杖一百七、夫家の嫁賣に従うと書かれている。明律三〇八條では情を知らなくても絞とされる。

五八四 諸て、妻の、人と姦し、同謀してその夫を藥死せんとし、偶ま生免を得し者、罪は已に死すと同じ。例に依りて結案す。⁽¹⁾

(1) 藥死にせよ何にせよ、姦夫姦婦が同謀して夫を殺せば處死。

ここは殺害未遂の場合を問題にしているが、結果は同じ手續となる。例に依りて結案は三〇一條の注(3)に既出。依例は法規通り、規定通りの意味で、とりたてて宋や明代以後の律と例の關係を想起しなくてよい。

五八五 諸て、婦人首と爲り、衆姦夫と同謀し、親からその夫を殺す者は、陵遲して死に處す。姦夫の、同謀せし者は、常法の如くす。⁽¹⁾

(1) 常法の如くというのは、上記五八二條の規定で處死。明律三〇八條では、妻妾が姦に因り、同謀して親夫を殺死すればここと同様陵遲處死、姦夫は處斬となっている。

五八六 諸て、夫、妻の姦を獲、妻拒捕すれば、これを殺すも、罪無し。⁽¹⁾

(1) 明律三〇八條では、姦通の現場で、姦夫、姦婦を夫が殺しても、おかまいなしとされている。妻が抵抗し、それを殺しても當然無罪ということは、元代でも同じだった。

五八七 諸て、夫無きの婦と姦し、妻と爲さんことを約し、却りて正妻を毆死せし者は死に處す。⁽¹⁾

(1) ありそうな話したが、唐律以來の鬪訟律でも、正妻を毆殺すれば絞罪になる。

五八八 諸て、姦婦と同謀して、その正妻を藥死せし者は、皆死に處す。

五八九 諸て、妻妾、人と姦し、夫の、姦所に於て、その姦夫及びその妻妾を殺し、及び人の妻と爲りて、その強姦の夫を殺さば、並びに坐せず。若し姦所に於てその姦夫を殺し、妻妾免るるを獲その妻妾を殺し、姦夫免るるを獲し者は、杖一百七。⁽¹⁾

(1) 本條は『元典章』四十二の、因奸殺人に見える、殺死奸夫、打死奸夫不坐、打死犯奸妾などの諸事例の判決をまとめたものと言ふことができる。

五九〇 諸て、姦夫の、姦婦を殺死せし者は、常人を故殺すると同じ。⁽¹⁾

(1) 實際の例としては、『元典章』四十二、因奸殺人の殺死奸婦に、この時に限つて言うことをきかなかつた姦婦を姦夫が斧で殺した事件がある。故殺は處死で斬刑である。

五九一 諸て、姦を求めて従わず、その婦を毆死すれば、強盜の仗

を持し、人を殺すを以て論ず。⁽¹⁾

(1) 具體的には斬刑に處する意。

五九二 諸て、兩姦夫と一姦婦、皆宿約有り。その先に至りし者、鬪に因りてその後に至る者を殺さば、故殺を以て論ず。

(梅原 郁)

盜 賊

五九三 諸て、盜賊、共に盜みし者は、贓を併せて論ず。⁽¹⁾ 仍お、造意の人を以て首と爲す。隨從する者は、各々一等を減ず。⁽²⁾ 或いは二罪以上俱に發すれば、その重き者に從いてこれを論ず。⁽³⁾⁽⁴⁾

(1) 『唐律』賊盜五〇以來、強盜・竊盜の共犯者は、併贓の論理に從つて、盜んだ贓物の總額に對して刑を科される。なお『明律』では、わざわざこの一條を立てず、盜罪の各則の中に解消されている。

(2) これは『唐律』名例四二や『明律』名例律・共犯罪分首從(二九)においても、つねに共犯關係の基調をなす概念。造意とは「犯罪を遂行しようとする共同意思の形成および持續の上に最も主導的な役割を果たすこと」であり、隨從は「造意・元謀にひきずられて犯罪に参加すること」を言う(『譯註』五、二五一〜二五二頁)。本條は『唐律』賊盜五〇ならびに『明律』刑

律・賊盜・竊盜(二六二)と構成は同じだが、共犯に關する細かな概念規定は一切割愛されている。

(3) 二罪俱發は、併合罪の基本原則。三〇六條に前出。『刑統賦疏』に「斷例とは、即ち唐律十二篇、名例は獄官に提出して條格に入る」とあるように、總則たるべき名例律の内容が各々の條文の中で、一つの要素となつて溶けこみ行われているところに、元朝法制の特徴を窺わせる。

(4) 『元典章』卷四九、刑部、強竊盜、強竊盜賊通例の第三條。

【解説】 以下六條は、いずれも強竊盜賊通例の「諸の」という書き出しで始まる各則を一條ごとに列記したもので、本來は條畫として簡條書きされた單行法令に他ならない。『元史』卷二〇、成宗紀三、大德五年(一三〇二)十二月辛卯に、定強竊盜條格、凡盜人孳畜者、取一償九、然後杖之。と記す部分と照應する。

五九四 諸て、竊盜の初犯は、左臂に刺し〔已に財を得し者を謂う〕⁽¹⁾、再犯は右臂に刺し、三犯は項に刺す。⁽²⁾ 強盜の初犯は項に刺し、並びに警跡人に充つ。官司、法を以て拘檢し、これを關防す。⁽⁴⁾ その蒙古人の犯すあり、及び婦人の犯す者は、刺字の例に在らず。⁽⁵⁾

(1) 『元典章』卷四九、刑部、強竊盜、強竊盜賊通例の第五條に従い、この部分は注記に改めるべきである。竊盜に着手しても、財物を取得しなければ、刺字は免除される。

(2) 竊盜犯に對し、犯行回數に應じて刺字する仕方は、遼制を嚆矢とする。初犯は右臂、再犯は左臂、三犯は右頸部、四犯は左頸部、そして五犯では死刑とのきまりは、大枠に於て、元制の祖型をなすとみることが出来る(『舊五代史・遼史・金史刑法志譯注稿』『東方學報』京都・第六六冊、一九九四、四八七頁)。

但し、『明律』刑律・賊盜・竊盜(二九二)では、三犯は刺項せず、直ちに絞罪に處せられ、刑罰は格段に重くなる。

(3) 『元典章』卷四九、刑部一、警跡人、盜賊刺斷充警跡人の、中統五年に欽奉した聖旨條畫によれば、元初には、強盜初犯は、死刑囚を除き、強盜一度と右臂に刺字するだけで、刺項の對象は、竊盜再犯に限られた。

(4) 前注と同書同卷の警跡人轉發元籍に、本部議得、斷放強竊盜賊、發付元籍官司籍記、充警跡人、門首置立紅泥粉壁、開寫姓名・所犯、每上下半月、赴官衙賀、令本處社長・主首・隣佑常加檢察、但遇出處經宿、或移他所、須要告報得知。違者、即便申官追究。若失覺察、放令別作非違、量情斷罪、捕盜官專一提調、用心關防。と見える。警跡人は、日本近世の目明かしと似て、盜みの前科ゆえに、警吏としての使役に有効だったものの、反面それは彼らに對する監視を缺かせぬ理由ともなった。三二三條の注(1)を參照。

(5) モンゴル人は、この點でも色目人と共に特權を享受できた。

七一八條を参照。『元史』卷三八、順帝紀一、元統二年七月壬寅に、詔、蒙古・色目人犯盜者免刺。とわざわざ斷るのは、それがもはや自明ではなくなった元末の事情を反映するのであらう。

(6) 『明律』名例律・工樂戶及婦人犯罪(一九)では、婦人は盜罪に限らず、刺字を免除するのが通例となっている。

五九五 諸て、盜贓を評る者は、皆な至元鈔を以て則と爲す。⁽¹⁾ 正贓を除くの外、仍お倍贓を追す。⁽²⁾ そのいまだ獲ざる賊人あり、及び獲るといへども、償を追するなければ、並びに有する者の名下より追徴す。⁽³⁾

(1) 『元典章』卷四九、刑部一一、強竊盜、強竊盜賊通例の第六條。

(2) 正贓即ち一の盜みに對し、倍贓の一を併徴して、被害者に返還させるのは、『唐律』以降變わらぬ原則(名例三四)。盜贓は元代でも各地で十日ごとに公定される時估を基準に評價算出された。但し、その表示は至元鈔だてで行うきまりであった。『元典章』卷四九、刑部一一、評贓、贓依犯時估價は、例外的に民間の時估を用いた斷例である。七〇四條以下、及び『明律』の二三條、名例律・給沒贓物を参照。

(3) 注(1)の『元典章』は、追徴を均徴に作る。贓物について、

賠償可能な共犯者や犯人の家屬に均等に割り付け徴收する意にほかなるまい。

五九六 諸て、徒を犯せし者、⁽¹⁾ 徒一年は杖六十七、一年半は杖七十七、二年は杖八十七、二年半は杖九十七、三年は杖一百七をば、皆な先に決し訖り、然る後、合屬に發遣し、帶鐐して居役せしむ。⁽²⁾ 應に配役すべき人は、金・銀・銅・鐵の洞冶、屯田、隄岸、橋道の一切等の處に隨いて作に就き、人をして監視せしめ、日ごとに工程を計り、滿つる日に放還して警跡人に充つ。

(1) 『元典章』卷四九、刑部一一、強竊盜、強竊盜賊通例の第七條。

(2) 元代の場合、徒刑は主として盜罪や私鹽の禁に觸れた者に適用される刑罰であったため、この條で改めてその内容に觸れる結果となっている。強制労働の實態は、『明律』の徒刑になると、煎鹽・炒鐵の形で繼受されていく。三二九條と三三二條の注(1)及び三三四條を参照。

(3) 注(1)の『元典章』はここに、工役の二字句が入る。個人單位で生産ノルマを課し、刑期を量るといっても、その實効性は疑問と言わねばならない。

五九七 諸て、盜いまだ發せずして自首せし者は、その罪を原す。⁽¹⁾

能く同伴を捕獲する者は、仍^なお例に依りて賞を給す。⁽²⁾その事主に於て、損傷する所あり、及び首を准^よさるるも、再犯すれば、原免の例には在らず。⁽³⁾

(1) 犯罪發覺の前に自首した場合の特典を記す。この條も『唐律』名例三七に基づく大原則で、本來は盜罪に限定されるものではない。

(2) 『明律』名例律の二四條、犯罪自首には、其強竊盜、若能捕獲同伴解官者、亦得免罪、又依常人一體給賞。と同じ趣旨の記述が見える。

(3) 『元典章』卷四九、刑部一一、強竊盜、強竊盜賊通例の第八條。『明令』九九條の刑令・盜賊自首はこれをふまえたもの。

五九八 諸て、杖罪以下は、府州が追勘⁽¹⁾して明白なれば、即^たに斷決するを聽^ゆす。⁽²⁾徒罪は、總管府にて決配⁽³⁾し、仍^なお合干の上司に申して照驗せしむ。流罪以上は、須^{かな}ず廉訪司官に牒^だし、審覆^{しんぷく}して冤なければ、方めて結案するを得、例に依りて報を待たしむ。その徒伴のいまだ獲^とる者あり、追會に完ならざる者あれど、もし復審既に定まり、贓驗明白にして、理として疑うべきなければ、亦た上に依りて歸結するを聽^ゆす。⁽⁶⁾

(1) 追勘は追贓勘問、贓物を押收し、獄内で訊問する。斷決は斷罪決遣、判決を下して刑罰を執行する。

(2) 『元典章』卷四九、刑部一一、強竊盜、強竊盜賊通例の第九條。

(3) 決配とは、決杖配役の略。照驗は『吏學指南』に、謂證明其事也。とある。

(4) 結案は、結成公案を縮めた用語。三〇一條注(1)にも觸れたが、『元典章』卷三九、刑部一、刑法、罪名府縣斷隸に、配流・死罪、依例勘審完備、申關刑部待報。申扎魯火赤者亦同。と見え、重罪判決に必要な書類を全て揃え、刑部や斷事官の裁可を待つだけの状態にしておくこと、と理解される。

(5) 徒伴は共犯者、追會は、事件關係者を官司で喚問すること。一七〇條の注(4)を参照。

(6) 盜罪の確かな證據となる贓物。注(2)の『元典章』に、贓驗、謂元盜衣服・器物及一切可爲證驗者。と注記している。

【解説】これなどは、本來なら職制に入るべき規定で、強竊盜賊通例との關係から盜賊に分類されているにすぎない。本條の趣旨は、『明律』の四三五條、刑律・斷獄・有司決囚等第に踏襲されている。三〇〇條及び三〇一條を参照。

五九九 諸て、強盜、仗を持し、但し、人を傷くる者は、財を得ざるといへども、皆^{みな}死す。⁽¹⁾曾て人を傷けず、財を得ざれば、徒二年半。但し、財を得れば、徒三年。二十貫に至らば、首爲^かる者は

死し、餘人は遠きに流す。仗持さずして人を傷くる者は、惟だ造意及び下手する者⁽²⁾をば、死す。曾て人を傷けず、財を得ざれば、徒一年半。十貫以下は徒二年。十貫ごとに一等を加え、四十貫に至らば、首爲る者は死し、餘人は各々徒三年。若し盜に因りて姦すれば、人を傷けたるの坐⁽³⁾に同じ。その同行人は、止だ本法に依り、謀りていまだ行わざる者は、財を得ざるの罪の上より、各々一等を減じて、これを坐せしむ。

- (1) 『元典章』卷四九、刑部一一、強竊盜、強竊盜賊通例の第一條。『唐律』賊盜三四の流れにある規定。内容的には、『明律』刑律・賊盜・強盜(二八九)と共通する部分が多い。仗は凶器。
- (2) 下手とは、犯罪實行の直接さに應じた概念であり、犯意形成での主導性に着目した造意と隨從とは系列を別にする(『譯註』五、二五一〜二五二頁)。

- (3) 同行人は、道づれの意、同伴人のこと。行とは、強盜已行の指す犯行のことではない。

六〇〇 諸て、竊盜⁽¹⁾、始謀⁽²⁾していまだ行わざる者は、答四十七。已に行いて財を得ざる者は、五十⁽²⁾。財を得ること十貫以下は、六十七。二十貫に至らば、七十七。二十貫ごとに一等を加え、一百貫なれば、徒二年。一百貫ごとに一等を加え、罪は徒三年に止る⁽³⁾。

- (1) 『元典章』卷四九、刑部一一、強竊盜、強竊盜賊通例の第二

條。

- (2) 『唐律』賊盜三五と『明律』刑律・賊盜・竊盜(二九二)と同じ流れにあるが、兩條とも犯行の着手を意味する「已行」を前提としており、竊盜の豫備、即ち「始謀而未行」の明文規定はない。

- (3) 罪止は、法定刑の最高限の意味。『譯註』五、二八三頁、注(22)など。

六〇一 諸て、庫藏の錢物を盜みし者は、常盜に比べて一等を加え、贓滿、五百貫以上に至る者は、流とす⁽²⁾。

- (1) 『元典章』卷四九、刑部一一、強竊盜、強竊盜賊通例の第二條。本來なら前條の一節をなすもので、これだけで獨行させるべきではあるまい。

- (2) 『唐律』に無く、『明律』二八八條の刑律・賊盜・常人盜倉庫錢糧に繋がってゆく規定。ただ最高刑は、八十貫で絞であり、元代と比べ、著しく重い。庫藏とは、官府の財庫のこと。

六〇二 諸て、駝・馬・牛・驢・騾を盜まば、一ごとに九を陪せしむ⁽¹⁾。①駝駝を盜みし者、初犯は首爲れば九十七、徒二年半、從爲れば八十七、徒二年。再犯は等を加え、三犯は首從を分たず、一百七、軍に出す⁽²⁾。②馬を盜みし者、初犯は首爲れば八十七、徒二

年、從爲れば七十七、徒一年半。再犯は等を加え、罪は一百七に止め、軍に出す。③牛を盗みし者、初犯は首爲れば七十七、徒一年半、從爲れば六十七、徒一年。再犯は等を加え、罪は一百七に止め、軍に出す。④驢・騾を盗みし者、初犯は首爲れば六十七、徒一年、從爲れば五十七、刺して放つ。再犯は等を加え、罪は徒三年に止む。⑤羊・猪を盗みし者、初犯は首爲れば五十七、刺して放ち、從爲れば四十七、刺して放つ。再犯は等を加え、罪は徒二年に止む。⑥係官の駝・馬・牛を盗みし者は、常盜に比して一等を加う。

(1) 五九三條の解説に引く『元史』成宗紀にもあるように、家畜の盗みでは、一頭に對し、九頭を加え取償したのち、杖刑に處すきまりであつた。

(2) 以下の部分は、『元典章』卷四九、刑部一一、強竊盜、處斷盜賊斷例や同書の新集刑部、盜賊通例と密接に關係する。便宜上番號を付けたように、畜類の種別に從つて、犯行の回数や共犯關係に照應した刑罰規定を述べるが、その内容は『元典章』と微妙に異なることを指摘しておかねばなるまい。

(3) 『唐律』は畜類の盜殺に言及するのみで（賊盜三三）、『明律』の二九三條、刑律・賊盜・盜馬牛畜產になつてようやく、凡盜馬牛驢騾猪羊鷄犬鷺鴨者、竝計贓、以竊盜論。若盜官畜產者、以常人盜官物論。と書かれている。

【解説】 モンゴルの傳統と慣習を強く反映した法規。十三世紀の「チンギス・ハンのヤサ」以來、歴代のモンゴル法典の特色として、刑罰の内譯は、概ね死刑と鞭刑の二種しかなく、ほかの殆どは罰畜九頭などの家畜罰に限られたという。これらは、宮崎「法制」（一八四〜一九一頁）も想定するように、元代の本刑が初め死刑と杖刑に限られ、流遠と徒刑は飽くまで付加刑でしかなかった可能性と深く關わっている。リヤザノフスキー『蒙古民族の慣習法』滿州國・興安總署調査科、新京、一九三四を參看。

六〇三 諸て、劇賊、既に款附して官を得るに、復た賊を捕うるを以て由と爲し、民財を虐取せし者は、贓を計りて罪を論じ、遠きに流す。

【解説】 盜賊が政府の招安に應じて、巡檢や鎮守營軍などの捕盜官ポストを手に入れ、權力を背景に惡事を働く事例は、前代から枚舉に違がない。この條などは、恐らくある事件の處置をそっくり法文に反映させたものと考えられる。曾我部靜雄の『宋代政經史の研究』（吉川弘文館、一九七四）の第三章「宋代の巡檢・縣尉と招安政策」はこの問題をとりあげている。

六〇四 諸て、強盜、再犯すれば、仍なおお刺す。

(1) 『元典章』卷四九、刑部一一、強竊盜、強竊盜賊通例の第四

條は、強盜兩犯、亦死（須據救後爲坐）。とあるが、同書同卷、刺字の再犯經刺左項によれば、恩赦によって初犯の實刑を免れたことがここでの前提條件と分かる。

【解説】 以下五條には、強盜の關連條項や強盜に進ずる犯罪の規定を集める。

六〇五 諸て、強盜、事主を殺傷すれば、首從を分たず、皆な死に處す。⁽²⁾

(1) 『唐律』以來、強盜の共犯は、首從を分かたず、一律の刑に問うきまりで（名例四三）、死罪のときのみ、從犯輕減を認めていた（賊盜五〇）。本條ではこれを改め、強盜傷害は、造意と下手に關係なく、いずれも處死とされ、五九九條に較べ格段に重い。『明律』の關係條文も同じ方向にある。

(2) 『元史』卷一九、成宗紀二、大德元年（一二九七）五月戊辰は、詔、強盜姦傷事主者、首從悉誅。不傷事主、止誅爲首者、從者刺配、再犯亦誅。と、本條と同じ内容を書きとめている。

六〇六 諸て、人の財を強奪すれば、強盜を以て論ず。⁽²⁾

(1) 『明律』刑律・賊盜の白晝搶奪（二九二）では、搶奪の二字を入墨すると明記したうえで、計賊重者、加竊盜罪二等。傷人者斬。と定める。『明律國字解』は、「搶奪は、つかみどりなり。

強盜との差別は、人多くして兇器あるを強盜とし、人少くして兇器なきを搶奪とするなり」と述べている。

(2) 『元典章』卷五〇、刑部一二、拘摸の白晝毆打搶摸鈔兩では、凶器を用いぬ強奪を、強盜と見なすか否かで對應が搖れ、結局は竊盜に比附されている。

【解説】 搶奪は、強盜と紛らわしい犯罪概念である。六〇八條の白晝持仗搶奪との關係はいうまでもなく、明代の文獻に照らしても、徂徠の説明で果たして十分か否かは、正直いつて疑問が残る。

六〇七 諸て、藥を以て、人を迷瞞せしめ、その財を取りし者は、強盜を以て論ず。⁽²⁾

(1) 『元典章』卷五〇、刑部一二、拘摸、情藥摸鈔斷例。

(2) 『唐律』賊盜三四の注に、若與人藥酒及食、使狂亂取財、亦是。とあり、『明律』二八九條の強盜で、若以藥迷人圖財者罪同。と本文に明記される規定と同じ構成をとる。

六〇八 諸て、白晝、仗を持し、剽掠して財を得るに、事主を毆傷し、若しくは財を得るも、曾て事主を傷けざれば、並びに強盜を以て論ず。⁽¹⁾

(1) この條は、『元典章』新集刑部の持仗白晝搶奪に載せる二つの斷例を組み合わせた内容となっている。

六〇九 諸て、官民の行船して、風に遭いて著淺するに、輒に財物を搶虜せし者あらば、強盜に比同して科斷す。⁽¹⁾若し赦に會うも、仍^なお、眞盜と⁽²⁾同に論ぜず、賊を徵して罪を免す。

(1) 前掲『明律』の二九一條・白晝搶奪に、若因失火及行船遭風着淺、而乘時搶奪人財物、及拆毀船隻者、罪亦如之。とある一節と密接に關係する。『國字解』は、「行船は、船をのりゆくなり。着淺とは、淺みに舟のすわりて動かぬを云なり」と解を付す。

(2) 『元典章』卷四九、刑部一一、評賊の遇格免徵倍贓は、盜罪の眞犯と恩赦の關係について、『唐律疏義』名例三三の「盜む者、倍贓を免す」と同じ原則に立つ。本條の場合も倍贓の原免が適用されないだけとみるべきであらう。

六一〇 諸て、強盜、外國に出でんとし、その邊臣の執えて以て來獻する者には、金帛を賜いて以てこれを旌す。

六一一 諸て、乘輿の服御・器物を盗みし者は、首從を分たず、皆な死に處す。⁽¹⁾情を知りて領賣し、價錢を剋除せし者は、一等を減す。⁽²⁾

(1) 『唐律』賊盜二四や『明律』盜内府財物（二八三）と同じ流れにある。

(2) 贓の中味が何であれ、知情領賣、即ち盜贓の故買は、坐贓に

よつて、一等減するものも、『唐律』から變動はない（賊盜四九）。剋除（剋減）の用語は、些か不自然ながら、何物にも代え難い皇帝の御物を金銭で買うことの不當性に着目したものと考えられる。

【解説】 以下の十二條には、官物それも特に官府の庫藏をめぐる盜罪を中心に條文が並べられている。

六一二 諸て、官錢を盗み、追徵すれど、いまだ盡さず、官に到りて禁繫せらるること既に久しけれど、實に折償すべきなき者は、これを除く。⁽¹⁾

(1) 監贓の減免措置。贓錢の追徵にあたつて、當人が死亡するなどして、支拂不能に陥ったときは、子孫は賠償責任を負わなくてよいというのが、本條の趣旨であらう。官錢に限られないが、『元典章』卷四九、刑部一一、評賊の盜贓無償折備に引く聖旨條畫の一款には、盜賊正贓、於犯人名下追徵。如委無正贓、以他物折償。無可償者、折庸推算。如年限未滿、本人身死、子孫不在折庸之限。と見える。折備は、勞役で正贓の代價を拂う、折償の一つのかたち。七〇七條に同文。

六一三 諸て、守庫の軍、但し、庫中の財物を盗みし者は、死に處す。赦に會う者は、仍^なおこれを刺す。⁽¹⁾

(1) 六七七條と對をなす條文。

六一四 諸て、内藏の典守、輒に庫中の財物を盗みし者は、死に處す。⁽¹⁾⁽²⁾

(1) 元朝においても、國都には左右藏庫と並んで内藏庫が置かれ、宦官の監督の下に、皇帝や諸王の使う財物の出納を擔當した
『元史』卷九〇、百官六、太府監。

(2) 典守は、元來主管、保管の謂だが、ここでは從五品の提點をはじめ、大使・副使などの官員を指す。

六一五 諸て、造鈔庫の工匠、合に毀つべきの鈔を私藏して、庫より出せし者は、杖一百七、監臨の關防を失せし者は、笞三十七。⁽²⁾

(1) 正式な名稱は、印造寶鈔庫。官營の造幣工廠で、造鈔庫のほか、印造庫・印鈔局・印鈔庫ともいわれた。刷り上がった鈔は、いちど寶鈔庫に渡され、それから平準庫や行用庫を通じて市場に放出する。印造不良の鈔を無斷で庫外に持ち出すことは、幣制維持の觀點からも、嚴しく規制されねばならなかった。前田・前掲書、四九頁を參看。

(2) 『唐律』既庫一五の庫藏主司搜檢條をふまえ、監臨たる造鈔庫の正官の監督責任を問うものとなっている。

六一六 諸て、印鈔庫の鈔を盗みし者は、死に處す。⁽¹⁾

(1) 前條注(1)を參看。盜犯の主體は、工匠から外部の人間に變わる。

六一七 諸て、昏鈔を檢するの行人、昏鈔を盜取すれど、監臨に搜獲せられ、財を得ざる者は、庫藏の錢物を盗みて財を得ざるを以て、等を加え、杖七十七に論ず。⁽²⁾

(1) 倒換された昏鈔は、交鈔庫で眞偽を點檢し、帳簿に記録したうえで、退毀昏鈔印を押し、再び流通できなくした(前田・前掲書、七〇〜七一頁)。本條はこの過程で庫子や合千人が行う昏鈔の竊取に的を絞り、提領以下の監臨に摘發され、未遂に終わった場合を想定している。二三二條と對をなす。

(2) 六〇一條の規定によって、常盜と比べ、つごう二等重い刑罰となっている。

六一八 諸て、燒鈔庫、合千の檢鈔の行人、輒に昏鈔を盗み、庫より出だして分使せし者は、刺斷す。⁽²⁾

(1) 行人とは、ふつう國家が商工業者を統制するため組織した「行」の成員のことで、獨占目的のギルドではない。ここでは昏鈔の倒換・検査という熟練を要する作業のため置かれた専門職員。『元典章』などに見える合千人に相當する。檢屍に攜わ

る件作行人も、かかる行人の一つに數えられる。

- (2) 退印を押捺した昏鈔を燒鈔庫に集め、燒却する段階で生じる不正行爲と罰則規定を記す。この燒却作業は、中書省では大都の燒鈔東庫と西庫、各行省は當地の燒鈔庫で、臺憲や宣慰司の正官の監視の下に進められた。

六一九 諸て、局院⁽¹⁾の官物を盜まば、贓、貫に滿たさるといへども、仍^なお、等を加え、杖七十七、刺字⁽²⁾す。

- (1) 局院は、官營工廠にあたる。『元文類』卷四二、經世大典序錄、諸匠。乃鳩天下之工、聚之京師、分類置局。

(2) 六三六條にいうように、贓不滿貫ならば、通常は微罪として刺字されずに済む。

六二〇 諸て、工匠、已に庫の物料を關出⁽²⁾し、成造して額に及ぶの外、餘をば曾^なて官に還さず、盜に因りて局を出せし者は、斷罪し、刺を免ず。

- (1) 工匠とは、工作人匠をいい、官營工廠で働く職工にあたる。『明律國字解』にも、「諸普請造作の人夫・細工人なり」とある。

(2) 徂徠は、關出に「うけとりて倉より出すなり」と解を付け、物料については、「段匹を織らする處へは、官より絲麻のるい

を渡す、軍器を作る處へは、官より銅鐵・皮革・漆角のるいを渡す。是を物料と云」と述べている。

- (3) 原文に「餘外」とあるのは、「外餘」の轉倒と思われる。軍器・段匹などの製作が所定目標の正額を達成しながら、残った材料を還付せず、着服した場合を想定したうえで、工匠の盜罪に焦點をあて規定する。『明律』工律、營造、冒破物料(四五一)に見える、凡造作局院頭目工匠、多破物料入己者、計贓、以監守自盜論、追物還官。の條が参考になろう。

六二一 諸て、已に倉に到れる官糧を盜むも、いまだ倉を離れずして事覺われし者⁽¹⁾は、財を得ざるを以て論じ、刺を免ず⁽²⁾。

- (1) 『元典章』新集刑部、偷官糧、盜官糧未出倉免刺に實例がある。

(2) 竊盜已行而不得財に一等を加え、杖六十七下で處罰は済む。六〇一條參照。

六二二 諸て、官員の符節⁽¹⁾を盜まば、常盜に比して一等を加え、贓を計りて、罪に坐せしむ⁽²⁾。

- (1) 元代、公務で派遣される官員は、任務の輕重に合わせて、驛傳に用いる各種の符節(符牌)を支給された。二六六條參照。

(2) 『唐律』賊盜二六に、紙券又加一等。とある一節や、『明律』

刑律・賊盜・盜制書（二八二）の、凡盜制書及起馬御寶聖旨・起船符驗者、皆斬。と軌を一にした法規と見ることが出来る。

六二三 諸て、官府の文卷を盗み、故紙と爲して變賣せし者は、杖七十七。竊盜と同じく、刺字す。卷を買う人は、答四十七。⁽²⁾

(1) 『明律國字解』に「變賣は、うりて金にすることなり」とある。

(2) 古來、官府の文書は、もはや保存する必要がなくなると、故紙として拂い下げられるのが通例で、『唐律』賊盜二六には、即盜應除文案者、依凡盜法。とあつて、故紙を盜めば、一般の盜賊扱いとなる。つまり、現行の文書を盗んでも、贓額は斟酌されず、この條のような刑罰にならざるを得ない。『明律』二八一條の盜制書になると、その區別さえ消滅している。

六二四 諸て、財を圖り、人を謀・故殺すること多き者は、陵遲處死とす。仍お、各賊の殺す所の人數を驗べ、家屬より、燒埋銀を均徴す。⁽¹⁾

(1) 『元典章』卷四二、刑部四、船上圖財謀殺に残る斷例をそのまま法文にしたとみられる。陵遲處死は、この例でいへば、いちどに十五人が殺害された事件の凶惡さに對する極刑であり、『明律』刑律・人命・殺一家三人（三一〇）に、凡殺一家非死

罪三人、及支解人者、陵遲處死。とあるのも關係しよう。九四四條に同文。

六二五 諸て、財を圖り、人を死に陷溺せしめんとし、幸に生免を獲る者あれど、罪は已に死すと同じ。

【解説】 この前後の條文は、圖財殺人を取り上げる。財物めあてとはいへ、初めから殺意を懷く以上、むしろ謀殺の延長線上で捉えるべきである。『明律』三〇五條、刑律・人命の謀殺人にいう、若因而得財者、同強盜、不分首從論、皆斬。や、次の條文から判斷しても、それは犯罪の實態に照らした表現に過ぎず、そもそも獨立した刑名だったとはいひ難い。

六二六 諸て、財を圖り、他人の奴婢を殺死すれば、即ち、財を圖り人を殺すを以て論ず。⁽¹⁾

(1) 『唐律』鬪訟二〇以來、良人が他人の奴婢を殺せば、減凡人一等となるが、圖財殺人の條件が加わると、賊盜三四の律疏に、殺傷奴婢、亦同良人之坐。とあるのと同巧で、身分格差に伴う恩典は適用されなくなる。

六二七 諸て、奴、主の財を盗みて逃ぐるに、その逃ぐるを送る者が、輒にその奴を殺し、その財を取らば、即ち強盜殺人を以て

論す。⁽¹⁾

(1) 主人の財産を持ち逃げした軀口の逃亡を手引きした者が、これを殺害して所持の財物を奪取した際の罪名を定める。なお『唐律』捕亡一三では、即誘導官私奴婢亡者、準盜論。と逃奴の幫助だけで、盜罪が立件し、本條とニュアンスは若干相違する。

六二八 諸て、塚^{はか}を發^{あは}き、已に開塚せし者は、竊盜に同じ。棺槨を開きし者は、強盜に同じ、死骸を毀ちし者は、人を傷くるに同じ。仍^なお、犯人の家屬より、燒埋銀を徵^とす。⁽²⁾

(1) 發塚には『唐律』以來嚴格な規定があり、本條の場合、賊盜律三〇、ならびに『明律』刑律・賊盜・發塚(二九九)との關連性が強い。これらが盜罪の中に置かれる意味については、『譯註』七、一八一〜一八三頁を參看。

(2) 『元典章』卷五一、刑部一三、捕劫墓比強竊盜責罰に、本條と同じ記述を載せる。

六二九 諸て、仇を挾み、塚^{はか}を發^{あは}き、その屍を盜棄せし者は、死に處^あす。⁽¹⁾

(1) 『唐律』賊盜一九の殘害死屍と『明律』二九九條・發塚の第三項と同じ流れにある條文。挾仇という動機は別にしても、元代の刑罰が、唐明律と比べ、著しく重いことが目につく。

六三〇 諸て、塚^{はか}を發^{あは}き財を得れど、屍を傷けざる者は、杖一百七、刺配す。⁽¹⁾

(1) 『元典章』新集刑部の發付流囚輕重地面は、肇州屯種の項に、諸發塚開棺傷屍賊徒、同強盜、於内合該出軍。を擧げる。本條は、そのうち殘毀屍首の無い分、刑罰も輕く、刺斷配役で濟む事例である。

六三一 諸て、諸王・駙馬の墳寢を盜發せし者は、首從を分たず、皆な死に處す。禁地⁽¹⁾を看守するの人は、杖一百七。家産を三分し、一分は沒官す。同に看守する人は、杖六十七。⁽²⁾

(1) 諸王・駙馬などのモンゴル貴族の墳墓は、埋葬から三年間禁地として立ち入りが禁じられた。『國朝文類』卷二五、張士觀駙馬昌王世德碑に、甫旬日、忠武亦卒。太宗震悼不已曰、巴圖事我皇考、宣力良多。今已云亡、送還本土、遂葬於奇徹勒。仍禁其地三年、如國家制。と見える。

(2) 『唐律』賊盜三一や『明律』刑律・賊盜・盜園陵樹木も若干參考になる。前後の時代と比べると、本條においても處死と隨分重くなっている。

六三二 諸て、事主、盜を殺死せし者は、坐^つぜす。⁽¹⁾

(1) 『元典章』卷四九、刑部一一、雜例、事主打死拒捕賊無罪に、

具體的な一例を取り上げる。

六三三 諸て、寅夜、潛かに人の家に入り、傷毆せられて死する者は、論するなかれ。

【解説】『唐律』賊盜二二や『明律』刑律・賊盜・夜無故入人家（三〇〇）と同じ構成である。前條と同じく、侵入者に積極的な惡意を認められるか、不意の侵入によって冷靜な判斷ができない狀態での行為であることを前提條件とする。

六三四 諸て、迴野に於て、人の材木を盜伐せし者は、刺を免ず。
賊を計りて科斷す。

(1) この條文と同じ趣旨は、『唐律』賊盜四四に、諸山野之物、已加功力刈伐積聚、而輒取者、各以盜論。と見える。『明律』刑律・賊盜・盜田野穀麥（二九四）も同様で、山野の植物・礦物は何びとも採取してよいが、ある者が勞働力を加え、刈伐・積聚したものを、他人が勝手に奪い占有すれば、竊盜に問われた（『譯註』七、二二九頁）。

(2) 『元典章』卷四九、刑部一一、免刺の偷斫樹木免刺と關係する。この中で、舊例として、毀伐樹木・嫁穡者、以盜論。なる泰和律の一節が引用されている。迴野とは、原野の意味。

六三五 諸て、脅從せられて上盜すれど、盜所に至りて、復び逃去すれば、從爲るを以て論ぜず。

(1) 上盜は、仲間に従つて盜みにゆくこと。『明律國字解』は「上盜・中盜・下盜と云ことあり、なかまにててがきのぬすびとを云」と説明する。

【解説】無辜の民が盜賊に脅迫され、犯罪に荷擔させられることは、舊中國に於ても、元代に限らず、沒時代的でありふれた現象であつた。この條などは、後出の六四〇條や七二六條とともに、ある事件の處分をもとに、法文の各則に仕立てたものと考えられる。ここでは、彼ら被脅從者を共同正犯はもちろん、從犯にも問わないことを内容としている。

六三六 諸て、竊盜、賊が貫に滿たされば、斷罪すれど、刺を免ず。
(1) 『明律』二九二條の竊盜では、盜賊がたとえ一貫以下であらうと、刺字は免除されない。これについては、『元典章』の中に明文を見つけられなかった。

六三七 諸て、子が盜を爲し、父これを殺さば、坐せず。

六三八 諸て、盜を爲し、初め刺斷を経るに、再び姦私を犯さば、止だ姦を以て坐す。盜を爲すこと再犯を以て論ぜず。

【解説】 この一條などは、至極當然のことで、改めて斷るまでもないはずである。『元典章』卷四九、強竊盜賊通例の第四條として、『唐律』の賊盜五二に依據した法令で、盜罪の常習累犯を對象とするにすぎない。現實の裁きでは、事案の性格に關係なく、盜賊再犯を安易に當てはめる不正がまかり通っていたのであろう。

六三九 諸て、奴婢、數は盜を爲し、應に過を門に識すべき者は、その主が情を知らざれば、輒にその主の門に書するを得ず。

【解説】 元代においても、犯罪常習者を懲らすため、門扉に罪狀を掲げておくことが、しばしば行われた。『元典章』卷四九、刑部一一、斷賊徒例粉壁曉諭に現れる「排門粉壁」や「紅土粉壁、標示過名」がこれに相當する。本條では、奴婢が犯人であるため、主人の利害が配慮されたものとなっている。

六四〇 諸て、誘脅せられて上盜すれど、曾て賊を分たれず、容隠して首さざる者は、杖六十七、刺を免す。

(1) これも盜犯の被脅從者に對する特別措置。七二六條及び六三五條を參照。

六四一 諸て、先に親屬の財を盜まば、刺を免す。再び他人の財を盜まば、止だ初犯と爲して論ず。

(1) 『元典章』卷四九、刑部一一、免刺、親屬相盜免刺。

(2) 同居共財の家族生活上、その成員相互の間に盜みの罪は成り立たない。従つて、『唐律』以來、親屬相盜とは、別居異財の親屬の間でだけ意味を持つ概念である(『譯註』七、二一五、二一八頁)。六六二條も參看。

(3) 注(1)の『元典章』でも、正賊の追徴は有免されないことから判斷すると、再犯を初犯と見なすのは、飽くまで刺字に限られた措置と考えられる。

六四二 諸て、先に婦人を誘姦するを犯して逃に在り、後に竊盜を犯し、二事俱に發すれば、誘姦を以て重きと爲し、杖は姦に従い、刺は盜に従う。

(1) 『唐律』名例四五に基づき、姦罪と竊盜の併合罪を扱った條文。これも具體的な事件の處斷を法文化した例とみることができ

る。

六四三 諸て、瘡啞が盜を爲さば、瘡啞を論ぜず。

(1) 聾啞者は、受刑上何らの障害もないので、三二條に定める贖罪にはあずかれない。

六四四 諸て、搜稅と詐稱し、攔頭が行李の財物を剽奪せし者は、

盜を以て論ず。刺斷して、警跡人に充つ。⁽¹⁾

(1) 商税の取り立てに纏わる財物の強奪行爲に對する取締條項。

欄頭は税務の胥吏の名稱で、『研究譯注』のいう「さえぎり止める、阻止すること」はその本來の意味で不適切。

六四五 諸て、米糧を盜むに、飢饉に因るにあらざる者は、仍お刺斷す。⁽¹⁾

(1) 『元典章』卷四九、刑部一一、免刺、偷粟米賊人免刺が關連する。

六四六 諸て、塔廟の神像・服飾、人の看守するなきを盜みし者は、斷罪し、刺を免す。⁽¹⁾

(1) 『元典章』卷四九、刑部一一、免刺、盜神衣免刺は、實際の事件をふまえ同じ趣旨の記述をする。塔廟とは、佛塔と祖廟の意だが、『典章』では禪宗寺院の塔頭に安置された七祖禪師の廟所が問題となっている。

六四七 諸て、事主及び盜、私に相い休和する者は、同罪。盜む所の錢物・頭匹・倍贓等は、官に沒す。⁽²⁾

(1) 休和は、和解、示談。私和は、犯罪を告發せず、無斷で和解する意となる。

(2) 本條では、罪の發覺後に私和が行われるがゆえに、首服(首露)を認めず、被害者・加害者とも同罪とされ、正贓・倍贓は沒收となる。ところが、『明律』刑律・雜犯・私和公事(四〇五)なら、減犯人罪二等、罪止答五十。と、處罰は頗る輕い。

六四八 諸て、竊盜、應に徒とすべきに、若し祖父母、父母の年老いたるあれど、兼丁の侍養する者なければ、刺斷するも、徒を免ず。再犯して親の尙お存する者は、親の終る日を候ち、發遣して居役せしむ。⁽⁴⁾

(1) 『元典章』卷四九、刑部一一、免配、竊盜父母年老免配と關係する。ここでは『唐律』の名例二七に定める徒刑の有免條項を、盜罪に視點を絞った組み立てとなっている。その際、親老疾應侍者が犯人以外にいないことが必須の條件となる。『元典章』卷四四、刑部六、拳手傷の毆人に引用される舊例や刑部の照擬にも看取されるものは、些かスタンスを異にすることに注意。

(2) 兼丁とは、一戸の内に存する犯人以外の成年男子(十一歳〜五十九歳)の謂で、犯人の妻が右の年齢であれば、やはり兼丁と見做された(『譯註』五、一五八〜一五九頁)。

(3) 徒役の時限發效を述べるこの部分は、名例二六の律疏に、流人至配所、親老疾應侍者、並依侍法。合居作者、亦聽親終期年、

然後居作。と見え、符節を合する。

(4) 居役は、居作と共に、徒流刑における強制労働を指す。

【解説】『唐律』で定義された加杖法は、やがて徒刑における勞役の免除に主眼が移され、『明律』名例律・犯罪存留養親になると、罪止を杖一百とするなど、一百を越える杖刑に換える趣意はもはや存在していない。本條の主眼は、むしろ盜罪にあるが、上記の流れのどこに位置するのかは、今後の検討を要する。六五七條參照。

六四九 諸て、女直人⁽¹⁾、盜を爲さば、刺斷すること、漢人に同じ⁽²⁾。

(1) 『元典章』卷四九、刑部一一、刺字、女直作賊刺字。

(2) 前掲『元典章』では、契丹人と共に、女直人を、色目人の範疇に入れることの可否が話題の中心をなす。回回・畏兀兒・乃蠻・唐兀など、色目人と呼ばれる人々には、モンゴル人と同等の身分特權が約束されていた。

【解説】舊金朝治下の漢人とは、女直・契丹を包括する概念で、高麗人は待遇上これに準ずる。狹義の漢人に比べ、女直人や契丹人は支配階層を數多く輩出しており、それがこの取り決めの伏線をなすと思われる。結局は「根脚」の有無が特典付與の分岐點とされたようである。

六五〇 諸て、年饑え、民窮り、物を見て盜まば、贓を計りて斷罪

す。刺配及び倍贓を徵するを免す⁽¹⁾。

(1) 飢饉に際會しての特別條項。この種の法令は歷代に共通して出されている。

六五一 諸て、竊盜、一歲の中、頻犯する者は、一の重きに從いて論じ、刺斷す⁽¹⁾。

(1) 竊盜の頻犯について、『唐律』賊盜三五の疏義を一部取り上げ條文とした格好となっている。特に、若有一處贓多、累倍不加重者、止從一重而斷。との箇所では、名例四五の併合罪によって、刑罰の操作が行われる(『譯註』七、一九六～一九七頁。同書・五、二八五～二八八頁)。

六五二 諸て盜を爲し、得る所の贓を以て、人と博して勝たず、得る所の贓を失い、事覺わるれば、正贓を追す。仍お、博者を罪に坐す⁽¹⁾。

(1) 盜贓を博打で失ったときの盜犯と賭博相手の處遇を扱っている。

六五三 諸て、父、子を以て共に盜み、子の年いまだ幼を出でず、曾て分贓せざれば、罪を免す⁽²⁾。

(1) 『禮記』曲禮上に、人生十年曰幼、學。二十年曰弱、冠。と

あるが、この場合の幼がどこまで對應するか明確なところは分らない

(2) 『元典章』卷四九、刑部一一、免刺の子隨父上盜免刺に實例がある。

【解説】これ以降には、同居親屬が共犯で行う盜罪について、様々な角度から列記してある。いずれも現實の事件をもとに、直截的な内容を持つ。

六五四 諸て、年饑え、その子若しくは傭に迫り、同に仗を持して行劫すれば、子若しくは傭は、死より一等を減じて坐すれど、刺を免じ、警跡人に充つ。

六五五 諸て、父、人に誘われて盜を爲さんにも、疾もて往くあたわず、その子に命じてこれに従い、その贓を分ちし者は、父は從爲るより一等を減じ、刺を免じ、子は從爲るを以て、論ず。

六五六 諸て、兄、未成丁の弟に逼りて、同に上盜すれば、從爲るより一等を減じて論ず。仍お罰贖す。⁽¹⁾

(1) 盜罪の從犯に、未成丁が傍系尊長に強要されたとの條件が加えられ、贖罪を容認するかたちとなっている。二九條注(4)

参照。

六五七 諸て、兄弟、同に盜み、罪、皆な死に至れども、父母の老いて養に乏しき者は、内ち一人の情罪^{じやうざい}追すべき者を以て、死を免じ、親を養わしむ。

【解説】これは犯人に老疾の父母を養わせるため、死刑の執行延期を定めた權留養親を、現實の事件に即してまとめ直している。『唐律』の名例二六に、諸犯死罪非十惡、而祖父母・父母老疾應侍、家無期親成丁者、上請。とあるのがそれで(『譯註』五、一五三―一五四頁)、『明律』では名例律の一八條、犯罪存留養親の中に、本刑法志・六四八條の内容と併せ收められる。

六五八 諸て、兄弟、同に盜まば、皆な刺す。

六五九 諸て、父子兄弟、類同に上盜すれば、凡盜の首從に従いて論ず。⁽¹⁾

(1) 累犯でなければ、首・從は勘案されないとの規定。『明令』刑令・九八條には、凡家人共盜、並依凡盜首從科斷(謂、父子兄弟之類、一同行盜者)。との一條が見える。

六六〇 諸て、父子兄弟、同に強盜を爲せし者は、皆な死に處す。

六六一 諸て、夫、謀りて強盜を爲さんとするに、妻の諫めず、反

つてこれに従いて盗みし者は、從爲るより一等を減じて罪を論ず。

六六二 ①諸て、親屬、相い盜まば〔本服・總麻以上の親、及び大功以上、共に婚姻を爲すの家、盜を犯すを謂う〕^②、止だその罪に坐し、並びに刺字・倍贓・再犯の限りに在らず。^③②その別居の尊長が、卑幼の家に於て、竊盜若しくは強盜し、及び卑幼が尊長の家に於て竊盜を行いし者は、總麻・小功は凡人より一等を減じ、大功は二等を減じ、期親は三等を減ず。強盜せし者は、凡盜に準じて論ず。③殺傷せし者は、各々故殺傷の法に依る。^⑤④若し同居の卑幼、人を將いて、己の家の財物を盗みし者は、五十貫以下は、笞二十七。五十貫ごとに一等を加え、罪は五十七に止む。⑤他人は、常盜に依り、一等を減ず。

(1) 『元典章』新集刑部、諸盜總例、親屬尊卑相盜と關係する。

(2) 『唐律』職制五三・第三項の注。この條でも注記に改めるべきである。服制の詳細は、本譯注(一)、五服の項を參看。

(3) 前掲『元典章』に、刺字・流配は執行せず、倍贓は追徵免除と言明されている。六四一條も參照。

(4) 改めて斷るまでなく、親屬相盜は別居異財を前提に成り立つ概念(六四一條注(2))であり、この部分は『唐律』賊盜四〇の疏義を引き寫している。

(5) 概ね『唐律』賊盜四〇の記載をふまえ、強盜準凡盜論の箇所

は、賊盜三八の第二項から引用している。『明律』刑律・賊盜では、二九五條の親屬相盜と二九六條の恐嚇取財にあたる。なお故殺傷法は、律では本殺傷法に作る。

(6) ここから同居共財に文脈が變わっている。『唐律』賊盜四一に基づき、その成員たる卑幼は、家の財産を私的に盜用すれば、戸婚一三によって、卑幼私輒用財物の罪に問われ、共犯の他人は凡盜より一等減刑されるといふもの。『明律』戸律、戸役の卑幼私擅用財(九四)や前掲・恐嚇取財はこの流れにある。『元典章』新集刑部、偷盜、親屬相盜分首従はその具體例の一つ。

【解説】本條では親屬相盜を扱うが、前半の①③は、同居の卑幼が他人を率いて自家の財産を盜む④⑤とは、本來別條を構成していたと見るべきもので、内容は『唐律』を殆ど改變することなく踏襲した條文となっている。以下には、この總則の下での個別ケースが幾つか集められる。

六六三 諸て、姑の表姪、姑^姪の夫の財を盜まば、親屬相い盜むと同じく論ず。^①

(1) 外姻内部での親屬相盜を扱う本條では、幾つかの前提条件を省略しているため、内容は掴みにくい。姑表姪といつても、姑自身が犯行に荷擔しているとは考えられず、あくまで表姪を主體とすると見てよからう。『稱謂錄』は、姑は父の姊妹、表

姪は母方のいとこの子、と解す。

六六四 諸て、女、室に在り、その父を喪い、自ら存するあたわざるに、祖父母ありてこれを恤あはれまず、因りて祖父母の錢を盗みし者は、坐つせず。⁽¹⁾

(1) 在室とは、未だ嫁がぬ女子のこと。具體的な事件の斷例をもとにしてゐるのは明瞭で、この場合、女子と祖父母は同居共財の關係にはなかつたのであろうか。『唐律』でいえば、戸婚一三の卑幼私用財條にも問われていない。

六六五 諸て、弟、首爲りて、從兄の財を強劫すれば、即ち強盜を以て論ず。⁽¹⁾

(1) 弟が從兄に働く強奪行爲を、別居の卑幼の尊長に對する強盜と見做し、その上で六六二條注(5)の『唐律』賊盜三八を適用した事例。

六六六 諸て、嘗て他人の子孫を過房みだりして、以て子孫と爲し、輒みだりに過房する所の家の財物を盗みし者は、即ち親屬相い盜むを以て論ず。

(1) 過房は、同姓の養子、の意で、乞養つまり異姓の養子と對をなす。たとえ財産相續を約束されていようと、養子は眞の意味

で同居同財を認められていなかったことを物語る。

六六七 諸て、奴、主の財を盗み、應まさに遠きに流すべくして、主が免を求めし者は、聽きず。

【解説】 元代における法的あるいは經濟的な身分關係が、親屬相盜の原理に照らすと、いかなるイメージを結ぶのか、それぞれの答えが以下に七箇條に亘って列記される。

六六八 諸て、奴、主の財を盗まば、斷罪すれど、刺を免ず。⁽²⁾

(1) 『元典章』卷四九、刑部一一、免刺、主偷佃物免刺に、舊例、奴盜主財、親屬相盜、免刺、止追正贓。と見える。なお同書の新集刑部、偷盜、奴盜主物刺字には、本條の規定を覆した裁きを特例として掲載している。

(2) 『明律』二九五條の親屬相盜は、其同居奴婢・雇工人盜家長財物、及自相盜者、減凡盜罪一等免刺。と同じ方向で記す。奴婢(驅口)と主人には、同居同財が擬制され、減刑はもちろん、刺字の有免に繋がってくる。

六六九 諸て、雇主の財を盗みし者は、刺を免じ、倍贓を追さず。先の雇主の財を盗みし者は、常盜と同じく論ず。⁽¹⁾

(1) 『元典章』卷四九、刑部一一、免刺、受雇人盜主物免刺。こ

の中でも雇主との間には、同居宿食の關係を認め、前條と同様、滅刑措置が講じられる。彼らは明清の雇工人に相當するが、奴婢とは違い、雇主との關係が解消すれば、無論この恩典の對象から外れることになる。

六七〇 諸て、佃客、地主の財を盜まば、常盜と同じく論ず。⁽¹⁾

(1) 六六八條注(1)の『元典章』主佃佃物免刺は、この條と逆に、地主が佃客の私財を盜み、刺字と倍贓を赦された事件を書きとめている。しかし、それは佃客の妻が犯人の婢使であつたことから、親屬相盜に擬せられたためで、本條と同列にあるとは言ひ難く、地主の盜罪に一般化することもできない。

【解説】 地主と佃客は、本來相互に自立した家計を前提として租佃契約を結ぶものであつて、その間に同居同財はもちろん、親屬相盜は成り立たない。その意味で本條は理に適っているが、實際のところ農業經營の個々の在り方によって一概に割り切れないケースが少なくならつたと考えられる。つまり、注(1)の例は、そうした現實との齟齬を埋める一つの目安として掲げられたとみてよい。

六七一 諸て、主を同じくするの奴が相い盜まば、斷罪すれど、刺配を免じ、倍贓を追さず。

六七二 諸て、同に雇を受くるの人の財を盜まば、同居を以て論ぜず。

【解説】 同居同財は、家計上區分できない奴婢には適合しても、本條の雇人は一般の良民があくまで一時的に經營上の給付を受けるに過ぎないから、雇人相互にまで適用はできない。従つて、ここでは刺字・徒流刑・倍贓の有免はあり得ないのである。

六七三 諸て、屋を賃し、房主と同居するに、房主の財を盜む者は、常盜と與に論ず。⁽¹⁾

(1) 家屋の賃貸借關係において、同居關係、即ち法的に見た家計の共有はあり得ないことを趣旨とする。

六七四 諸て、同本の財を盜みし者は、答五十七。眞盜の計贓を以て論ぜず。⁽¹⁾

(1) 同本とは、共同出資の謂で、その中では、通常の盜罪は、やはり成り立たない。宮崎市定「中國近世における生業資本の貸借について」(『東洋史研究』一一一一、一九五〇・『全集』第九卷)を參看。

六七五 諸て、巡捕の軍兵、因りて自ら盜を爲す者は、常盜に比べ、一等を加えて罪を論ず。若し自ら相い覺察し、告捕して官に到り、

或いは曾て共に盗みを爲すも、同伴を首獲せし者は、罪を免じ、賞を給す。⁽²⁾

(1) 國都大都の巡軍をはじめ、地方鎮守で捕盗を擔う軍人を廣く包攝する。二八七―二八八條参照。

(2) 五九七條と同じ趣旨の規定が適用されている。

【解説】 これなどは、『明律』刑律・受贓・尅留盜贓(三七六)の裏面に隠された實態を物語っているかとも受け取れる。以下四條にわたり、軍人の盜罪について、具體的な事件の處斷を條文化したものが續く。

六七六 諸て、軍人、盜を爲さば、刺斷すれど、警跡人に充つるを免す。仍お、賞錢を追して、告する者に給す。⁽¹⁾

(1) 軍人が盜罪を犯した際の處分を規定する。『明律』刑律・賊盜・竊盜(二九二)は、若軍人爲盜、雖免刺字、三犯一體處絞。と充警跡人のみ免除される元代と比べ、刺字にまで恩典が擴がっている。六一三條を參看。

六七七 諸て、庫藏を守るの軍人、輒⁽¹⁾に首と爲り、外人を誘引して官物を偷盜するに、但し、二次・三次を経て、庫に入り盜を爲し、及び提鈴・把門の軍人、贓を受け、賊を縦⁽²⁾にせし者は、皆な死に處す。從爲る者は、杖一百七、刺字して、遠きに流す。

(1) 國都では、侍衛親軍から選ばれた兵士が、倉庫・城門に配備され、あるいは警邏活動に従事していた。二八八條の注(2)のほか、『元史』卷九九、兵二、宿衛、看守軍。に詳細が見える。

(2) 提鈴は、夜回りの用いる警鈴。把門とは、門番。『吏文正續輯覽』に、提鈴巡警。凡逐夜巡警之人、皆令提鈴。とある。

【解説】 國都・地方を問わず、倉庫の警備や公安業務に攜わる軍人は、一般に著しくモラルが低く、盜賊との結託や目こぼしなどは、ごく日常化していた。

六七八 諸て、見役の軍人、逃に在り、因りて竊盜を爲し、財を得れば、杖一百七。仍お刺字す。杖は逃軍に従い、刺は盜に従う。⁽¹⁾

(1) ここでは、二つの違法行爲に對應した刑罰の組立をとり、杖刑を軍隊からの逃亡にのみ適用し、竊盜の處罰は、贓額に拘わりなく、刺字のみに止まる。その理由は定かではないが、軍人に對する優遇措置であることは間違いない。

六七九 諸て、軍人、路に在りて、人の財物を奪い、又た人を迫逐して、非命に致死せしめたる者は、首爲れば杖一百七、從爲れば七十七。燒埋銀を徴して、苦主に給す。⁽¹⁾

(1) これも舊中國の軍隊なら當然隨所で起こしうるトラブルを扱

う。單なる強奪行爲に止まらず、勢い餘つて被害者を死亡させてしまつた場合を内容とするが、やはり量刑は著しく軽い。

六八〇 諸て、婦人、盜を爲さば、斷罪し、刺配及び警跡人に充つるを免じ、倍贓を徵するを免す。再犯すれば、并びにその夫を坐す。⁽¹⁾

(1) 婦人犯罪の處置を規定する。免刺については五九四條に既出。

六八一 諸て、婦人、寡居し、人と姦し、舅姑^{ふぼ}の財を盗みて姦夫に與え、己を娶りて妻と爲さしむる者は、姦をば姦所にて捕獲するにあらざれば、⁽¹⁾止だ、同居の卑幼、尊長の財を盗むを以て坐^{つみ}と爲す。⁽²⁾答五十七もて、歸宗せしむ。姦夫は杖六十七。

(1) 姦通罪では、現場で取り押さえることが重要な要件とされる。

『元典章』卷四五、刑部七の指奸にも、非奸所捕獲勿論なる一項があるほか、『明律』三九〇條、刑律の犯姦に、其非姦所捕獲及指姦者勿論。と見える。

(2) 『唐律』戸婚一三の規定。なお答五十七は、六六二條第二項に見たように、その罪止にあたる。

六八二 諸て、僧爲るに、佛像の腹中の裝を竊取⁽¹⁾せし者は、盜を以て論ず。

(1) 竊取とは、『唐律』賊盜五三の律疏に、「方便もて私^{ひそか}に其の財を竊するを謂い」と解する盜罪のカテゴリ。竊盜・拘摸を含み、強盜・搶奪など、公取の對語とされる。

【解説】 本條と續く二條には、僧侶・道士の盜罪を取り上げる。

六八三 諸て、僧道、盜を爲さば、常盜と同じ。刺斷し、倍贓を徵し、還俗せしめて、警跡人に充つ。⁽¹⁾

(1) 『元典章』卷四九、刑部一一、刺字、僧人作賊刺斷と關係する。

六八四 諸て、僧道、その親師祖・師父及び同師兄弟の財を盗みし者は、刺を免じ、倍贓を追さず。⁽¹⁾斷罪して、還俗せしむ。⁽²⁾

(1) 『元典章』卷四九、刑部一一、免刺、僧盜師祖物免刺。

(2) 『元典章』の記事からも分かることだが、刺字をせず、追徴を正贓に止めたのは、親屬相盜と同じ感覺を、僧侶の間に認めたことによつてゐる。

六八五 諸て、幼小にして盜を爲し、事發して長大なれば、幼小を以て論ず。⁽¹⁾いまだ老疾ならずして盜を爲し、事發して老疾なれば、老疾を以て論ず。その當る所の罪は贖を聽す。⁽²⁾仍お、刺配を免す。諸の犯罪も、亦たかくのごとし。

(1) ここでは、『唐律』名例三一をふまえ、老小疾病の條件に變

動が生じた場合の刑法上の操作について、盜罪を基調に据え、

規定を行っている。『明律』名例律の犯罪時未老疾(二二)と

關係する。

(2) 『唐律』名例三〇、即ち本刑法志の三一條に則って、老小障

碍者に實刑は科されない。『元典章』卷四九、刑部一一、免刺

老幼篤疾免刺に、強竊盜賊、已得財者、年七十以上・十五以下、

及篤廢疾、不任重刑、合行免刺收贖。と、これを補強する記述

をしている。

【解説】老小廢疾に對する刑法上の減免措置。注意すべき點として

は、名例律の定義する内容が盜罪規定の中に紛れこむかたちを取っ

たため、贖罪の對象が他の犯罪にも及ぶ旨を末尾で改めて斷わらね

ばならなくなっている。

六八六 諸て、年いまだ出幼せざるに、再び竊盜を犯せし者は、仍

お、刺を免じ、罪を贖せしめ、發して警跡人に充つ。

【解説】前條に續き、未成年者の盜罪を取り上げる。ここでは竊盜

再犯の贖罪方法に主眼が置かれている。

六八七 諸て、竊盜、年幼なる者、首爲り、年長なる者、從爲れば、

首爲る者は、仍お、贖を聽し、刺配を免するも、從爲るは、常律

に依る。

【解説】竊盜の共犯において、未成年者が主犯ならば、彼には贖罪

を許し、成人の共犯者にのみ法定刑を科すと規定する。

六八八 諸て、人の身上の錢物を拘摸せし者は、初犯・再犯・三犯

の刺斷・徒流、並びに竊盜の法に同じ。仍お、赦後を以て坐と

爲す。

(1) 拘摸とは、スリのこと。『明律』刑律・賊盜・竊盜(二九二)

に、拘摸者罪同。とある。

(2) 刺斷は、刺字杖斷の略。徒流は、徒刑と流遠を併稱したもの。

この部分は、拘摸の行刑は、竊盜の場合と全く變わらぬことを

言明している。

(3) 恩赦の前に拘摸を働いても、罪に問われず、前科とならない

から、恩赦の後の犯行のみを處斷の對象にするというのがその

趣旨。『問刑條例』(萬曆十三年)の二六一條は、竊盜の刺字を

赦前・赦後でどう適用すればよいかを具體的に記述している。

六八九 諸て、七十二の局を以て、良家の子弟・富商大賈を欺誘し、

錢物を博塞せし者は、竊盜を以て論ず。賊を計りて斷配す。

(1) 『元典章』卷五七、刑部一九、禁局騙の局騙錢物には、杭州

一等無籍之徒、游手好閑、不務生理、尋常糾合惡黨、欺遇良善、

局騙錢物、恃此爲生。其局之名、七十有二。略舉、如太學龜・美人局・調白之類是也。と述べた上で、本條と同じ方向の措置を講じている。因みに、美人局はつつもたせ、調白は調白鈔兩と熟すように、紙幣のすり替え、の意。

(2) 局とは、局騙の謂で、『明律國字解』は「巧なるしかけをこしらえて人をはまらせて、いやともに出さねばならぬやうにすることなり」と、解説は甚だ具體的である。明代になると、誣（たぶらかす）の字と熟して、誣騙なる語句が一般に通用される。博塞は、博打に同じ。

(3) 『明律』刑律・賊盜・詐欺官私取財（二九七）は、若冒認及誣賺・局騙・拐帶人財物者、亦計贓、准竊盜論、免刺。と、本條をふまえた法規を載せる。

【解説】 拘摸・局騙ともに、元代から初めて明確に定義される犯罪概念である。竊取の一部をなし、眞犯竊盜と見なされる點でも、明清時代と變わっていない。

六九〇 諸て、夜、同舟にて橐中の裝を發き、その財を取りし者は、竊盜の眞犯と同一論ず。

六九一 ①諸て、良人を略賣して、奴婢と爲す者は、②一人を略賣すれば、杖一百七、遠きに流す。二人以上は、死に處す。③妻妾

・子孫と爲す者は、一百七、徒三年。④因りて人を殺傷せし者は、強盜の法に同じ。⑤若し略していまだ賣らざる者は、一等を減ず。⑥和誘せし者は、又た各々一等を減ず。及び和同し相い賣りて奴婢と爲したる者は、各々一百七。⑦奴婢を略誘し、貨賣して奴婢と爲す者は、各々良人を誘略するの罪より一等を減ず。⑧妻妾・子孫と爲す者は、七十七、徒一年半。⑨情を知りて娶買し、及び藏匿して錢を受けし者は、各々犯人の罪より一等を遞減す。⑩假に過房・乞養を以て名と爲し、因りて貨賣して奴婢と爲したる者は、九十七。⑪引領の牙保、情を知れば、二等を減ず。⑫價は官に没し、人は親に給す。⑬もし元買の契券なく、有司の輒に公據を給する者、及び告を承け、即ち追捕せざる者は、並びに答四十七。⑭關津の主司、知りて財を受け、縱放せし者は、犯人の罪より三等を減じ、除名して敘せず。檢察を失する者は、答二十七。⑮もし能く告獲せし者は、略人なれば、人ごとに賞三十貫を給し、和誘なれば、人ごとに二十貫、至元鈔を以て則と爲し、犯人の名下より追徴す。財なき者は、徴は情を知るの安主に及ぶ。牙保・應捕人は半ばを減ず。⑯その事いまだ發せずして自首する者、もしくは、同黨能く過を悔いて自首し、その徒黨を擒獲せし者、並びにその罪を原す。仍お、賞の半ばを給す。⑰再犯及び略に因りて人を傷つけし者は、首原の例に在らず。

(1) 『元典章』卷五七、刑部一九、禁誘略、略賣良人新例。以下、

便宜上本文中に付した番號に従つて注を施す。

- (2) 略賣とは、人身の略取賣買、の意。『明律國字解』に「略賣人は、方略を以て平人を引出して賣て人の奴婢とするなり。方略とは、てだて・はかりごとなり」と言う通りである。良賤の認識を除けば、この定義は『唐律』から一切變動していない。『譯註』七、二三〇～二三五頁を參看。

- (3) ①⑥の部分は、②の人数を一切勘案せず、刑罰の組立を異にするとはいへ、『唐律』の賊盜四五の内容とはほぼ一致し、『明律』刑律・賊盜・略人略賣人（二九八）にも概ね受け繼がれてゐる。

- (4) 和誘とは、『唐律』名例三五の疏義に、和誘者、謂彼此和同、共相誘引。とあり、合意の上で誘い出すこと。徂徠の意見も「和同和誘とは、引出さるる人も同心するなり」と、同様である。

- (5) ⑦⑧の奴婢の略賣・和誘については、『唐律』賊盜四六との關係もさることながら、『明律』の前掲條文には、若略賣和誘他人奴婢者、各減略賣和誘良人罪一等。とあり、この條の記述と軌を一にしている。

- (6) 良人・奴婢を問わず、略誘の事情を認識しつつ、人身を買ひ受け、或いは保管することの處罰規定を設けた一項である。『唐律』賊盜四六、第二項をふまえる。前掲『元典章』は、遞減、謂知情娶買、減犯人一等、窩藏人、又減一等。と注記する。

- (7) このくだりは『唐律』賊盜四六の、即私從奴婢買子孫及乞取者、準盜論。乞賣者、與同罪。を一層明瞭に言い換えたもの。『明律』の略人略賣人條に殆ど同じ規定がある。假以過房・乞養爲名、即ち養子縁組を口實に人身賣買を行うことが厳しく規制される。六六六條を參看。

- (8) 『明律國字解』に「牙は口入なり、保はうけにんなり」とあるように、牙保は人身賣買を仲介するバイヤー。元代において、政府の認可を受けた人口官牙のほかは、軀口つまり奴婢の取引を嚴禁されていた。引領とは、手引きのこと。

- (9) 正しくは給親完聚と書く。『明律國字解』は「親るいへわたして一所にする」と記す。違法な取引が前提條件のため、贓は沒收となるのである。

- (10) 軀口の取引は、立契賣買を原則とし、契稅と引換に稅務から官印を押捺され、發效する仕組みであった。むろん官牙人の立會の下で行うのを條件とした。『元典章』卷二二、戶部八、契本に詳細な規定がある。

- (11) 注(1)の『元典章』は、謂關津渡口、應盤去處。と注記する。

- (12) 知情安主とは、『明律』の知情窩主に相當する。略誘と知りながら、人身の藏匿・窩藏に手を貸した者のこと。

- (13) 本刑法志の五九七條と同じ原理に立っている。

(14) 首原、即ち自首による免刑を認めぬ理由は、本條の④の部分、並びに『元典章』卷四九、刑部一一、強竊盜、強竊盜賊通例の第四條に依據する。

【解説】 本條は人身の略取・賣買に眼目を置き、基調に於て『唐律』に準據した構成を取っている。その一方、多岐に亘る内容を、「諸の」に始まる一つの法文に括ってしまい、元來性格の違う規定をも一緒に包み込む結果となっている。しかし、これは箇條書き形式を旨とする條畫との本質的な違いに基づくものではなく、條格なる法規の表面上の差異に過ぎない。こと元朝においては、例えば敕令格式のように、法を形式上嚴密に區分するといった、その動機からして極めて希薄であつたからである。

六九二 諸て、婦人、良人を誘賣し、罪は應に徒とすべき者は、徒を免す。⁽¹⁾

(1) ここでも、婦人は徒刑に處さないと原則は徹底している。

六九三 諸て、職官、良人を誘略して奴と爲し、革後に首さざれば、仍お、除名して敘せず。誘略する所の人は親に給す。⁽¹⁾⁽²⁾

(1) 『元典章』卷五七、刑部一九、禁誘略、品官誘略良人爲駟と關係する。

(2) 革後は、赦後に同じ。恩赦の發令にも拘わらず、良人の誘略

を申告しなかつた違法性が問われているのである。

六九四 諸て、兄、牛を盗み、その弟を脅して共に宰殺せし者は、弟は坐せず。⁽¹⁾

(1) 『唐律』賊盜三二に定義する牛や馬を盗んで殺した罪を下敷きに、兄に宰殺を強要された弟の刑事責任が問題とされた事例である。

六九五 諸て、白晝、驛馬を剽奪すれば、首爲る者は、死に處し、從爲るは、一等を減じ、遠きに流す。⁽¹⁾

(1) 六〇六條及び六〇八條に見た白晝搶奪を、驛馬の奪取、それも共犯事件に當てはめた例。

六九六 諸て、親屬の馬牛を盗み、事いまだ覺われずして自首し、價を償うを願ひ、從われざれども、既に官に送らば、仍お、自首を以て論じ、刺を免す。⁽¹⁾

(1) 家畜の盗みと親屬相盜の複合したケース。たとえ首服が被害者に拒否されようと、盜罪の自首は認めるといふのが要點。

【解説】 以上の三條は、偷頭口つまり家畜の盗みについての具體例。

六九七 諸て、強盜、劫を行ひ、主の逐う所と爲りて、分散奔走し、

首爲る者、隣人を殺傷すれど、從爲る者、知らざれば、事主を殺傷するに首從を分たざるを以て論ぜず。首爲る者は、死に處し、從爲る者は、杖一百七、刺配す。⁽¹⁾

(1) 『唐律』賊盜三四の問答、及び捕亡三と若干關連する。これも現實の事件をもとに敘述されており、六九八條の應用例と見做しうる。

六九八 諸て、竊盜、財を棄てて拒捕し、事主を毆傷せし者は、杖一百七、刺を免す。⁽¹⁾

(1) 『唐律』賊盜三四の律本文注を部分的に獨立させた條文で、竊盜が發覺し、事主の追捕にあうことが前提條件となる。處罰は捕亡二に依據するものとされ、『明律』二八九條の強盜・第四項と四一二條の罪人拒捕との關係にも受け繼がれる。

六九九 諸て、盜を爲すに、先に竊、後に強たり、赦に會わば、その下手して事主を殺傷せし者は赦さず。⁽²⁾餘は仍お刺してこれを釋す。

(1) 前條と同様、『唐律』の賊盜三四をふまえ、竊盜の發覺に伴い、威力を行使すれば、それは強盜と見做される。『明律』の二八九條も全く變わらない。

(2) 下手殺傷。『唐律』鬪訟七によれば、殺人及び傷害の犯行に

於て直接に結果を生ぜしめる行爲を含み、且つそれより若干廣い概念。『譯註』七の九七頁や五九九條注²を參看。

七〇〇 諸て、盜賊、分贓均しからず、從賊が首さんと欲し、首賊の殺す所と爲る者は、仍お、謀・故殺人を以て論ず。

七〇一 諸て、盜賊、赦を聞き、捕盜の人を故殺する者は、赦さず。

七〇二 諸て、強・竊盜賊を藏匿⁽¹⁾し、主謀糾合し、指引して上盜せしめ、財物を分受する者あらば、身行わざるといへども、合に首爲るを以て論ずべし。⁽³⁾若しいまだ行盜せず、及び行盜の後、情を知りて藏匿するの家は、各々強・竊の從賊より一等を減じて科斷し、刺を免す。⁽⁴⁾その已に斷を経るも、怙終して改めざれば、從賊と同じ。

(1) 『元典章』卷四九、刑部二一、窩主、強竊盜賊窩主。『明律』なら、三〇一條の刑律・賊盜・盜賊窩主に相當する。『唐律』には明確な定義が無く、恐らく賊盜五〇の範疇で處理されたものと思われる。

(2) 藏匿は、窩藏ともいい、罪人を匿う意味。これには『唐律』から嚴格な定義があつて(捕亡一八)、窩主といへば、盜人宿をさす。

(3) 前掲『元典章』は、主謀を起意と表記し、『明律』では造意の字を當てている。『明律國字解』は、「強盜なれば強盜、竊盜なれば竊盜、其くわだてとり起こしをしたるものなり」と述べ、「身雖不行は、其身は盜に出ずとも」、窩主は首犯と斷ぜられるとする。もし分贓の要件を満たさなければ、從犯と見做され、元謀（造意）とならないのは、本條とて變わらない。指引は、教唆、指圖の意。

(4) 『明律』三〇一條においては、罪止杖一百と刑罰は甚だ輕い。この箇所は『唐律』の捕亡一八をはじめ、『明律』でも、刑律・捕亡の知情藏匿罪人（四一七）とも若干關連する。

(5) 『書經』舜典の「怙終賊刑」、孔安國の傳の「怙終自終、當刑殺之」にもとづく。元朝以降、累犯不悛といえ、再犯・累犯を表す時の定型句となる。

七〇三 諸て、謀りて人の質する所の田を圖らんと欲し、輒に人を遣て、贖田の價を強劫せしめたる者は、主謀・下手をば一體に刺斷す。その卑幼が尊長の爲めに驅役せられし者は、刺を免す。⁽¹⁾

(1) 典質に付された土地を手に入れようとして、買戻し金を不當にも奪取させれば、教唆者も實行犯と同罪に問われるとの趣旨である。卑幼云々の件は、こうした事件が得てして一族ぐるみで起こされることを物語っている。

七〇四 諸て、盜賊、應に正贓及び燒埋銀を徵すべきに、貧にして以て備うなければ、それをして折庸せしむ。⁽¹⁾ 凡そ折庸は、各處の庸價を視て、これを會す。⁽²⁾ 庸滿つれば、元籍に發し、警跡人に充つ。婦人は日に男子の工價の三分の二に準ず。官錢なれば旁近の處に於て役し、私錢なれば事主の家に於て役す。⁽³⁾

(1) 『元典章』卷四九、刑部一、評贓、盜賊無償折庸、並びに同書卷四三、刑部五、燒埋の燒埋錢貧難無追。官への沒收に限られるが、盜犯が現有財産を以てしては、正贓の追徵に應じきれないときは、『唐律』においても、官役折庸とよぶ勞役の賃金で辨濟するしくみであった（『譯註』五、一九五―一九七頁）。本條の趣旨は、ほぼそのまま『明律』名例律・給沒贓物（二三）に引き繼がれている。

(2) 庸價計算については、前掲書の新集刑部、探馬赤軍人逃驅に、窩藏之家、曾將逃驅備使者、依鄉原例、徵理傭工之價、給付本使。とある記述が参考となる。『明律』の前掲條項では、雇工錢は日給で銅錢六十文と固定されている。

(3) 官私折庸については、同上書卷四三、刑部五の燒埋、無財可陪家屬典雇も若干參考になる。

【解説】 以下七條には、正贓と倍贓、つまり盜賊の沒收もしくは原主への返還に關する雜多な條文が集められている。

七〇五 諸て、盜賊、財を得て、酒肆・倡優の家にて用いるとも、情を知らざれば、止だ本盜より追徴す。その盜む所、即し官錢なれば、情を知らずといえども、用うる所の家より追徴す。もし用つて貨物を買わば、その貨物を還し、元贓を徴す。

【解説】 官物が盜難にあい、しかも費消されたときは、善意の取得者として元贓の追徴を免れないとの特別條項を定める。

七〇六 諸て、奴婢、人の牛馬を盜み、既に斷罪し、その贓の徴すべき者なければ、その人を以て物主に給す。その主の贖を願う者は聽す。⁽¹⁾

(1) 奴婢たる軀口として、盜罪を犯せば、正贓の返還を免れない。

七〇八條の官奴婢と違つて、一頭につき九頭の倍贓も負擔を強制されたに相違あるまい。但し、賠償能力がなければ、彼ら自身も一個の資産として追徴の對象となるが、その際には、主人の處分權は二次的な意味しか持たない。

七〇七 諸て、官錢を盜み、追徴すれど、いまだ盡くさず、官に到りて禁繫せらるること既に久しけれど、實に折償すべきなき者は、これを除く。

【解説】 六一二條と同文。贓の追徴に着目して、改めてここに挿入したと思われる。

七〇八 諸て、係官の人口、人の牛馬を盜まば、倍贓を徴するを免す。⁽¹⁾

(1) 官奴婢が徴贓の際に受ける特典を逃べる。七〇六條の私奴婢とバラレルな關係にある。

七〇九 諸て、盜賊の正贓、已に徴して主に給し、倍贓の追理すべきなき者は、徴を免す。⁽¹⁾

(1) 盜罪では倍贓を徴するといつても、その實効性は甚だ疑わしく、すでに唐代後期には殆ど行われなくなつていたという『譯註』五、一九七頁。

七一〇 諸て、盜賊の正贓、或し人に典質し、典主、情を知らず、その贓を歸さば、仍お元價を徴還す。⁽²⁾

(1) 『元典章』新集刑部、盜賊遇革贓給主稟例と密接に關係する。

(2) 注(1)の『元典章』によれば、贓物と知らず取得した典主は、いちど官司に正贓を納め、犯人から沒收した典質の代金を改めて受け取るしくみであつた。

七一一 諸て、遐荒の盜賊、駝・馬・牛・驢・羊を盜み、倍贓の徴すべきなければ、就に發して配役・出軍せしむ。

(1) 『元史』卷二七、英宗紀一、延祐七年六月己未に云う、定邊

地盜孳畜罪犯者、令給各部力役。如不悛、斷罪如內地法。と密接に關係する。遐荒とは、國はずれ、蠻夷の地、の意。

七一二 諸て、盜、先犯の後發せしが、後犯の先發せしと罪同じき者は、論ずるなかれ。⁽¹⁾

(1) これは、本刑法志三〇六條ならびに『元典章』卷四六、刑部八、取受の、諸犯二罪俱發、以重者論と同じ論理を盜罪に當てはめているに過ぎない。

【解説】 以下に再犯を扱っていることから言えば、本條は些か唐突の感を否めない。複數の犯罪を意識したのであるが、次元の違う問題である。

七二三 諸て、先に強盜を犯して、刺斷せられ、再び竊盜を犯さば、止だ竊盜を再犯するに依りて、刺配す。

(1) この一條も、六三八條とあい似た前提條件を想定してよからう。

七二四 諸て、出軍の賊徒、逃に在らば、初犯は杖六十七、再犯は二等を加え、罪は、一百七に止む。仍^なお、元流の所に發して、出軍せしむ。⁽¹⁾

(1) 『唐律』捕亡九や『明律』刑律・捕亡・徒流人逃(四一四)

の枠内に入る條文。奴兒干などへの出軍にあたっては、流囚の逃亡は、頻繁に起こつたらしく、治安維持の觀點からも、政府はその對策に神經を使つたと思われる。

七一五 諸て、強・竊盜の警跡人に充てられし者は、五年犯さざれば、その籍を除く。⁽²⁾その能く強盜一名を告發及び捕獲せし者は、二年を減ず。二名なれば五年に比す。竊盜一名は、一年を減ず。

應に籍より除くべきの外、獲る所多き者は、常人の獲盜に依りて理賞す。⁽³⁾數に及ばざる者は、憑を給して通理す。籍既に除かれ、再犯すれば、終身これを拘籍す。凡そ警跡人は緝捕の外、有司、差遣出入し、その理生を妨ぐることなかれ。⁽⁴⁾

(1) 『元典章』卷四九、刑部一一、警跡人、盜賊刺斷充警跡人。

(2) 警跡人は、刺字を抹消したのち、警跡冊籍から除籍される。但し、保護觀察に必要な期間は、元代の五年に對し、明代では三年と短縮されている。

(3) 『元典章』卷四九、強竊盜賊通例の第十條は、諸人告獲強盜、每名官給賞至元鈔五十貫、竊盜二十五貫、親獲者倍之。と定める。同書の警跡人、警跡人獲賊功賞も同じ方向ながら、今後、如能自首及捕獲竊盜者、每一名減一半、伍名除籍。と付け加えている。二八〇條注(5)も参照。

(4) 注(1)の聖旨條畫は營生につくる。理生は生理に改めるべ

きである。官司が警跡人を警吏以外の用途に安易に使い、時にたかることは、日常茶飯だったろう。

七二六 諸て、警跡人、隣佑に告知せず、輒ふだに家を離れて經宿し、及び遊惰にして生産作業を事とせざる者あらば、有司これを究む。隣佑の覺察を失する者あらば、亦たこれを罪す。^①

(1) 『元典章』卷四九、刑部一一、警跡人轉發元籍が主に關連し、同卷の拘鈴不令離境も參考になる。司縣の有司では、警跡人を半月にいちど出頭させ、動靜を監視するが、平素は社長・主首をはじめ隣保組織がこの任に當たっていた。

七二七 諸て、警跡人、命を受けて、盜を捕え、既にその盜を獲るに、却て恨を挟み、その盜を殺し、その財を取らば、平人、罪ある賊人を殺せしを以て論ぜず。^②

(1) 昔の盜人の關係を生かして、警跡人を密偵捜査や犯人逮捕に使役する以上、この種の事件は、不可避だったと想像される。

(2) 『唐律』賊盜二二の、諸夜無故入人家者、笞四十。主人登時殺者、勿論。……其已就拘執而殺傷者、各以鬪殺傷論、至死者加役流。と對應する。

七二八 諸て、色目人、盜を爲さば、刺を免じて科斷し、本管官司

に發し、法を設けて拘檢す。^①限内に改過せし者は、その籍を除く。本管官司の發付すべきなき者は、有司より警跡人に收充す。^②

(1) 『元典章』卷四九、刑部一一、強竊盜の流遠出軍地面、及び舊賊再犯出軍と關連する。色目人として、盜罪を犯せば、實刑に甘んじなければならぬが、刺字のみは犯數と關わりなく免除される。五九四條注(5)を參照。

(2) 一般に色目人は、警跡人としても、管民官司の監督を受けず、所轄部局によつて緩やかに規制されるに過ぎなかったことを窺わせる。

七二九 諸て、盜を爲し、刺を經るに、自らその字を除き、再またに非理を犯す者は、補刺す。五年再犯せず、已に除籍せられし者は、補刺せず。年いまだ滿たざる者は、仍なお補刺す。

(1) 警跡人が保護觀察中に無斷で刺字を抹消することの取締條項。『明律』刑律・賊盜の起除刺字(三〇四)は、凡盜賊曾經刺字者、俱發原籍收充警跡。該徒者、役滿充警、該流者、於流所充警。若有起除原刺字樣者、杖六十補刺。と定める。

七二〇 諸て、盜賊、赦前に、ほし擅に刺する所の字を去るも、再犯せざれば、赦後、補刺せず。^①

(1) 『元典章』新集刑部の例前除元刺字難補刺と關係する。同書

卷四九、刑部一一、強竊盜、強竊盜賊通例の第四條も参考になる。

七二一 諸て、應に左右臂に刺すべきに、臂に雕青ある者は、上下空歇の處に隨い、これを刺す。

【解説】 これなどは、個別の事情に應じて刺字の方法を具體的に示したにすぎず、次の二條と共に、前記各條と同じ平面に立つ法規とは言い難い。

七二二 諸て、竊盜を犯し、已經に刺臂せらるれども、却て徧くその身に文して、元刺を覆蓋し、更に竊盜を犯さば、手背に於て、これを刺す。⁽¹⁾

(1) 『元典章』新集刑部、再犯賊人の再犯賊徒斷罪遷徙の例によれば、手背に刺字はされていない。所定の刺字が困難なばあい、實際どこに施すかについては、現場官司の裁量がかなり働いたものと想定される。

七二三 諸て、竊盜を累犯し、左右の項・臂の刺徧くして、再犯せし者は、項上の空處に於て、これを刺す。⁽¹⁾

(1) 『元典章』卷四九、刑部一一、刺字の再犯經革刺左項も参考になろう。

七二四 諸て、子盜みて父首し、弟盜みて兄首し、壻盜みて翁首さば、並びに自首せし者罪を免すると同じくす。⁽¹⁾

(1) 『元典章』卷四九、刑部一一、首原、父首子爲盜免罪と密接に關係する。

七二五 諸て、奴盜みて主が首せし者は、斷罪し、刺を免す。倍贓を徵さず。仍お、その主に付して奴と爲す。⁽¹⁾

(1) 『唐律』名例三七の律疏に、盜者自首、不徵倍贓。とある規定をふまえる。

七二六 諸て、脅從せられて上盜すれど、贓を受けざりし者は、止だ首さざるの罪を以て、これを罪す。杖六十七、刺せず。⁽¹⁾

(1) いくら脅迫された盜みであらうと、贓物を受け取ってしまったえば、これでは濟まないであらう。不首之罪とは、六四〇條の「不曾分贓、而容隱不首者、杖六十七、不刺」を指す。

七二七 諸て、盜を爲すも、過を悔い、盜む所の贓を以て主に還す者は、罪を免す。

【解説】 悔過還主とは、『唐律』の定義によれば、元來枉法・不枉法などで使われる用語で、被害者に罪狀を告白し、贓物を返還することでは同じであっても、強盜・竊盜・詐欺における首露・首服と

は嚴密に區別される（名例三九）。これは『明律』名例律の犯罪自首（二四）でも變わらぬが、元代がそうであるように、悔過還主者、聽減本罪三等坐之。の原則は消え去り、自首と同様、刑罰は全免される。六五條・八五條を參照。

七二八 諸て、盜を爲し、財を得し者、涉疑・根捕あるを聞きて、却て賊を以て主に還す者は、二等を減じて罪に論じ、徒・刺及び倍贓を免す。

【解説】『明律』犯罪自首（二四）の、若知人欲告而於財主處首還者、亦得減罪二等。と同じ趣旨を盛る條文。倍贓を徵收しないのは、首服（悔過還主）に準ずると見なされるからである。八五條を參照。

七二九 諸て、竊盜、事主の盤詰に因り、自ら首服すれど、その贓いまだ主に還さざる者は、贓を計り、二等を減じて、罪を論じ、刺字す。⁽²⁾

(1) 盤問と同じく、こまかに吟味すること。盤は、反覆の意味。

(2) 七二七條を補足し、贓物を返還せず、首服の條件が充足できなければ、七二八條より重く處罰された。

七三〇 諸て、盜賊、首爲る者、自首すれば、罪を免す。從爲る者、首さざれば、仍お全科す。

【解説】この條文は、盜罪を共犯と自首の二つの要素から組み立てられている。

七三一 諸て、無服の親、相に盜を爲すを首さば、止だその罪を科し、刺配・倍贓を免す。

【解説】七二八條と同じく、ここでも刺字・配役が減免されている。前者については、親屬相盜例によると考えられるが、後者の徒刑は、特に盜罪を對象とする付加刑であるという以上には、明確な答えを出せない。

七三二 諸て、竊盜、過を悔い、贓を以て主に還すも盡くさず、その餘の贓、猶お刺罪に及ぶ者は、仍おこれを刺す。

【解説】これなどは、贓物の返還が適切に行われず、悔過還主の條件を充足していない例で、七二七條のヴァリエーション。六五條や七二九條も關係する。

（徳永 洋介）